番紅花

大正三年二月二十七日第三種郵便物認可
大正三年三月二十五日印刷納本(毎月一日一回發行)
第一卷第二號

四月號

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

大正三年四月一日發行

番紅花

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

番紅花 第一巻第二號

目次

毫先(Melchior Lengyel)……森林太郎……(一)
春の小曲(詩)……尾竹一枝……(一〇)
レオナルドー・ダ・丼ンチの言葉……阿部次郎……(一四)
姉と妹(小說)……小笠原さだ……(二〇)
マカールの夢(Korolenko)……青山菊榮……(四二)
さようなら(小說)……伊達虫子……(八二)
パルシフアルに就て……原信子……(九七)
ワグネル、パルシフアルの筋書……原信子……(一〇四)
さくらの花(小說)……尾竹ふくみ……(一一〇)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

海外通信……O・P・Q……（一二五）
いい小説家といい息子と（Oscar Wilde）……佐藤春夫……（一二九）
影のかげ（詩）……八木澤……（一三九）
「ピエールとジヤン」を讀みて……八木麗……（一四三）
苹果の木蔭（小説）……神近市……（一六〇）
雜感……尾竹一枝……（一七七）
米國歌劇界……マリー……（一八一）
海外消息……リツスラー……（一八二）
編輯室にて……同人……（一八三）

挿繪

扇をもつた女……Marie Lauenein.……（一）
歌劇パルシフアル第二幕目舞臺面……（九七）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ワグネル……………………………………（一〇五）
若い娘達…………………… Marie Lauencin. ………（一一七）
表紙……………………………………富本憲吉
扉繪 温暖……………………………………同
カツト サフラン……………………………………恩地孝四郎
裏繪 女の顔……………………………………富本憲吉

WOMAN WITH FAN. MARIE LAURENCIN.

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

毫光

(Melchior Lengyel)

森林太郎譯

これは己の空に憑つて作り出した話ではない。己は「千一夜」の、幻怪で而も特異な物語の中で、端なくもこれに撞着した。己は只貴重な指環の白銀の座の中央に、紅玉が嵌めてあるやうに、此話の中に盛つてある教誨を引き立たせるために、少し筆削を加へたばかりである。

昔の事である。イスパハンに駱駝を牽いて歩く男がゐた。毎日駱駝に附いて街道を往來してゐる。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

これは随分厭な渡世である。殊に年が若くて、外の方へ考の向いてゐる男のためには厭である。

少年は強情に朝から晩まで一人の娘の事ばかりを思つてゐる。それは毎日果の園で逢ふ娘の事である。

晝の間は、少年は默つてゐる。併し晩になると、火の燃え立つやうに興奮して、人を魅するやうな詞を出す。少年と娘との話は數時間續くのである。

フイルツアアと云ふ此娘は、可哀らしい、無邪氣な子である。少年の言ふ詞が餘り好くはわからない。併し娘のためには、詞の意味は餘り重要なものではない。娘には少年の聲の響が嬉しい。聲に籠つてゐる親しさが嬉しい。其聲を發する時の少年の震慄が嬉しい。

少年は感心に克己の徳を守つてゐる。その拘束を加へぬものは只詞だけである。詞の上では熱情の迸り出るに任せるが、其他は堅固に自ら持してゐる。只稀に微(かすか)なキスを娘の唇の上に囁き掛けるに過ぎない。

二人は用心深いのである。少年は少女の成熟を氣長に待つてゐる。鄭重に保護して、妻に迎へる時期の到るのを待つのである。二人の愛情がどの位深いと云ふことは、これがために語を費すのが無駄な位である。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

同じ頃に、イスパハンに賢い回敎信者がゐた。今は老人であるが、若い時から産業に精勵して、大きい財產を作つて、さて隱居したのである。今は毎日家の前に坐して沈思に耽つて、烟草を燻らしてゐる。

此信者が日々自分の前を走つて通るフイルツアアを見た。驚歎すべき程完美に發育した少女の體が目に留つた。そして或る日、烟管を口に銜へてゐて、倏ちこんな事を想ひ浮べた。己は老の闌を借る前に、此娘を妻に持たう。これ程美しい、神の思召に愜ふ事は、外にはあるまい。己はあの照り赫いてゐる少女の色を翫び、あの若々しい肌から立つ匂を味はう。戀愛は最も甘い果である。此果で、己は最後の渇を醫さう。唇と胸とに、この甘い感じを持つて、己は老いて行き、終に永遠な眠に入らう。信者は此一時の落想を更に反復思念して、暫くの間其利害を較量して見た。

翌日の事である。娘は信者の前を、いつものやうに走つて通つた。體を穩に搖る步きつき、顏の光澤、瞳の赫きが、信者の目に入つた。娘は果の園へ、駱駝牽の少年に逢ひに往く途中である。信者はこれを見て、急に決心して身を起した。そして娘の兩親なる翁媼の所へ往つて、手短に結婚を申し込んだ。

翁媼は餘りの嬉しさに、殆ど昏倒せんとして、信者の詞を聞いた。それは翁媼のためには貧苦の境界を脱する詞だからである。翁媼は信者の手にキスをしようとさへした。そして娘に相談もせずに、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

即時に承諾した。二人は婚禮の日を取り極めた。信者は光陰の過ぎ易いことを知つてゐるので、頗る期日を縮めた。

娘は歸つて來て、決定した事實の前に立つた。そして哀しげに泣いた。併し娘は翁媼をひどく愛してゐる。娘は神の惠を受けた、痴（おろか）な子である。そこで少しばかり煩悶しただけで、事實の前に膝を屈した。

さて翌晩駱駝牽の少年に逢つた時、娘はきのふの恐ろしい出來事を話した。少年がどれ程錯愕したかは、想像するに餘ある。詞は口の内に凝り、息は詰まつた。さて少年は一つの誓をした。それはフイルツアが信者と婚禮をする晩に、自分は首を縊らうと云ふのであつた。

氣の毒な娘はひどく驚いた。自分が婚禮をする晩に、少年が體を紫色に腫れ上がらせて、一筋の繩にぶら下がつてゐるだらうと云ふ想像は、娘のためにはひどく殘酷に思はれた。そこで娘も返報として一つの誓をした。これは少し輕卒であつたやうに思はれる。併し兎に角、天にゐる神に掛け、地獄にゐる惡魔に掛けて、立派に誓つた。それは信者と夫婦になる最初の夜は、きつと少年の家で明かさうと云ふのであつた。

さて二人はつらい涙を流して別れた。所が娘は正直なばかりではない。同時に癡（おろか）である。それだか

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ら次の晩からは決して逢つて話をしなかつた。

此時から信者は娘の兩親の家をおとづれることにした。最初は娘が信者を憎がつて、拗ねてゐた。そのうち兩親は娘をなだめた。そして善人で賢者なる婿は、娘に面白い話をして聞せた、娘には段々信者が氣に入つて來た。側に倚られると、退いたのが、退かなくなる。話を面白がつて笑ふやうになるとう〳〵來るのが遲いと、「けふはどうなされたやら」と問ふやうになつた。賢者の寛大と冷靜とが娘を感化したのである。それにどんな娘だつて、生活の舵を智慧と財產とのある男の手に托したくないものがあらうか。

娘は次第に若い駱駝牽の事を忘れた。

婚禮の日が近づいた。娘の從順になつたのを、兩親も婿も此上もなく喜んだ。

當日信者は費用を辨じて、兩親を主人にして、大宴會を催した。此催をする時、女の態度は從順で、雙方の間は總て旨く折り合つてゐた。花よめは隣席の婿を、優しい目で見て、折々白い手で、婿の白い鬚をさすつた。食卓から客の起つたのは、最夜中近い時である。これから婿は花よめを家へ連れて歸るのである。

フイルツアアは往來に出た時、忽ち過去の一切の事を憶ひ出した。駱駝牽の事、誓の事、總てが女の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

胸に浮んだ。そして若い駱駝牽がもう繩にぶら下がつて、唇が紫色になつてゐるのが目に見えるやうで、女は恐ろしくてならなくなつた。そこでひどく哀しげに欷歔をしはじめた。婿はやさしく、この卒爾な愁歎の理由を尋ねた。女は正直で、そして癡（おろか）である。何一つ殘さず白狀してしまつた。女は婿に言つた。今夜はあの男の所で明かさうと誓つた。誓を破つたら、男が死ぬだらう、死んだら、自分は片時も心が安まることがなくなつて、しまひには自分も死ぬだらうと云つた。そして輕卒な誓をしたことを詫びて、胸の裂ける程泣いた。婿はすつかり感動させられてしまつた。

新夫婦は街上に立つてゐる。温和な、靜謐な夜である。

婿は暫く物を案じながら、手づから紙巻烟草を拵へて喫んだ。婿は眞面目にかう考へた。此女は無邪氣である。そして眞に正直で、まだ世間の汚濁に染んでゐない。そこで此女と、これから一しよに暮らすに、自分が初めての男だか、さうでないかと云ふことは、餘り重大な問題ではない。それよりは此女が輕卒な誓を氣に掛けて、今後惶怖の態度をしてゐるかも知れぬと云ふことが、餘程重大であるさ考へた。これは婿が人世の泡沫夢幻を閲し盡して來た人だからである。

婿は手製の紙巻烟草を二口三口吸ふ間に、これだけの事をすつかり考へた。そして女に、落ち着いた小聲で、條理正しく、かう云つた。お前は神のまに〳〵往くが好い。誓を守つて、若者の所へ往くが

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

好い。己は決してあらがはない。併しあすの朝早く戻つて來い。只此事を誰にも言ふな。己の方でも、お前が今夜の罪を贖ふやうに、末長く貞實に己に連れ添つてくれるなら、此事を綺麗に忘れてしまはう。賢者はかう云つて、花よめの額にキスをして、街上に立たせて置いて、ひとり緩かに歩を家の方へ運んだ。

花よめはひとり街上に取り殘された。式に着る白服を着て、婿に貰つた寶石で、頸や腕を飾つてゐる。異常な場合に、特に思慮を費すやうな、複雜な機關は、癡な此女の頭腦には備はつてゐないので、此女はちよいとたゆたつたばかりで、そろ〳〵駱駝牽の家をさして歩き出した。貧乏な少年は遠い郊外に住んでゐる。そこへ往く道は曲りくねつた、狹い、暗い道である。

夜の霧に漂ふ、白い、怪性の女のやうに、フイルツアアは闇夜の細道をたどる。そこへ刧盜が飛んで出た。物蔭から窺つてゐて、赫く寶石を奪ひに出たのである。盜は女の側に來て、寶石よりも女の目が赫き、衣裳よりも女の肌が白いのに氣が附いた。そこで物を取らうと云ふ第一の考をすぐに棄てて、盜は女を我物にしようと云ふ第二の考に移つた。併し盜はあら〳〵しい振舞はしなかつた。聲をやさしくして、どこへ往くか、闇夜に何をするかと尋ねた。

女は無邪氣である。そして癡である。そこで盜を見て、格別驚きもせず、又問はれて當惑しもせずに、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

すぐにさつぱりと一切の事を打ち明けた。けふ婚禮をした。併し其前に今夜を一しよに明さうと誓つた男がある。そこへ夫の許を得て往くと云つたのである。盗は奇怪な此話を聞いて、ひどく驚いた。女が譃を言ふとは思はれない。其詞がいかにも直截であるからである。盗は原來頗る善人であつた。只日々の食を得ようとして、劫盗（をひはぎ）をしてゐたのである。そこで盗はちよつと途方に暮れた。それからかう考へた。切角の珍らしい此出來事を、少しでも側から妨げるのは面白くない。それに女の素直な事、少年の戀の熱烈な事、年を取つた婿の犧牲の大きい事、此等一切が皆結構である。どうもこれを聞いては、其婿に負けたくないと考へた。一體「善」は傳染性のものである。それで盗はかう考へたのである。

盗は女をどうもせぬことに決心した。そればかりではない。若し外の盗が女の邪魔をしてはならぬと思つて、とう〳〵女を駱駝牽の家の前まで送つて行くことにした。

女が式の白服を着て夜來た時、少年がどの位驚いたかは、想像することが出來る。少年は無論今夜首を縊らうとは思つてゐなかつた。併し又女が誓を守つて來ようとも思つてゐなかつたのである。暫くして少年が落ち着いたので、女は今夜の一部始終を話した。夫に白状した事、夫が許して來させた事、途で盗に逢つた事、盗が親切な義俠心を起して、自分に指一本障らずに、此家の戸口まで送つて來

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

てくれた事を話した。

少年は眞の正直者である。此話を聞いて、ひどく夫たる信者の犠牲に感じた、又それよりも切に夫と盗との寛大に服した。そして自分も夫と盗とに負けたくないと決心した。

少年はすぐに女の手を把つて、夫の家へ連れて往つた。

話はここに終る。そこでこれに附け加へて言ふべき事は、只一つしかない。此女が無事に此夜を過したのは、武器を以て警護せられたのでもなく、其他の人力を以て庇保せられたのでもない。此女を救つたのは、廣大無邊な「癡さ」で、それが闇夜の道を辿る此女の小さい頭の周圍に、毫光の如くに赫いてゐたのである。女はどうかすると癡であるが、決して側からそれを氣の毒がるには及ばない。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

春の小曲

尾竹一枝

I

春がきた
春がきた
鳥がないてゐる
綺麗に花の咲くなかを
小鳥がないてゐる
綺麗に花のさくなかを

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

若くて美しいラッシー
紫花が匂つてゐる
葉はやさしげに輝いてゐる

明い暖い國の
若くて美しいラッシー
自由で豊かで生々してゐる美しいラッシー
春の歌や輝きや喜びが
あらゆる優しい感情を胸に充たせて
眩しいほど心からの愛情を纏つて
いとしいお前の優しい眼に燃えてゐる

若くて美しいラッシー

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

葉は優しげに輝いて
美しい花がずらりと咲いてゐる
綺麗に花の咲くなかを
小鳥がみんなでないてゐる

春がきた
春がきた。

春の夜花の咲く室で

II

美しい農場に
澤山春の花がさいてゐる

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

蒼空は朗かに晴れ輝いて
日影にみちた空氣のなかを
鳥が嬉しさうに囀つてゐる
牧場からそれにこたへるように
歌が聞こえてくる
羔山羊を牧ふ少年の群の
晴々と澄んだ清い聲の歌が
柔い芽草の匂ひを撫でて——

Yrad Branhe の咲く夜

I　春がきた

II　牧場の春

ラツシーは乙女子と云ふこと

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

レオナルドー・ダ・ヸンチの言葉

阿部次郎

畫家は自然と闘ひ、自然と競爭する。

畫家が既去に作られた繪畫ばかりを模範としてゐれば、繪畫は一代より一代と墮落して、自分を失つてしまふやうになること。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

畫家が他の繪畫をとつて之を模範とする時、此畫家の描く繪畫は、價値の劣つたものであるに違ひない。之に反して自然中の事物を師として學ぶ時、彼から生れるものは善良な果實であるであらう。我等はその實例を羅馬時代以後の畫家に就いて見る。彼等は前後相踵いで他を模倣して、一代より一代に、この藝術を墮落に導いたのである。彼等の後にフイレンツエ人ジヨツトオが出た。彼は唯山羊や、山羊に似た動物のみの棲んでゐる寂しい山岳の間に生れた――自然は彼を驅つて、此の藝術に赴かしめた。彼は山高き處、岩の上で、自ら觀察せる山羊の姿態を素描することを始めた。此の如くにして、彼は目に觸れる一切の動物を描き出したのである。此の如くにして、彼は、長い間の研究の後、單に同時代の大家のみならず、又過去數百年間の大家をも凌駕するやうになつたのである。此の人の後、凡ての人が先人の繪畫を模倣したために、此藝術は又墮落した。さうしてマツサツイオと綽名されたるフイレンツエ人トマソーが現れるまで、一世紀から一世紀と墮落の度を深めて行たのである。トマソーに到つて、彼はその完全なる作によつて、自然――大家の訓育者――以外のものを模範とする畫家の努力の無効なことを示した。

私は數學上の事に就いても亦同樣の事を云はうと思ふ――單に著作者を研究して自然の作を研究しない者は、その道にかけての孫であつて、同じ自然の――善良なる著作者の訓育者の――子ではな

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

い。嗚呼、自然を學ぶ者の上に——而して同じ自然の弟子なる著作者を閑却する者の上に——非難を加ふる徒の此上もなき愚かさよ。

憐む可きかな、その師の上に出でざる弟子は。

眼の練習と判斷を便りにするばかりで、理性を用ゐずに描く畫家は、恰も、對立する一切の事物を自分の中に模倣しながら、此等の事物に就いて何の認識をも持つてゐない鏡に似てゐる

數學と——數學は繪

畫家に必要なのは數學である(數學は繪畫そのものに屬してゐる)。自分の研究と沒交渉な社交を禁止することである。對立する對象の種類の差に從つて變つて行くことを解する——さうして繪畫以

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

外の事に煩はさるゝことなき――腦髓である。
さうして問題が或る事柄の生成に關する觀照と定義とに在る場合には――若し對象が心に逼つてこれに活動を促す場合には、人は此等の事柄の中、どれが最も定義するに困難であるかを見極めて、此最も困難な問題をば極度の明晰に達するまで追窮し、かくて後他の事柄の定義の追窮に移らなければならない。
さうして、何よりも先づその心ばえが、鏡の表面に――自ら對象の色の數と同數の色に變化する鏡の表面に――等しいものでなければならない。さうしてその交友は此種の研究の點に於いて自分と共通點を持つてゐることを要する。若し一人も此の如き、交友を發見し得ないならば、此の觀照の生活に於て自分自身と交際してゐるに限る。要するに自分以上の益友は遂に發見し得ないだらうから。

序文

善良な人は、その天性より出でて、知を希求してゐる。私は多數の人が此作を無用の作と呼ぶ可きことを知つてゐる、………彼等は單に肉體的の富を求め、逸樂に對する欲望のみを持ち、全然彼の知

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

慧に對する欲望を缺如してゐる人達である。(然るにその知慧こそは精神の食物にして眞正に安固なる富である。何となれば精神が肉體よりも尊嚴であると等しく、精神の富は肉體の富よりも尊嚴であるから。)さうして此類の人が此作を手にすることを目撃する度に、私は、その人が丁度猿のやうにこれを鼻に持つて行くことを――さうしてこれは食ふことが出來るものかいと質問することを、少しも疑はない。

その姿態の何物かによつて靈魂の情熱を表現してゐない人像は賞賛に價しない。
その姿態によつてその本質の情熱を最もよく表現する人像こそ最も賞賛に價するのである。

肉體の逸樂が精神の繁榮を害せざらむがために、畫家又は素描家は孤獨でゐなければならない。特に、彼が觀察又は觀照に沒入して、眼を以て直ちにこれを受け、記憶を以て材料を保持確守せむとする場合に於いてさうである。汝一人ゐる時、汝は十全に汝のものである。仲間が一人でも汝と共にあ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

る時、汝は單に半分汝のものたるに過ぎない。さうしてその友との交渉が深入りすればするほど、汝は愈々汝自身のものでなくなるのである。況して汝が多くの人と共にゐれば、汝は更に此の如き不便の中に陷るのである。…………

一人の病人が、臨終に際して、室の戸を叩く音を聞いた。さうしてその僕に、入口で戸を叩くのは誰だと訊ねると僕は、それは Madonna Bona と申す婦人でございますと答へた。其處で病人はその兩腕を天に擧げて、聲高く神に感謝した それから僕に向つて——その方を早く御通し申して呉れ。死ぬ前に、Donna Bona（善良な婦人）を見て置きたいから。俺は生きてゐる中、一度も善良（ドンナ）な婦人（ボナ）を見たことがない——と云つた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

姉と妹

小笠原さだ

上

最後の銅鑼が鳴つた………無慈悲な雇主がわめき立てる様な恐しく騒がしい銅鑼の音は船の隅々迄も響き渡つた。

と急に何かしら色々な機械を動かす音や荷の上下する大きな車の軋む音や水夫や船員の叫び廻つて居る聲などがにわかにせわしげにあちこちに活氣みちて聞え出した。

今迄廣い甲板に田鶴子を中心にして集つて居た大勢の人々は鐘の音を聞くと共にいづれも急に緊

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

張した心持を顔に表はして云ひ合うた様に田鶴子の傍から離れるのだつた。

「あゝ………」

田鶴子は引割かれる様に人々が自分の身から離れて行くのを見ると耐らなくなつた様にかう大きく嘆息して近間のてすりに倒れる様に體をもたせかけたそして胸にこみ上げて來る様な思ひ迫つた苦しい表情を顔に表しながらじつと大勢の見送人を眺めるのだつた。フロックコートを少し前こゞみの長い體に着た老師は改めて大勢の群から離れると靜かに田鶴子の前に來た。

「それでは木村さん、御氣嫌ようしつかりと貴女の御成功をお待ちしますぞ」

老師は少しふるへをおびた聲でかう改つた口調で云つて右手を出した。

「先生!」

田鶴子は老師の聲をきくと一時に耐えて居た悲しさがこみ上げて來てやう〳〵かう云つたがくづれる様に老師の手にすがるとハンカチでもつて顔をおほふて終ふのだつた。

「木村さん今になつてそんな弱いこつちや仕方がない………コレ木村さん貴女の肩には大きな抱負と大勢の人々の期待とがしよいきれない程にかゝつて居るのですさ　しつかりせにやいけません」

老師は脊をこゞめて子供をなだめる様に云ひながら田鶴子の肩にかるく手をかけた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「はい……」

田鶴子は泣きじやくりの間からかすかにかううなづきながら充血した眞赤な瞳を上げるとすがりつき度い様な心持をしながら人々の方をじつと見つめた。

と後の船室に通じた暗らい廊下から走つて來た十四五のボーイは

「見送人の方々は早くお下り下さい船が出ます　々々」

かう叫びながらおひ立てる様に人々の前を馳けて行つた。

と今迄互に遠慮がちにして居た女の群は急に一度にバタ〳〵と田鶴子のそばに馳けよると

「木村さんしつかりお勉强して入らつしやいよ！」

「木村さんおまち申て居ります」

「御氣嫌ようお體御大切に」

かう云ふ聲が一時に田鶴子の身を取りまいた。彼女はもう流るゝ涙もぬぐいもせず見えも外聞も忘れて兩手を友人達に握られたまゝ只苦しさうに唇をかんでうなづく許であつた。

「さ、皆さんお名殘はおしいが時間が迫りましたから……」

老師はいづれもハンカチで顔をおほふたり鼻をつまらしたり泣きじやくりをしながら皆離れかね

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て居る女達を抱く様に手を廣げながら

「ではくれぐれも體を大切にな……勉强するにも今迄の様な無理はありませぬ様……私も丈夫でお待ちしてますぞ」

「あの……先生もお丈夫で………」

田鶴子は色々と云ひ度い事はどつさり有るのだつたが胸が迫つて來て何も云ふ事が出來なかつたでから云ふとまた兩手で顔を押へて終ふのだつた。

細い笛の音やはげしい蒸氣の音は立り去りかねて居る人々の心をせき立てゝ見返りくく大勢は細い階段を危げに下りて行くのだつた。

美代子は最前より涙ぐんで姉の姿を遠くから眺めながらこうした晴がましい人々の手前をはゞかつてわざと人の目にかゝらぬ様に人の蔭や壁のそばなどに佇んで居るのであつたが姉の傍に誰も居なくなつたのを見るといそいで傍に馳けよるのだつた。

「姉さん!」

美代子は思ひつめた心持をふくめてから叫びかけると何もかも忘れて終つて姉の手にすがりつくのだつた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

美代子の或事からして一と月許前に姉のはげしい怒をかつてからは未だしみ〴〵と打とけた事がないのだつた。其からは姉と二人の間の感情ははぐれて終つて昔の様に柔らかく打とけ合ふ様な事は出來なくなつて終つたのであつた。

姉は其事以來は全く妹を憎んで居る。

美代子も其以來は成べく姉の面前に座るのをさける様にして居るのであつた。

が今かうして妹のしほらしい姿を眺めるとさすがに姉も默つて妹の手を握るのだつた。

「姉さん……」

美代子はかう云つた瞬間には全く何もかも忘れて終つて昔の幼い時に姉をなつかしんだ時と同じ様な心持になつて姉の手を握るのだつた。

「姉さんお丈夫で歸つて來て下さいね……」かう云つて其手に自分の顔を押しあてゝ泣くのだつた。

「あゝ、美代さんも丈夫でね……」

田鶴子ははげしい興奮の爲に傷みやすくなつて居る心はもう今迄の様な強よい憎も怒も持つ事は出來なくなつて居るのだつた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

此二三年の間に急に脊丈は伸びて大人びた様でも未だどこやら子供々々した影の殘つて居る妹の頰のあたりを眺めると古い色々な思出がつい昨日の事でもあつた樣にはつきりと思ひ出されてくるのであつた。

自分よりはずつと違つた體質に生れた妹のかよわさうな美しい襟足やかすかに覺えて居る母の顏だちに似た美代子の色白の頰の邊を眺めると早くより兩親を失つた自分は苦しい思や泣き度い樣なつらい仕事にも從つて母親の樣な温かな心持でもつて妹を育てた事が今更の樣に思ひ出されるのであつた。

と同時に今迄小羊の樣に自分に馴んで居た此妹を突然奪つて行つた憎い男の顏が電光の樣に田鶴子の頭に浮んでくるのであつた。と涙にうるんだ彼女の神經は急にヒリヒリと痛みを覺えてくるのだつた。

「美代さん昨夕も姉さんの云つた事は必ず守つてくれるでせうね。私が歸る迄には立派に學校を卒業して居て下さいよ」

田鶴子はせめて此最後の自分の言葉を深かく妹の胸にきざみつけ度いと思つてじつと美代子の顏を見つめるのだつた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

美代子はさつきから自分が隱して持つて居る大切なものに觸られるのを恐れる樣に其事を姉の口から云ひ出されるのを怖れて居るのであつた。で氣の弱い美代子はもう何を云ふ事も出來ないで只耳を眞紅にそめてかすかにうなづきながらうつむくのであつた。

姉は自分の手一つで此樣に迄に美しく清い天使の樣に育て上げたのも今は凡てが惡魔の手でもつてメチャ〳〵にこわされて終つたのだ……小蝶の樣な瞳や愛々しい此少さな口元はもう男の汚れた唇にふれて終つたのか……夢にもそんな事を知りさうにもない此少女は……かう思ふともう長い間宗教生活で固められて三十に近い此年迄も全く美しい處女で通して來た姉の心には美代子の手を握つて居るさへ或るけがれが自分の身にもしみ入つて來る樣で耐らなくいとはしく思はれるのであつた。

そして同時に殆ど慘忍性を帶びた怒がムラ〳〵と胸をついて上つてくるのであつた。

「美代さんはお亡くなりになつたお父樣お母樣のお顏に泥をぬる樣な事はしないでせうね姉さんは洋行するについても其が何より心にかゝつて居るのですよ、まさか姉さんの心を欺す樣な事はしないでせうね」

充血した目にけわしい色を見せてきつとなつて云つた。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

「もう其事はどうぞ云はないで下さいよ、姉さん……皆私が悪るかつたのですから」

美代子は痛い疵口をえぐられる様なつらさを覺えて泣き出しさうな聲で云つた、そして姉の顔を見る力らなくもぢ〳〵して居ると

「貴女は見送の方ぢやないんですか、お早くお下りにならないともう船が出るのですよ」最前のボーイは二人の前を通りすがると一寸あと戻りしてから注意して行つた。

「さ美代さん、じやア之でお別れですよ、じやア姉さんも出來るだけ勉强して來ますから美代さんも心を入れかえてしつかりして下さいよ、さアもうあつちに入らつしやい……あッさうしてね、お小遣が欲しくなつたら森村先生のお宅に行つて頂くのですよ、成丈儉約してね……それから森村先生のおゆるしがなければ決して寄宿舎から出る事は成りませんよ、さもうそれで好いから早やくお下りなさい……あッそれからお父様お母様のお命日には蔭ながらお花をお上げなさいよ、さそれじやア」

姉は口早に之れだけを美代子の顔に押しつける様にして云ふと抱く様にして妹を昇降口につれて行くのだつた、

「姉さん御氣嫌よう……」

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

美代子はハンケチを顔に押しあてながら强よい海風のふく中を恐しさうに階段を下りて行くのだつた。

「………」

田鶴子は妹と別れて終ふと今迄幼いものゝ前に虚勢をはつて居た心はにはかにくづれて終つてもう耐らない様な悲しさが身を慄はしてくるのだつた。

暫くぼんやりと廣い甲板の上に彳んで居るのだつたが瀛笛の音やはげしい鐵と鐵とがかち合ふ響や眞黒に汚れた水夫等の馳け廻つて居るのを見るとやう〳〵氣がついた樣に急いで上甲板に昇つて行くのであつた。

其所は明るい青空が間近く見えて廣々とした見果てのない海上はまぶしい程一目に見渡された。大きな蘇鐵の植えられた鉢や見なれぬ西洋花の美しい鉢などがベンチの間々に飾られてあるのを見るともう何だか日本ではない樣な氣がして田鶴子は極の惡るい氣おくれのした心も覺えてくるのであつた。

七八人の若かい外國人の男女がてすりによつてしきりにハンカチを振つたり高聲で下の人と話をかわしたりして居る。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

田鶴子は其人等と少し離れた處からそつと涙ぐんだ目をして下を見下した。
陸は多くの見送人や見物などの人等で波止場は人で一杯になつて居た。
學校の人等や黒の服の老師や前の方には總代になつて送つてくれた女學校の生徒等の華やかな着物の色彩などが目につくのだつた。
一同は息を引いて田鶴子の船の上に表はれるのを待つて居たかの様に田鶴子の顔を見ると皆ハンケチや帽子をはげしく打振つて見せるのだつた。
はげしい滊笛の音がして二三度船がゆれたかと思ふともう靜かに船體は波止場から離れて終つた。
「あゝ、いよ〳〵もう日本の地から離れて終つた！」
田鶴子はかう思ふと何かにすがりついても今少し船を止め度い様な未練な心持が强よく心を亂すのだつた。
田鶴子はしつかりと冷いペンキ塗のてすりを握りしめたまゝ涙の流れるのもかまはずじつと人々の顔を見つめて居た、船が進むにつれて人々の影が少さくなつて行くのが耐らなく苛々して胸は湧き返る様な情けなさを感じるのであつた。
美しく晴れ渡つた午後の空には明るい日光が一面にみなぎつて深かい水色をした海上には波頭が

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

白銀の様にきらめいて居る。船は一刻毎に岸より遠ざかつて見る間に波止場に立つた人等の姿は少さな黒のかたまり位にしか見えなくなつた。

それでも彼女はしつかりと鐵のてすりに兩手を握り合したまゝ石の様に立ちすくんで居るのであつた。

が長がく伸びた波止場も人影も凡てがボーッと日光の中にとけて終つて見わけがつかなくなるとやう／＼彼女はてすりから離れた。

そして冷たく慄えて居る唇をきつとかみしめながら丸で喪心した人の様にフラ／＼とせまい自分の室の中に入つて行くのであつた。くづれる様に寢臺の上に身を投げ出した彼女の頭の上には友人や知己や多くの人等から送られた色々な贈物が濃い彩をしてうづ高く重ねられた其上には生徒一同からの送り物としてよこした美しい大きな花束が純白のリボンにくゝられてかすかな花の香をたゞよわせてがつくりとのせられてあるのだつた。

其等を半ば失心した様な顔つきをして眺めて居た田鶴子は

「いよ／＼今日の日が來たのだ」

もう自分は日本の地を離れて終つたのだ……と思ふと急に子供の様に涙がこみ上げて來て胸が一

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

杯につめられて終つた樣にかすかな泣聲を立てゝ寢臺の上に顏を押しつけて終ふのだつた。彼女はもう誰にはゞかる事もなく思ふ樣泣き入るのだつた。

少さな丸窓からはるり色の中に眞白な千切雲の浮いて居る空が少し許見えて薄靑い光線は細い瀧水の樣に彼女の半身を流れた。しばらくの間丸く肉つきの厚い彼女の肩は波の樣にうねつて居たがやがて上氣した顏を上げると呆然と水色のペンキ塗の壁を見つめるのだつた。

じつと聞くともなくかすかな波をかき分けて行く水音と船底から響いてくる音響とにじつと耳を傾けて居ると今更の樣に孤獨の淋しさがひし〳〵と身に迫るのを感じるのだつた。此一ケ月許の間の色々な出來事――それはもう何の事はない大きな渦卷の中に投げ込まれてグル〳〵と頭が倒さになる程引き廻されでもした樣な彼女自身でも半ば夢の樣であつた。

今朝彼女は舊師の好意で用意された馬車で老いた師と二人の先輩にあたる友人との四人で未だ眠からさめきらない靜かな街々を走らして新橋のステーションに向つたのだつた。彼女がいよ〳〵××研究の爲に洋行を命せられる事になつたのは一ケ月許前の事であつた。校長の口から重々しく其事を云ひ渡された時には彼女は其事が一年も前から內心に豫期して居た事でありながら足の先から

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

次第に氷の様な冷さがおそひ上つて來て果ては唇迄がガタ〳〵と慄え出して來た。

逃げる様に自分の家に戻つて來た彼女は薄暗い一室の中に瓦斯をともすのも忘れて長い間仁王立に突立つたまゝこみ上げてくる動悸に彼女の豐な乳房は波の様に動いて居た。

兩手をしつかり握りしめたまゝ

「どうしよう！」太い吐息と共に彼女はこう云つた。

「どうしよう。私ほんとうにどうしよう！」

彼女はしばらくするとかうまたくり返した。其後彼女は不思議な心の狀態に捉へられて熱病にかゝつた時の様に只苦しい時を過すのだつた。洋行！ 洋行！ それが彼女にとつて幾年心の底に宿つて居たかたまりだつたのだらう。彼女の長い間の惡戰苦闘もひたすらに此處迄歩いて來る間の道程に過ぎなかつたのであつた。洋行が彼女の目標でもあり理想でもあつたのであつた。

それだのに今になつては彼女の胸には嬉しさも悦ばしさも得意も名譽も少しも感じる事が出來なかつた。只不思議な苦しい興奮が續いて夜も安らかな眠を取る事さへ出來なかつた。其から彼女は少しの隙にも的もなく街から街にと何かに急ぎ立てられて止まる事の出來ない様な心持をしながらよく歩き廻るのだつた。それからいよ〳〵一週間許になるともう半ば夢心地で方々を歩き廻つた。幾度

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

か同じ様な別離の詞を演壇に立つて云はねばならなかつた、そしてまた同じ様なくど〳〵した祝詞やら送別の詞やらをも幾度となく聞かされたのであつた。そんな事をして居る間に親切な温情の厚い舊師や友人は彼女の爲に凡ての旅裝をとゝのへてくれた。

彼女はまた今朝の晴がましい新橋のステーションの光景がはつきりと浮んでくるのであつた。

兩側に並んだ人車や馬車や自働車小蟻の様に群がつて居る人影さうしたステーションの光景は其凡が自分の此光榮ある朝の爲の賑であるかの樣にさへ感じられるのだつた。

數へきれぬ色々な人々の口々から未來を祝され前途を賛へられた。

彼女は彼のプラットホームに竝んだ多くの人々……其中には彼女には思もかけぬ人の顏も混つて居たかつては彼女を苦めた敵も居たまた忘れ果てた友も混つて居た。

現在の友人や師弟の馴染の深かい顏の中に混じつてさうした彼女の過去の苦がい半生を語つて居る樣な人々の顏が竝んで居るのだつた。

彼女は今かうして一人寢臺の上に橫たわつて居る内に自然と思ひ上つた神經は少しづゝ靜まつて來ると今度は其心のまわりには群る樣に彼女の長い過去の姿が湧き表れて來るのであつた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兩親を失ひ幼い妹をかゝへて慄えて居る少女の姿は其が自分の影とは思はれぬ迄にいぢらしくも眺められるのだつた。……と今の先ハンケチも打振らずに悲しげな瞳をじつと見上げたまゝションボリとイんで居た妹の姿が可愛くも目に浮んで來るのであつた。とまた新しい涙がはげしく流れるのだつた。

學資を借りて師範學校に入つた時の事其後敎師として四國にも東北にも寒い北の海岸にも體のつゞく限り奮闘した殊勝な自分の姿は其時々の苦しい思出を誘つてなつかしくも胸に浮んで來るのであつた。

然かし其過去の半生は只にがい生活の片々許で彼女の若い靑春をかざる樣な華かな思出は少しも無いのであつた。一刻も安かな時もない彼女は知らず〳〵の中にむざ〳〵と柔らかな心を老ひくちさして終つたのだつた。

温な思出の一つさへも彼女は持つては居なかつた。

がたつた一度彼女にとつては忘れがたい事があつた。それは丁度半年許前に老師や友人の深切で或る軍人の後妻として世話をする人があるのだつた。そして見合迄もしたのだつた。

若い妻に死なれて二人の愛兒をかゝへて居ると云ふ軍人は沈痛な美貌をもつて居た。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

田鶴子は其當時かつて覺えた事のない胸のあたゝかさを感じて居たのだつた。

少さい時に兩親を失ひ苦學したと云ふ軍人の經歴も 彼女の心を強く 動かした一つであつた。彼女は廣い運動場などを歩きながらもフト花壇に植えられた小な草花などを見つける不思議な柔な心持がして來ると千切つては人知れずソツと接吻したりする事もあつた。

が其と殆ど同時に官廳から田鶴子の洋行の話が出て來たのだつた。

「右と左のどちらの道をとりますか」

校長はかう云つて田鶴子の決心を聞いた。

右にせよと云ふ友人もあつた。左にせよと云ふ先生もあつた。

「先生！ 私は 到底一家の主婦になる様な 婦人では 御座いませんどうぞ宜しく御助力下さいまし……」

彼女はとう〳〵かう云つて終ふと熱つい涙がハラ〳〵と流れるのだつた。

「あゝ………」

何もかも夢であつた彼女は心にかうつぶやきながらそつと半身を起して丸窓の方を伸び上つてコバルトの空を眺めた。がまたしばらくするとぐつたりと元の様に身を投げ出した。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

彼女は只もうわけもなく淋しさを覺えて來た何と云ふ味氣のない生活をつゞけて來たものだらう今迄の自分のふんで來た道それがどの位意味あるものだつたらう。

そして今かうして海外に行く自分は之れから果してどうなるのだらう。かう思ふと彼女は今迄に感じた事もない或る苛々しさと恨めしさとが心を慄はしてくるのであつた。

彼のふくよかな頬を心のゆく迄若い男の胸に投げかけて居るあの妹の方が未だしも幸福であつた様に思はれるのだつた。今迄ゆるしがたい罪惡と許思つて居た事が却つて羨しい様な氣持もして來るのであつた。

妹と若かい男の戀に關しても自分は少しの同情も餘裕もないきびしい方法を取つた事が何だか今の心持を攻められる様にも思はれて來るのであつた。

「生活の方法がすつかり間違つて居たではあるまいか！」

彼女の胸の中には不圖こんな事が浮んで來たが自分は今迄良心に對して耻かしいと思つた樣な事は只の一度もした事はなかつた。そして師に對して友人に對して、また妹に向つても人間として婦人として正しい人道をふんで來たと信じて居る。かう思ふと決して間違つて居たとも思へない。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

がやはりさう思ひ返しても彼女の今の淋しさとわけもない深かい悔がみなぎる樣に胸をかき亂すのだつた。

彼女はもうすつかり疲れ切つた氣のぬけた樣な表情をしてそつと起き上つたが體を曲げて片手を伸ばすと美しい花束を取り上げた。冷たく柔らかな花瓣がゆら〳〵とゆれて二輪彼女の藤色の袴の上にこぼれ落ちた。

彼女は色々な花の香のする水々しい花束を自分の顏のそばにもつて行つて無意識に其香をかんだ。じつと眺めて居る內に昨日迄自分が敎へて居た可愛いゝ少女の姿がはつきりと浮んでくるのであつた。

彼女はじつと花束を顏に押しあてたまゝ新しく冷たい淚が頰を流れるのであつた。

下

「もう姉さんは行つて終つた――」

美代子はさつきから幾十度もかう心の中にくり返しながら呆然と美しい夕日の影を浴びながら姫

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

椿の花がポタ〳〵と散るのを夢の様な心地で眺めて居るのだつた。

「もうどの邊迄行つてお終ひになつたらう」

美代子はあの大きな眞黒な船がだん〳〵と深かい〳〵廣々とした沖に進んで行つてどこを見ても物凄い様な碧い〳〵海原でかこまれて終つてたつた一人、姉の田鶴子があの薄暗い船室のベットの中で泣いて居る姿があり〳〵と胸の中に浮んで來るのであつた。

「姉を欺す様な事はしないでせうね」

かう云つてきつい目をして自分を見つめた姉の聲音もはつきりと思ひ出されるのだつた。

美代子は船が出て終ふと人々から一人離れてこつそりと街の方に歩いて行くのだつた。

姉に別れて終ふと美代子は急に取りのこされて終つた様な心細さとさみしさがひし〳〵と身にくい入る様で此まゝすぐに寄宿に歸る氣にはどうしてもなれなかつた。

美代子の胸には意地のわるい室長の顏や、うたぐりの目をゆだんなく自分の體から離さぬ様な受持の先生やなつかしい戀人の顏や姉の顏が重り合つて胸の中にわだかまつて居た。

二三度姉につれられて歩いた事のある街をあてもなく歩いて居る内にふと見覺えのある大きな街に出るといつか秀男と一所に行つた事のある居留地の墓地を思ひ出すと何となくなつかしく思はれ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て自然と足は其方に向いて行くのだつた。
そつとだら〳〵と坂に上つて行き裏門から入つて見ると墓地には一面に明るい夕日が照つて居て森閑として人影も無かつた。
美代子は大理石で彫みつけられた外國婦人の胸像や緑色のつたが白い石碑にからみついて居るのや美しい香り花などが墓前に飾られてあるのを眺めながら半年許前に男とこゝに來た時と少しも異つて居ないのを思つてうれしく思はれるのだつた。
「姉さんにはどうして彼の秀男の事がそんなにいやしい浮薄な男と見えるのかしら」
男の變つた風釆や言葉も若かい藝術家として少しも賤しいと思はれる處はないと美代子は思つた。
姉さんの最も偉い人と尊敬もし信じても居る先生方よりは秀男の方が何となくもつと大きな或力を握つて居る人の樣におぼろながら美代子にはさう思はれるのだつた。
男の蔭に身をよせて今迄の自分の周圍の人等を眺めると急に其人等が皆おろかな愚人許りの樣にさへ美代子には思はれるのだつた。
戀などゝ云ふ事を少しも知らない樣な顔をして居る姉さんや其友人の女等は皆ほんとうに男を戀しいと心の中に思つた事がないのかしら……其こそ不思議に思はれるのだつた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「彼の男は賤しい家業の女や立派な人の出入りする處でない様な處へも始終出入して居ると云ふではないか……おまへは未だ子供だから男に欺されて居るのです、決しておまへを心から愛して居るのではないのですよ、不品行な色魔の様な男なのです」

姉は口を極めて男の事を罵しつた。

「姉さんは秀男の心持がお解にならないのですわ。秀男は詩人です。藝術家です」

美代子は自分の大切な男を罵られた口惜しさに平常のおとなしさも忘れて夢中でかう姉に云ひかへつた。

「おまへはいつの間にか秀男の口調を覺えたのですねおまへの心はもうくさりかけて居るのです」

姉は口惜しそうに身をふるはして妹を睨むのだつた。

こうしたはげしい爭があつてからは二人の間には深かい大きな溝が出來て終つたのだつた。でもやつぱり姉さんは偉いのだ。姉さんのお陰で自分はかうして今迄育つて來られたのだ。さうは思つても美代子には姉と同じ道をふんで行く心にはなれなかつた。

美代子は姉が日本にはもう居ないのだと思ふと心細い様でもあつたがまた自分等の戀の前途を祝福される様な心にもなれるのだつた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

もう寄宿にも歸らない。私も之れから男と一所にどんな苦しみをしても立派に生きて行かう……」

美代子は何の考へもなく一途にかう思ひつめるさ何となく此世界の凡てが自分等の爲にあたヽかな光をなげて祝福してくれて居る樣に思はれて何ともしれぬ喜しさが胸にあふれる樣に感じて來るのだつた――

長い間夕日に照らされた美代子の頬は美しく上氣して血の色が上つて居た。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

マカールの夢

（コロレエンコ）

青山菊榮譯

これは愍れなマカールが――露西亞の諺に運命の繼子と云つてある、あのマカールがクリスマスの前夜に見た夢の話である。マカールは露西亞人とヤクート人との混血兒の棲んでゐる、チヤルガンといふ西伯亞の邊鄙な村の者であつた。その村といふのは餘程以前に、少し許の露西亞の移民が未開の森に移住して來て、僅かの土地を開墾してヤクート風の小屋を二軒たてたのである。そのうちその移民達はヤクートの女を娶つて、知らず識らず、いつの間にか、女房達の風俗言語に化されてしまつ

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

た。マカールは宏大な未開の森に包まれた孤村に土着して、飢餓と慘苦の生活にはいつた、此の妙な混血兒人種の子孫であつた。

丁度クリスマスの前夜の事である。マカールは明日は大祭日だといふ事を思ひ出した。彼はヴォツカが欲しくて矢も楯も堪らなくなつた。が、酒を買ふ金は一文もないので、この望みは遂げられなかつた。穀物は大抵賣り盡したし、もう商人や、土地に住んでゐる韃靼人には負債まで出來てゐる。おまけに明日は大祭日……働けない日と來てゐる……愈々飮めないとなればどうしたものだらう？ 彼はこれを思つてがつかりし切つて、泌み〴〵と貧乏暮しを嘆いた。冬一の大祭日に一本の酒も飮めないとは！

不意に好い思ひ付きが浮んだ。彼は立ち上がつてぼろ〳〵な毛皮の外套を着はじめた。丈の高い、針金の樣な、非常に強い非常に醜い、彼の癖をすつかり呑み込んでゐる女房は、彼がどうする氣かすぐ見て取つた。

「どうするつてんだ、おい、ヴォツカをみんな一人で飮んじまふ氣かい」

「ぐづ〳〵云ふない。俺は一壜買ひに行く所よ。其奴を明日二人で一所に飮まうぜ」

彼は女房がころびさうになつたほど強くポンと肩をたゝいて、狡猾さうに片眼で目配ばせした。女

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

心とはかうしたものだ！　女房はマカールが自分をだますことゝは知りながら、矢張夫の愛撫をうけては惡い氣持もしないのであつた。

彼は小屋を出て、老ぼれの馬を引き出した。そして間もなく、橇の中に坐つて村外れの方へ驅つた。丁度村の外れに小さなヤクート風の小屋が一軒立つてゐる。一筋の煙がその煙突から立ち昇つて、冷やかに輝いてゐる星と、冴えた月とを、うね／＼した厚い帷帳でへだてゝゐた。此地方で窓ガラスの代りに使ふ厚い氷の板越しに、家の中の火の光が見える。戸外は森閑してゐる。遠方から來た二人の人がこの荒原に住んでゐるのである。（流刑に處せられし政治囚なり――譯者）。マカールはこの人達が何でこんな邊鄙な土地に來てゐるのか知りもせず、そんな事を一向氣にするでもなかつた。彼は時々この人達の爲めに一寸した用を足すのをよろこんでゐた、といふのはこの二人はやかましい事も云はず、手間賃を價切りもせず、少し許りの負債を催足もしないからであつた。

マカールは小屋にはいつて行つて、爐傍へづか／＼と進んで、霜のためにかじかむだ兩手をさし出した。

「おゝ冷めてい！」と彼は自分の寒いのを知らせるために聲を立てた。

遠國の人達は家にゐた。机の上には蠟燭がともつてゐる。一人の人は臥床の上に寢ころんで、煙草

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

をふかしながら、空中に昇つてゆく蒼い煙の輪を思ひ沈んで眺め入つてゐた——多分彼は何か思ひを辿つてゐたのであらう。もう一人は爐傍に坐つて、薪のまはりをおどりまはつては、それを甜める火炎を見守つてゐた。

「御機嫌かね」とマカールは妙に不安な氣持のする沈默を破らうとして云つた。

この遠國の人達の胸を壓さへつけてゐる重い哀しみを、どうして彼は知ることが出來やう？　この夜二人の頭にどんな思ひ出が去來してゐるか、火や煙の中に二人はどんな繪を見てゐるか、どうして彼に察することが出來やう？

火の傍に坐つてゐた青年は頭をもたげて、一寸誰と見分けのつかぬ樣子でマカールを見上げた。それから彼は身を起こさうとする樣に身體を搖すつて、椅子からとび立つた。

「やあ君だつたか。變りもないかね。よく來た。一所に茶でも飮まうかな」

マカールはこの申し出をよろこんだ。

「茶？」と彼は問ひ質す樣に聞き返した。「結構……貰ふとも。そいつあ豪氣だ」

直に彼はいろんなものを脱ぎにかゝつた。で、帽子と外套をとると、もうすつかりくつろいだ氣分になつてしまつた。そして內に石炭の燃えてゐる茶沸器(ちやわかし)を見ると彼の感情は熱せられて溢れ出した。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

「私はおめへさんがたが大好きよ。全くだ。實に好きだ、實に。おめへさんがたの事をおもふと夜も眠れねえんでさあ」

青年は苦笑を面に泛べ乍ら振向いた。

「ふうん」と彼は云つた。「君は吾々が好きかね。所で一體吾々に何用があるんだね」

マカールはこの不意の間に一寸度を失つた。

「私は思つてる事があるんだが」と彼は答へた。

「一體どうしてそれがおめへさんに分かつたね？　まあとにかく、茶を貰つてから話すとしやう」

主人が茶を呉れると云つたのを見て、彼はもう一歩進めても好いと思つた。「燒肉はあるかね。私は燒肉が好きだが」と彼は云つた。

「否」

「まあ好いさ」と彼は慰める樣に云つた。「又こんど貰ふとしやう、……きつと」と彼は念を推すやうな調子で云つた。「こんどいつか呉れるだらうね」

「上げるとも」

そこでマカールはこの二人に一片の燒肉を貸してある樣な氣になつてしまつた、彼はこの種の貸

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

は決して忘れた事が無いのである。偖一時間後に彼は五車の薪を比較的樂な條件で賣りつけて、一ルーブルを丸ごと儲けて橇の中に坐つた。彼はその金を此日こそ飲んでしまはないと固く約束したのであるが、約束してゐる最中に飲んでしまふ事に腹をきめてゐたのだつた。彼はこの御馳走の事に許り氣をとられてゐたので、女房に打たれる事はすつかり忘れてしまつた。

「どこへ行く氣だ、マカール」と、青年はマカールの馬が眞直に行く代りに左へ曲がるのを見て笑ひ乍ら呼びかけた。

「シッ、シッ、やい……こんな仕末に終へねえ馬つてがあるもんか、手前一體どこへ行く氣だ？」とマカールは左の手綱を強く引いて、濟ました顏で右の手でピシャリと馬をたゝいた。怜悧な小さな馬は咎める樣に尾をさつと振つて、橇が居酒屋の戸口に止まるまで、望みの方角へ靜かに駈けた。

門の所には高いヤクート風の鞍を背においた馬が五六匹、何れも主人を待つてゐた。

小さな陋屋は人で一杯になつてゐた。惡い煙草のあくどい煙は濃い雲になつて、客達の頭の上を漂つて、徐かに火の中に吸ひ込まれて行つた。ヤクート人達はヴォッカの酒盃や湯呑の列んでゐる卓の背後の腰掛けに倚つてゐた。中には骨牌をやつてゐるのもある。客の顏は何れも赧らんで汗が流れてゐた。賭け事をしてゐる連中の眼は 熱心に骨牌を 瞶めてゐた 金はどん／＼持主を變へて行く。醉拂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つたヤクート人が一人、部屋の片隅の藁束の上に坐つて、身體を前後に搖すり乍ら、際涯（はてし）のない歌を唱つてゐた。その歌といふのは、明日は大祭日で、今日は自分は醉つてゐるといふ分かり切つた事を、何度も〳〵違つた節で繰返すのであつた。

マカールは金を出して一壜渡して貰つた。それを彼は懷にいれて、そのヤクート人のゐる暗い隅にこつそりもぐり込んだ。こゝで彼は一杯々々と盛に煽つた。火酒（ブランデー）は非常に苦がゝつた。祭日を當てにその四分の三は水を割り、煙草は入れたい放第入れてあるのであつた。(西米利亞に於ては下等なる煙草を火酒に混じて酒を強むる事往々あり、無論衞生上の害毒甚し――譯者)かういふ酒を一杯引掛けると、もうマカールの息づかひは荒くなつて眼の前に赤い輪がおどり出した。

彼は直に醉つてしまつた。而して藁の中にうづくまりながら、兩腕で膝を抱えて重い頭をそこへ載せた。かういふ格好で彼は歌のつもりの妙な譯のわからぬ音を立て始めた。彼は明日は大祭日だといふ事と、自分は五車（いつくるま）の薪を賣つて儲けた金を飲んでしまつたといふ事を謠つた。

その間に群衆はふえて來た。教會の儀式に參列するためや、ヴオツカを飲むために此土地に集まつた新來の客が絶えずはいつて來た。亭主はもう直、後の客の場所が無くなると見て取つて、誰を突き出さうかとあたりを見まはした。彼の眼はヤクート人と一所に隅の方にゐるマカールの上におちた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼は無言のまゝ、ヤクート人の襟首をつかんで戸外へ投げ出した。次はマカールの番である。土地の者だけに、マカールはもうすこし念入な取扱ひを受けた。亭主の韃靼人は戸を開け放しておいて、マカールを思ひ切り蹴とばした、マカールは小屋からとび出して、うづ高い雪の上にうつ向きに轉んだ。彼はかう無雜作に處分されたのを果して氣に懸けたかどうか、一寸云はれない。冷たい固い雪は彼の顔にくつゝいたり、手袋につまつたりした。彼は身づくろひし乍ら雪の土手から起き上がつて、跛をひき〳〵橇の方へ行つた。

月は空に昇つた。大熊星の尾は下の方をさして居た。寒氣は愈々嚴しくなつて來た。極光は半ば黒雲に包まれ乍ら北方に輝いてゐて、其の光焔は火箭の樣に雲のまはりをおどつてゐた。馬は主人の境遇を心得顔に、徐々と家路へ向かつた。マカールはどうからかうやら橇によぢ上つて、その中に蹲まつて、身體を前後にゆすり乍ら、五車の薪の事と、これからひどく打擲される事とをはてしなく歌ひつゞけた。乘つてゆくうちに、遠方の未開の森と、月光に輝く、雪を戴いた山々とが見えた。これは彼に鳥や獸のためにかけておいた罠の事を思ひ出させた。すると彼は嬉しさがこみ上げて來た。そこで、狐が自分の罠にかゝつたから、それを明日賣つて打擲を免れやうと謠つた。彼が小屋にはいつて、罠に狐のかゝつた事を女房に話してゐる時、鐘が鳴り出した。女房は火酒の御馳走にあづからなかつ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

た事を彼はすつかり忘れてゐたのだつた。そしてこのめでたい知らせに答へる代りに、いきなりひどく擲られてびつくりした。彼が寐床に打倒れる迄に、女房はもう一度背中を打つた。

その間、深夜の祈禱の鐘が鳴つてゐて、その樂しげな響はチャルガンの村と、雪に包まれた無涯の深林を超えて、遙かな空に漂つて行つた……

マカールは寢床に臥てゐた。頭は燃える樣に熱くて、中で火が狂つてゐる樣な氣がする。酒精と煙草との混りは火の流れの樣に血管を流れた。顏や着物についた雪は溶けて、氷の樣に冷たい雫になつて額や頸を流れおちた。婆さんは彼が寢たものと思つてゐた、がそんな事はない。

彼には狐の事が忘れられない、狐は確に罠にかゝつたのだ、どの罠かといふ事まで分かつてゐる。彼には狐がはつきり見える――重い板に押しつけられて、爪で土を引掻き乍ら、逃げやうとしてゐるその樣子が。月の光は深い繁みから射し込んで、その黃色い毛皮の上にチラ〳〵してゐる、その眼は熱火の樣に光つてゐる――彼にはその光り方までが見える。

もう堪らない、彼は床から起き出して、森へ行く氣で、忠實な馬の方へと足を向けた。

それから……一體どうしたのだらう？　女房が襟首をつかんで引き戻したのだつたかしら……

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

否、彼は村をあとにして出掛けたのだ。橇を驅る人達は固い雪の上を、冬よく聞くあの妙な軋みを立て乍ら辷つてゆく、彼はチャルガンを遙か跡に殘した。鐘はなほ嚴そかに鳴り渡つてゐる、きつかりと空に對して立つ黒い人影の列が見える、それはヤクート人が乘馬で教會に行く所であつた。

いつの間にか月は低く傾いた。白味がゝつた雲が高空に現はれて、燐の様な光輝を放つた。それは見る間に大きくなつて廣がつて行つた。と、不意に千切れ〴〵に引き裂けた——さま〴〵な色をした炎がさつと迸つて、對照のために殊に濃く見える半圓形の黒雲を突切つておどつた。

道は丈の低い籔の間にうねつてゐる、右と左には丘が列をなしてゐる。ゆくまゝに樹の丈は次第に高くなつて、籔は愈々深くもつれ合つて來た。無邊の未開の森に神秘がゆき渡つてゐる様である。葉の無い樹々の枝は銀白の霜に覆はれてゐる。マカールは罠のかゝつてゐる場所まで來て馬をとめた。岳の頂と最初の罠とがはつきり見える。罠は少し斜にした尖つた材木の上に三本の重い丸太をのせて、釣や髮繩でうまく結びつけてあるのである。

所がこれは他人の罠であつた。が狐は他人の罠にだつてかゝる事もある。マカールは急いで橇から下りて、馬を路傍に立たせておいて、ぢつと耳を澄ました。あたりは森閑してゐる。たゞ遠くの村で鐘が鳴つてゐるだけである。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

大丈夫。こゝらの罠の持主の、マカールの隣の者で大敵のアリオシユカ、チヤルガノフは多分教會にゐる事だらう。マカールは罠の前をあちこちと歩いた。罠は皆カッと口をあいて獲物を待つてゐた。

シッ！……さら〳〵と微かに音がする……耳さ、土を拂ふふさ〳〵した尾が見えた程間ぢかに、赤味がゝつた毛皮が月光に輝いた。狐はマカールがかけておいた罠の方の樹の間に消えた、鈍いドシンといふ音は樅の落ちたのを告げた。籔を突抜けて獲物の方へ一散に駈け出した時、マカールの胸はおどつてゐた。冷たい小枝は彼の眼を打つて、顔を雪だらけにした。彼はよろけて喘いだ。彼は手づから作つた明き地に到いた――もう一息でそこへゆく所だつた――すると――樹の間に人影が現はれた。アリオシユカ、チヤルガノフ！ 角ばつたづんぐりした恰好、前屈みの肩、熊の様に無器用なよた〳〵した歩きぶりは、てつきりアリオシユカだ。マカールは敵の顔がいつもよりしほ黒く、歯がしほ白く光つてゐる様な氣がした。彼はアリオシユカが他人の罠をねらつた事がひどく癪にさわつて、腹を立てた。「野郎！ 己の罠を狙やがつた」マカールにしてもアリオシユカの罠を狙つてゐたのは同じ事だ、がやつぱり違ふ――その時は他人の罠を狙つてゐる所を捕まりはしないかと恐わがつてゐた、が今度は他人が自分の領分に踏み込んだから腹を立てたのだ。

彼は狐のかゝつた罠の方へ急いで駈け出した。アリオシユカも同じ方向へよた〳〵駈けた。何方が

先になるか？

狐はマカールが幻に見た通り、爪で土を引掻き乍ら、燃える様な激しい眼で彼を睨んだ。「觸るな…

…己のだッ」とマカールは怒鳴つた。

「觸るな」と反響(こだま)の様にアリオシユカは答へた。「己のだッ」

二人とも罠に駈けつけて、上の板を擧げた、そのために狐は放たれた。狐は立ち上がつて、一寸踏(ふ)んで、立ち止まつて、冷かす様な顔付で二人をぢろりと見て、板に傷められた所を甜めて、月光の中に愉快さうに尾を振り〳〵、逃げて行つてしまつた。

アリオシユカは追掛けやうとして駈け出した、がマカールはその外套の裾をつかんで引きとめた。

「觸るな、己のだッ」と叫びざま、彼は自分で狐を追ひかけやうとした。

「觸るな！」とアリオシユカは反響(こだま)の様に云ひ返した。マカールは誰かゞ自分の外套の裾を掴んでゐるのを感じた。彼は嚇として狐の事はすつかり忘れて、逃げ出すアリオシユカを追ひかけた。

二人はどん〳〵駈けた。樹の枝はアリオシユカの帽子を頭からもぎとつた、併しマカールがすぐ跡から怒鳴り乍ら追掛けて來るので、立ちどまつて拾つてゐるひまがない。が、アリオシユカは慇れなマカールよりは狡猾であつた。彼は不意に停まつて、屈んで頭を突き出した。一散に駈けて來るマカ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ールはそれにぶつかつて轉がつた。轉んでゐる間に、アリオシユカはマカールの帽子をひつたくつて深い森の中に消えてしまつた。

マカールは萎れ返つて、すご〳〵と立ち上がつた。着物と肌の間に雪のさほつた所は、冷たい水の流れが身體を傳ふ。温い手袋も失くした、こんな晩に帽子も手袋もなしで深森の中をうろつくのは容易ではないといふ事を彼は知り切つてゐた。そこで彼は家路へ向かつた、が、道は際限なく思はれた。彼の打算では、もう今頃は森を出て教會の尖塔が見える筈である。鐘の響はまだきこえてゐる、彼は段々近づいてゆくつもりなのに、その音は愈々微かになつて行つた。彼はがつかりしてどうして好いか分らなくなつて了つた。

マカールは疲れ果てた、足はもう動かない、彼は大息を吐いた、而して手足が氷の樣に冷えてゆくのを感じた。もうおしまひだといふ考が胸一杯になつた。未開の森は死んだ樣に靜まつてゐる。白兎が一匹路を駈けて來て、後足で坐つて、長い耳をぴく〳〵させて、マカールをちらと見ては、いろんな口をして見せ乍ら、顏を洗ひ始めた。兎はマカールは自分の敵で、自分を取らうと罠を掛けた事や、今度はあべこべに捉まつた事などをちやんと知つてゐると、知らせ度がつてゐるにきまつてゐた。

彼の心は重くなつた。枝は彼の顏を擲ぐつた、樹は長い小枝をのばして彼の髮をつかんだり、眼や

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

顔を打つたりした。急に森は活氣づいて來た。鵂鶹は穴から出て來て、圓い眼をして彼を瞶めた。松鶴（らいてふ）は翼を擴げて飛びまはつては、腹立たしげに喋べり散らして、女房たちにマカールの事やそのずるい仕掛けなどを話して聞かせた。何千匹の狐が繁みの間からのぞいて、鼻をひこつかせて、耳を動かして、マカールを蔑すむ樣に眺めた。兎どもは後足で坐つて、マカールの冒險を話し合つてはこそ〳〵笑つた。

「もうおしまひだ！」とマカールは雪の上に臥ながら思つた。霜は增して來た。極光の消えがたの炎は空にたはむれてゐて、樹の枝越しに上からマカールをのぞいた。仄かな物音が遠いチャルガンから漂つて來た。極光は消えた、音も已んだ。

マカールは死んでしまつた。

どういふ風にして死んだのか、マカールは知らなかつた。何でも身內を出て行くものがある筈だ、といふ事だけ知つてゐたので、彼はそれを待つてゐた、が何も出て行かなかつた。そのうちに、彼は自分の死んだ事を知つたので、飽き〳〵してしまふほど、ぢつと橫になつてゐた。何かしら足にさわるのを感じた時には、あたりはもう眞暗であつた。彼は其方へ頭を向けて眼を開いた。

樹は死んだ樣に動かない。そして前にマカールをからかつたのを耻ぢてゐる樣な樣子である。苔の

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

生えた樅の木は徐々と身を搖する每に、雪に包まれた腕を延ばした。小さな雪の片はふわ〳〵と空を漂つた。煌々した優しげな小さな星は、枝の間の靑い空からのぞいて「やれやれ、不憫な男が死んだ！」といふ樣に見えた。

老僧イワンがマカールの傍に立つてそつと彼を蹴てゐる。その長い衣にも、毛皮の帽子にも、肩にも、長い髯にも、雪がかゝつてゐた。併しマカールの一番驚いたのは、この人は四年前に亡くなつたあのイワン牧師に違ひないといふ事であつた。

イワンは生前、氣の好い親切な人で、決して納金や、手當のことで管內の人を惱ませた事はなかつた。マカールは金錢上のことはいつも自分で決める事にしてゐた、而して洗禮や祈禱式のお禮をしなければならぬ時には、いつゝ出し澁つてケチにしたし、一二度は拂ふのさへ忘れてしまつた事もあるのを、ひどく耻ぢ入り乍ら思ひ出した。

併しイワン牧師は決して腹を立てなかつた、どころか酒德利さへあてがはれてゐれば、無上に幸福なのであつた。マカールに酒を買ふ金が無い時は、牧師は自分で、酒をとりにやつてこの信徒と一所に飮んだものである。かういふ時には大抵、牧師は醉ひ潰れて家へ運ばれて行き、妻君の優しい介抱に委ねられた。こんな時に、一寸した喧嘩が起つて、活氣を添へる事もあるが、それは稀であつた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

然り、彼は親切な「親父」であつた。が、彼は無慘な死に樣をしたのである。或は彼は一人(外の者は二三時間留守にした)小屋にゐて、醉拂つて床に寢てゐるうち、煙草が吸ひたくなつた。そこで煙管に火をつけやうと床を起き出して爐傍へよろめいて行つたが、足をふみはづして火の中へ落ちた。家族が歸つて來た時には、イワン親父は足だけになつてゐた。敎區の人達は嘆いたが、どんな醫者でもこの病氣をなほす譯にはゆかなかつたので、仕方なくその足を葬つた。而して外の牧師が代りに來た。

さて今、イワン親父はマカールの前に立つて足で突き乍らかう云つた。「起きなさい、マカロウシュカ起きなさい、而して私と一所に來るんだ」

「どこへ?」とマカールは不平らしく聞いた。彼は死んだからにはもうぢつと寢たきりで、あてもなく森をうろついたりしないでも濟む事と思つてゐた。さもなければ死んだつて何にならう?

「一所に大僧長樣の所へゆかう」

「何だつて大僧長樣の所へ行くんだ?」

「お審判を受けるためさ」と、どうやら悲しげに、赦しを乞ふ樣な聲で牧師は云つた。

そこでマカールは、死ぬとお審判を受ける事になつてゐたのを思ひ出した。そんな事を敎會で聞いた事がある。どうも仕方が無い、牧師の云ふのは尤もだ。死んだ後迄もぢつとしてゐる事の出來ない

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のをぶつ〳〵云ひ乍ら彼は立ち上がつた。二人が東の方へ歩き出すと樹は側へ避けた。マカールは牧師が雪の上を滑る様に行く跡に、全く足跡の無いのを見て驚いた。振返ると雪はごく滑らかに平らになつてゐて、自分の足跡もついてはゐない。かういふ工合だと誰にも知られる氣遣ひが無くて、他人の罠を見舞ふのにどんなに便利だらう、と思つてゐると、この人しれぬ考を讀んだに違ひない牧師は、振向いてから云つた、「よしなさい、一ッ一ッの考がどれだけお前さんの損になるかお前さんはまだ知るまいが」

「何つ？」とマカールは怒つた。「死骸は好きな事考へちや無んねえのか。お前の知つた事かい。もとはそんなにやかましかあ無かつた癖に。默つてろい」

牧師は佗しげに頭を振つて歩いて行つた。

「これから餘程あるかね？」とマカールが訊いた。

「まだ〳〵中々！」と牧師は同じ様に哀しさうな調子で云つた。

「だが一體何を喰ふのかね？」とマカールは氣掛りらしくきいた。

「お前さん、もう自分は死んだので、これからは食物も飲物も入らないといふ事を忘れたのか」と牧師は振向いて答へた。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

マカールはこれがひどく氣に入らなかつた。雪の上にそつと寢かしておいてくれるならそれでも宜からうけれど……

「併し食物なしで人を遠くまで歩かす譯には行かねえぜ」と、また彼は不平を云つた。

「愚圖々々云ひなさんな」と牧師は云つた。

「おい來た」と、彼は不精無精に答へた。が心の中では、やはりぶつ〳〵云つて、見るもの聞くものが癪にさわつた。「聞いた事も無え！　何も喰はせずに、いつまでも〳〵人を歩かせる。酷いや」

彼はぶり〳〵し乍ら、牧師について大股に歩いて行つた。二人は隨分の道里を歩いた、マカールには一週間か、其餘も歩いて居た樣な氣がした。二人は高く聳つ涯しのない山々を越えて、數知れぬ斷崖の邊を通つて、澤山の森や、林や、河や、湖を過ぎた。マカールには振向くと、いつも暗い未開の森が背後の方に消えて、高い雪の山は暗黑に蔽はれて、地平線にかくれてしまつた樣な氣がした。二人は山をのぼつてゆくらしい。星の光は益々冴えて、沈み掛けてゐる月は、二人の登つてゆく山のむかふからのぞいた。月は二人を逃げてゆく樣であつたが、二人は月が再た地平線にのぼるまで追掛けて行つた。廣い平らな山の背を歩いて行くうちに、宵よりもあたりが明るくなつて來た。星は林檎の樣に大きくきら〳〵と光つた。月は金の樽の底ぐらゐの大きさになつて、平原を隈なく照らして、太陽の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

何れも東へ向かつてゐる。色々の服裝をした多勢の人がその道を徒歩や乘馬でとほつた。幾筋かの道が平原を突切つて、何れも東へ向かつてゐる。色々の服裝をした多勢の人がその道を徒歩や乘馬でとほつた。

マカールは一人の乘馬の男を暫く見てゐたが、矢庭に道を捨てゝ追掛けて行つた。

「止しなさい！　止しなさい！」と牧師はどなつた。がマカールは耳にも入れぬ。彼は其の馬上の男は、六年前に自分の馬を盜んで、五年前に亡くなつた韃靼人であつたのを見つけたのであつた。その男はその同じ馬に乘つてゐる。馬は一踏び毎に雪の雲を擧げながら、荒々しく平原を駈けてゐた。マカールは風の樣に翔つてゐる韃靼人に譯もなく追ひついたので一寸驚いた。韃靼人は追手の來るのを見るとすぐ馬をとめた。マカールはひどく怒つてゐた。「村長さん所へ來やがれ」と彼は叫んだ、「その馬は己のだ。己は其奴の右の耳で分かるんだ、何方が切れてゐる？……此野郎！　他人の馬に乘りやがつて、持主は乞食みたいにてく〳〵歩いてるのに！」

「止せ！」と韃靼人は云つた。「村長さんへ行くにや當らない。この頓知奇な畜生を連れてけ。己が此奴に乘つてから五年目になるが、まだ一寸だつて動きやしない……歩いてる奴の方が己を追ひ越して行く。堅氣な韃靼人がかう愚圖ついてるなあ恥だ！」

彼は片足を擧げて踏び下りやうとした、そこへ牧師が息を切つて駈けつけて來て、マカールを引き

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

戻して怒鳴つた――

「馬鹿！　何をする？　韃靼人がお前を欺まさうとしてゐるのが分からないのか？」

「さうよ、今迄わしを欺してたんだ！」とマカールは猛り立つた樣子で怒鳴つた。「この馬は立派なもんだ、華族さんが乘つたつて好い位なんだ……いつかなんぞ四十ルーブルで買はうつてさへ云はれたんだ……否、只で勘辨はならねえぞ。手前が馬を傷ためたんなら、己は此奴を殺して喰つちまふ、貴樣金を工面して償くなはなけやなんねえぞ。韃靼人だから勘辨されるとおもふか」マカールは內々、韃靼人がこわいので、人だかりのする樣に、わざと聲を荒らげて、怒鳴り散らしてゐるのであつた。が牧師は靜かに云つた。

「靜かにしなさい。お前さんもう死んでるのを忘れたかい。何で今馬が要るんだ？　それにお前さんの足の方が、この人の馬より餘程早く步けるのが見えないのか。かうして何千年も乘つて居たいか」

これでマカールは何故韃靼人があゝしきりに馬を返したがつたのかゞ分かつた。「こすい奴等だなあ」と彼は思つた。それから韃靼人の方を振向いてかう云つた。「己から沙汰のあるまで乘つてやがれ。己あ裁判にかけてやるぞ」

韃靼人は腹立たしげに帽子を眼深かに引きよせて馬を打つた。馬は後足で立ち上がつた、雪はさつ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

と掛かつた、が一歩も進まぬ。

彼は怒つて唾を吐いた。而してマカールの方へ向いて云つた。「なあ友達、煙草を少し持つてないかね。己は煙草が欲しくて死にさうなんだが、己の煙草は四年前に切れちやつた」。

「貴様の友達は犬だい、己なもんか！」とマカールはぷりぷりして云ひ返した。「太い奴も居たものよ！　ひとの馬を盗んだ擧句に煙草を呉れだとさ。ヘン、貴様が地獄に落ちたつて己が構ふかい」

かう云つて彼は行つてしまつた。

「お前さん、あの男に一葉やそこらの煙草もやらないのは間違つてるよ。遣ればお審判の日に大晉長様が百以上の罪を許して下さつたのに」

「何だつてもつと早くさういつて呉れねえんだ？」とマカールは噛みかゝつた。

「今になつては敎へても間に合は無いさ。お前さんが生きてるうちに牧師さん方が敎へといた筈だがな」

マカールはひどく腹を立てた。牧師をおいたつて何の役に立たう？　納め物や金を取り立て乍ら、罪を助かるためには韃靼人に煙草一枚遣るんだといふ事ぐらゐ敎へられない。冗談じやない……百の罪……たかゞ一枚で！　どう考へても損は無い。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「待てよ！」と彼は叫んだ。「己達ぁ一枚で澤山だ、あとは殘らず韃靼人の奴に呉れてやらう。さうすりや皆で四百の罪がたすかる譯だ！」

「振向いて御覽」と牧師が云つた。

マカールは云はれるまゝにした。背後(うしろ)には雪に埋もれた無邊の曠野が擴がつてゐて、韃靼人はほんの黒點の樣に白皚々たる野面(のづら)に見えてゐたが、すぐに消えてしまつた。

「まあ好いや」とマカールは云つた。「彼奴煙草が無くたつてやつてかれらあ。ひとの馬を臺なしにしやがつて――太(ふて)え野郎！」

「否(いゝや)」と牧師は云つた。「あの男はお前さんの馬を臺なしにした譯じやないが盜んだのさ。お前さん覺えてゐるかね。盜みし馬は遠く走らずつて諺を」

マカールは年寄からこの諺を聞いたのを思ひ出した、が彼は生前韃靼人達がよく、盜んだ馬に乘つて町を濶歩するのを見たので、こんな事は忘れてゐたのであつた。年寄の云ふ事もまんざら僞ではないと今になつて彼は思ひ當つた。

始めの男同樣、力の限り馬を驅り立て乍ら、遙か跡になつてしまふ乘馬の人を多勢彼は通りすぎた。其のうちには韃靼人もゐれば、チャルガンから來たのもゐた。その人達は盜んで來たらしい牛に乘つ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

て、長い鞭でそれを驅り立てゝゐた。マカールは韃靼人にあふ毎に、もつと酷い罰が當たつても好いんだと云ひ放つた。それでも彼はチャルガン出の人達と喋べるために立ちどまつたりした、何を云つても國が同じだといふ所で。その上拾つた棍棒で、一所になつて動物を追ひ立てゝまでやつたが、乘つてゐる人達はやはり取り殘されて、直に點々になつてしまつた。平原は涯しなく思はれた。而して絶えず多勢の人に出會ふのにまるで人氣（ひとけ）がない様に見えた。人と人との間は幾百——否幾千里も隔つてゐる様であつた。

多勢のうちに、マカールはまだ見覺えのない年寄に出合つた。その男はぼろ〱の着物を着、古い皮の股引をはき、むさくろしい毛皮の帽子を被つて、はきへらした小牛の皮の鞜をはいてゐた。非常な年寄らしい上に、不思議な事には、足を地面に引きずつてゐる婆さんをおぶつてゐる。みじめな爺さんはぐつたりと杖にすがつて、苦しげによろ〱と歩いては息を切らした。マカールは氣の毒におもつて立ちどまつた。爺さんも立ちどまつた。

「話しなせえ」（ヤクート人の挨拶及談話の習慣なりといふ——譯者）とマカールは生れて始めてやさしい言葉づかひをして云つた。

「否（いや）」と爺さんは答へた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「何か聞いたかね」
「何にも」
「何ぞ見たかね」
「何にも」
一寸言葉が絶えた。が、マカールは爺さんに、一體何者で何處から來たのだと聞き始めた。
年寄はかういふ話をした。餘程以前、まだ娑婆に生きてゐた時分、爺さんは自分の魂を救ふためにチャルガンを出て山へはいつた。彼は仕事をやめて、木の實や草の根で生命をつないで、耕しもしなければ、種播きもせず、穀物も打たず、税も納めなかつた。彼が死んで大酋長の前に出ると、何者でこれ迄何をしてゐたかと聞かれた。彼は魂を救ふために山に住んでゐたと答へた。「宜し」と大酋長は云つた。「がお前の婆さんは何處にゐる？　行つて連れて來なさい」。そこで彼は迎へに行つた所が、途中で婆さんに出合つた。婆さんは家もなく、牛もなく、パンもなく、貧乏し切つて、手足が利かなくなつたほど衰へてゐた、で、彼は大酋長の所へおぶつて連れて行かなければならないのであつた。爺さんはこの話をし乍ら泣いた、が、婆さんはまるで駄馬でも扱ふ様に踵で蹴て、弱々した不機嫌な聲で「お歩きつてば！」と云つた。
マカールは爺さんを憐んだ、而して自分は魂の爲に山に行かないで好い事をしたと思つた。マカー

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ルの女房は、丈の高い、大きな婆さんで、とても運ぶ事なんか出來はしない。あの婆さんが牛かなんぞの樣にマカールを擲らうと思ひ立つた日には、マカールはもう一度死なゝければならないのである。

彼はこの友達を手傳ふ氣で、すこし運んでやらうと婆さんの足をもち上げた、が二三歩ゆくとその足がちぎれさうになつたので放して了つた。重荷をしよつた爺さんは瞬間に消えた程、すばやく行つてしまつたのである。

他にも多勢の人が通つて行つた。重荷を積まれた動物の樣に、盜賊が盜んだ物を背負はされてのろ〳〵と這つて行つた。ヤクートの會長たちは高い鞍の上に乘つて行き、その傍に足の早い勞働者が驅けて行く。無氣味な人殺しが物狂ほしい眼付であたりを見まはしながら、こそ〳〵と傍を通りすぎた。其の男は總身血まみれで、紅い汚點を消さうとして、時々地面に身を投げふした。が何にもならぬ 雪は暗紅色に染つて、不幸な男のしるしはいよ〳〵鮮かになつた。道行く人の怯え惑つた眼色を遁れ樣として、這ひ步く其の姿は實に慘憺たるものであつた。

小さな子供らの魂は小鳥の樣に空中をとびまはつてゐた。

その數は非常であつた、が考へてみれば當然だ。粗惡な食物や、塵埃や、百姓小屋の蓋なしの爐や、氷の樣な隙間の風は惡れな子供を幾百となく殺したのである。子供らは人殺しの傍を飛んでゆく時

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

に、その様子を見て肝を消した。而して怯えさわいで皆飛んで行つてしまつたが、その小さな羽音のさやぎは猶暫く空中にきこえてゐた。

マカールは二人――自分と牧師――が非常に早く歩いてゐるのに氣がついた、而してこれは自分が善人だからだと思つてしまつた。彼は牧師に近寄つてかう聞いた「ねえ、親父さん、私は生きてた頃、どうもちと火酒を好き過ぎた様だが――でもまあ私は善人だらうな。どんなもんだらう、神様は私を好いて呉れるとお前さん思はねえかね」。彼はいくらか牧師から知りたいとおもつたので、かういひ乍らちぢつと其の顔を見守つた。

併し牧師はかう云つたゞけであつた。「好い氣になつてゝはいけない。わし等の行く所はもうすぐだ。お前さんも直に自分で自分が分かりなさらう」

此時、マカールは平野が稍や明るくなつたのに氣がついた。幾筋かの光が東から射し出して、煌々した星を消した。金色の靄が雪に包まれた廣野に立つた、日は一寸薄絹におほはれたが、また華やかさにつとあらはれて、平原に黄金の光を漲らした。マカールはふと不思議な歌がきこえた様に思つた。これは毎日大地が日出を向へる時の讃歌であつた。たゞマカールはこれまで一度もこれに氣がつかなかつたので、この歌のどれ程美しいかを知つたのは今が生れて始めてゞあつた。彼はちつと立ち止

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

まつて聽いた……而してもう先へ行く氣が出なかつた……彼は其處に立つたまゝ聽いて居たかつた、いつまでも〳〵……

けれどもイワン親父(しんよ)は彼の腕にふれてから云つた。「さあはいらう。やつと到(つ)いた」

この時始めて、今迄霧にかくれてゐた大きな戶がマカールの目についた。彼は外(そと)にゐた方が好いとおもつたが、それでも招きに應じた。

二人は廣い立派な農家にはいつた、其の眞中には美しい彫物のある暖爐がおいてある。それは純銀製で、中には黃金の薪が五六本燃えてゐて、快い温味を放つてゐた。其時はじめてマカールは戶外(そと)の寒さを思ひ知つた。この不思議な暖爐の炎は眼を傷めもしなければ、肌をやく樣な事もなく、マカールがいつまでも〳〵こゝに立つてゐて温まり度いと思つた位、心持のよい温かさを感じさせた。イワン親父は暖爐の處へ步いて行つて、寒さに凍ごえた手をさし出した。

この家には二人のはいつて來た戶と、奧の部屋へ通ふらしい戶が三ツと、都合戶口が四ツあつた。長い白い下衣をきた二三人の若者が絕えず出たりはいつたりしてゐた。マカールはこれは大酋長の家來であらうとおもつた。彼は何處やらでこの人達に會つたのをぼんやり思ひ出したが、何處とはつ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

きり思ひ泛べる事は出來なかつた。どれも皆背中に大きな白い翼をたゝんでゐるのが ひどく眼につ
いた。マカールはこんな翼があつては、とても森の中で 木を切る事は出來まいから、大會長には外に
も家來があるに相異ないと考へた。 一人の家來は 暖爐の所へ來て、火に背を向け乍ら、イワン親父と
こんな話を始めた。
「お話しなさい」
「別段申す事もありません」と牧師は答へた。
「娑婆で何をお聞きでした？」
「何にも！」
「何を御覧でした？」
「何にも！」
暫く二人とも默つてゐた。それから牧師がかう云つた。
「私は一人つれて來ましたが」
「チャルガンの人ですか」と家來が聞いた。
「左樣、チャンガンから參つた男です」

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「では大きい秤を持つて來なければなりませんな」

と云つて男は部屋を出た。

何故秤をとりに行つたのか、何を量らうとするのか、といふマカールの問に對して、牧師は困つた樣な樣子で、マカールが生涯にやつた行爲は皆――善い事も惡い事も、秤で量られるのだと答へた。大抵善い行爲も惡い行爲も數が同じ位なので、大方の人の場合は秤が平らになるのであるが、チャルガンの人は特別に惡いので、大會長がその罪をはかる爲めに、わざ〳〵大變大きな秤を作らしたといふのである。

マカールはこれを聞いて尠からず肝を冷した。彼は萎れ返つて全く元氣を無くしてしまつた。

下僕たちは大きな秤を運んで來た。一ツの秤皿は黃金製でごく小さく、もう一ツのは木製で非常に大きかつた。それを床におろすと、床は急に開いてその下に黑い穴がカッと開いた。マカールはすぐに秤皿の工合を見に行つた。彼にはそれがすこしも分らなかつたので、自分のよく知つてゐる仕掛けでやつて貰ひたいとおもつた。彼は一生ベズメンを使ひつけてゐて、秤が自分の得になるやうな、いろ〳〵の細まかい早業を心得てゐた。

「大會長樣の出御だ」とイワン親父は衣を撫でおろし乍ら云つた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

中央の戸があいて、大會長が部屋にはいつて來た。彼は胸までとゞく、美しい銀色の髯を生やした非常な老人であつた。而してマカールの見た事も無い、立派な毛皮や織物で出來た衣をきて、びらうどの縁のついた温い鞜をはいて居た。マカールは或老聖書家がこんな鞜をはいてゐたのを見た事があると思ひ出した。彼はすぐに大會長は教會の畵像で見た老人だと知つた。老人は息子と一所にゐなかつた。息子は自分の用で外に行つてゐるらしい。一羽の鳩が部屋にとび込んで來て、暫く老人の頭の上を飛びまはつた擧句、其の膝にとまつた。

老人は鳥をやさしく撫で乍ら、備への椅子によつた。老人は温和な顏をしてゐる、マカールは心の曇る毎に、一目その顏を見ると氣が安まるのであつた。

マカールは急に全生涯の極く小さな出來事に至るまで思ひ出したので心が曇つたのである。彼は自分の踏んだ一歩々々から、斧の一撃ち〳〵、切り倒した樹の一本々々、人をごまかした一度々々、飲んだ火酒の一盃々々まで殘らず思ひ出した。而して彼は恐しくなつて耻ぢ入つたが、老會長を一目見ると氣が安まつた、氣が安まると同時に彼は惡い行爲をすこし隱したいと思ひついた。老會長は暫く彼を眺めてゐたが、やがて何處の何者で幾歳になるかと聞いた。マカールがこの問に皆答へると老會長はかうきいた。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

「お前は生前何をして居つたな?」
「あなたはわし同然知つてるんでせう」とマカールは云ひ返した。「どこかあなたの帳面の中についてゐる筈ですがね」
彼は何もかも書きとめてあるといふのは、ほんとかどうか知りたい許りにかう云つたのであつた。
「自分でお話し」と老人が答へた。
そこでマカールはすつかりの働きをかぞへ上げた。彼は自分の切つた樹は一本のこらず、又鍬で作つた筋は一筋殘らず覺えてゐるくせに、薪を何千把も何百車も、又播いた穀物を何百貫目もおまけして云つた。
これが濟んでしまふと、老㑹長はイワン牧師に帳面をもつて來いといひつけた。マカールは牧師は㑹長の書記だと知つた。それならさうと一言洩らしても好いに、と思つて彼はひどく怒つた。
イワン牧師は大冊の帳面をもつて來て、それを開いて讀み始めた。
「何把だと云つたね?」と老㑹長はきいた。
牧師は帳面を見て悲しさうに云つた。「この男は三千把おまけをつけましてございます」
「僞言(うそつ)吐け!」とマカールは腹立たしげに怒鳴つた。「この人は間違へてゐるに違ひありません。こ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の男は飲んだくれで、見共ない死に様をして……」

「默れ！」と老會長は云つた。「この人がお前の婚禮や洗禮のために餘計な金をとつた事があるか。納め物を無理取りした事があるか」

「い……いえ」とマカールは答へた。

「それ見ろ！」と老會長は少し立腹して云つた。「この人が酒好きなのは己がちやんと知つてる……さあ、この男の罪を帳面にある通りに聞かしてくれ、己はもうこれの云ふ事はあてにせん、これはうそ吐きだ！」

この間に家來どもは薪だの、材木だの、耕作だの、種播きだの――つまり殘らずの仕事を量かつた。すると それは山の様に あつたので、黄金の秤皿が下がつて、木製のが高く〳〵上がつた、若い下僕どもは再た秤を引きおろす事の出來る様に飛び立つて繩を結びつけた。

イワン牧師はつゞいてマカールの罪を讀んだ。マカールは二萬一千九百三十三度うそをついて、火酒を四百本飲んだ。讀むうちにマカールは木の秤皿が下がつて行つて、穴にとゞきさうなのを見た。彼はすつかり見えなくなりはしないかと心配して、傍に寄つて、そつと足でとめやうとした。が一人の下僕がそれを目付けて大さわぎになつた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「どうしたのだ？」と老會長は訊いた。譯が知れると彼は腹立たしげにマカールの方を向いて云つた。「お前は僞言家で、怠け者で、酒飲みだな。借金は一つも返さず、稅は納めず、おまけに知事にお前を罵らして罪を作らした！」それから彼は牧師にチャルガンでは誰が一番馬を酷くして重荷を背負はせるかと問いた。

イワン牧師は答へた。「教會の長老でございます。あれは驛馬を持つて居りまして、長官を乘せたり致します」

「この怠け者の鍊で無しを其の男の馬にしろ」と會長は云つた。「この男に働けなくなるまで長官の車を引かせて…… それから……」

彼がかう云ひかけてゐる時、戶があいて、息子が部屋にはいつて來て、彼の右手に坐つた。さうしてかう云つた。「御宣告を伺ひましたが……私は長いこと世の中に住んでゐてその事情をよく知つて居ります。長官の車を引くのはその男には隨分つらからうと思ひますが……まあそれはそれとして……併し何か自分でも云ひたい事がありませう！ 云つて見なさい！」

するとこゝで不思議な事が起こつた。一生涯に十言と物の云へなかつたマカールは、不意に能辯になつた。彼はもう恐れてはゐなくなつた、而して始めは怒つてゐた老會長も感心して耳を傾けた。牧

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

師はマカールを默らせやうとし、て上衣の端を引張つた、がマカールは忌々しさうに振り放した、牧師はうれしげに微笑しながら其の教區民の演說に聽き入つて、老酋長にもそれが氣に入つたのを見て取つた。白い衣と翼とを着けた下僕ども〻、奥から駈け出して來て、マカールの大膽な演說を、驚嘆し乍ら聽いて、何か感じた時には互に突つき合つた。

マカールはかう云ひ出した。彼が馬になつて、教會の長老に屬くのをいやだといふのは、仕事を恐れるからではない、宣告が不當だからである。惡魔に遣られても猶彼は屈服はせぬ。彼は馬になるのが恐くはない。何故と云へば長老は馬を酷くするにしても麥を食べさせる。所が彼は一生酷い目に合はされ乍ら一度も麥を食べた事がない。

「誰がお前を酷い目に合はした?」と老酋長が聞いた。

誰が? 誰も彼も彼を一生酷い目に合はせた。長官や判事や村長は年中稅を、牧師は納め物をせがみ立てた。飢と貧苦は彼を彼方此方に追ひ立てた。夏は旱魃に、冬は寒氣に惱まされ、何にも實らぬ未開の森と凍つた土にも苦しめられた。彼は何處へ行くのか知らずに驅り立てられる家畜の樣に生きてゐた。牧師が教會で何を云ふのか、何故納め物をとるのか、彼は知つてゐたゞらうか。兵隊にとられた長男がどうなつたか、彼は知つてゐるだらうか、彼はその長男がどこで死んだか、その愍れな骨が

どこの隅で腐つてゐるかも知らない！　皆は彼が四百本の火酒を飲んだと云つて責める、がそれがどんな火酒だか知つてゐるだらうか。その四分の三は水で、四分の一は強めるために煙草を混ぜた火酒だ。であるから三百本は立派に棒を引いて好い筈である。

「ほんとか」と酋長は牧師にきいた。

「ほんとでございます」と牧師はあはてゝ答へた。

マカールはなほ續けた。薪に三千把おまけをつけたといふ。それは左樣だ。彼はたつた一萬六千把した作らなかつた。それで十分ではないか。彼は前妻が病氣の時に二千把作つた……彼の心は暗かつた。彼はどんなに病妻の傍に坐つてゐたかつたらう……が彼は森の中で働かなければならなかつた……森で彼は激しく泣いた、涙は睫毛に凍りついた、彼の重い心は身のうちで凍つて、行つた。それでも彼は仕事をしつゞけた。女房は死んだ。彼はその墓代を拂ふために木挽きになつて商人にやとはれた……商人は彼の貧乏なのを知つて一荷について十錢しかくれなかつた……その間、彼が木を挽きながら激しく泣いてゐる間、死んだ女房は冷たい小屋に一人寢かされてゐた。たしかにあの薪は價値の五倍だけの眞價はあつた！

老酋長の眼には涙が見えた、マカールは秤がうごいて、木の皿が上がつて、黄金のが下がつたのを

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

見た。

マカールはなほ云ひつゞけた。何もかも帳面についてゐると聞く、では、一度でも彼が人に可愛がられたか、傷はられたか、生涯に何の快樂を味はつたか、一寸調べて貰ひたい。彼の子供らはどこにゐるだらう？　若死したのは彼を嘆かせた、大きくなつたのは皆離れてしまつて、彼は一生一人であがいた。彼は後妻と只二人で年をとつて、老年の忍び寄るのと、力の衰へてゆくのとを感じた、そして恐ろしい貧苦と顏をつき合はせた。二人は孤獨である、慘い雪嵐に鞭うたれてゐる曠原の寂しい二本の樅の木の樣に孤獨である。

酋長はまたきいた。「ほんとか」

牧師は答へた「全くほんとでございます」秤はまた頷へた……が、老酋長は思ひに沈んでゐた。

「どうした譯だらう？」と彼は云つた。「地上にはまだ善い人達が住んでゐる。その眼は輝いて居るし、顏は冴え〴〵して居るし、着物は淸淨だ……その心は好い土の樣に柔らかい。それは好い種子を受け入れて、美しい實を結ぶ、其の香は己の鼻に快い。お前自分を見て御覧……」

皆の眼はマカールに注がれた。マカールは己が姿に耻ぢた。彼は自分の眼は輝いて居らず、顏は曇つて居り、髯はくしや〳〵にこぐらけてゐるのを知つてゐた。實の所、彼は堅氣の百姓として審判の

場へ出られる樣に、死ぬ迄には靴を一足買ふつもりでゐた。けれども金はいつも、酒に使つてしまつた、而して今、自分は最後のヤクート人の樣にぼろ〳〵な靴をはいて酋長の前に立つてゐる……マカールは穴にもはいり度かつた。

「お前の顏は暗い」と酋長はなほ云ひつゞけた。「眼は輝いて居らぬ、着物は破れてゐる。心には雜草や荊棘が蔓つてゐる。だから己は純潔で善良で神聖な己の手下を愛して、お前の樣な者には顏をそむけるのだ……」

マカールの心は張り裂けさうであつた。彼は自分の生涯を耻ぢた。彼はうなだれた、が急にまた頭をあげて口を開いた。

酋長の云ふ正しい善い人達とは何であらう？　マカールと同じ時に地上の立派な宮殿に住んでゐた人達の事なら彼はよく知つてゐる……その人達の眼が輝いてゐるのは、彼ほど多くの涙を流さなかつたからだ、顏が晴れ〳〵としてゐるのは香料を浴びるからだ、その清潔な着物は他人の手に成つたものである。彼だつて外の人同樣、鏡の樣に天地を映す、輝いたはつきりした眼や、世界にある美しいものをすべて受け入れやうとする純潔な心をもつて生れては來なかつたであらうか。今彼が見る影もない自分を土の下にかくしたいと思つた所が、それは彼の咎ではない……誰の咎だか彼は知ら

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ない……彼の知つてゐるのはもう我慢がし切れないといふ事だけである。

もしマカールが自分の言葉が如何に老酋長を動かしたか、又一言々々が鉛の重りの様に黄金の秤皿に落ちたのを見たならば、その反抗心も和らいだことであらう。がその心は盲目的な絶望に満たされてゐたので彼は何も見なかつた。

彼は實に辛らかつた過去の生涯を思つた、どうして今まで堪へて來たらう？ 彼が堪へたのは希望の星が暗の奥に輝いてゐたからである。もう星は消えた、希望は亡くなつた……暗黒は彼の靈を襲つて、深更に荒野を奔る暴風の様な嵐がそこに起つた。彼は自分がどこにゐるのか、誰の前に立つてゐるのか忘れてしまつた……自分の怒りの外何もかも忘れてしまつた。

が、老酋長は彼に云つた。「待て！ お前はもう地上にゐるのではない。此處には正義があるぞ」

マカールはふるへた。彼は皆が自分を憐れんでゐると感じた、而して彼の心は柔らいだ。彼は慘澹たるその生涯を思つて聲を立てゝ泣いた、我が身の上を泣いた。老酋長も泣いた……イワン親父も泣いた、若い下僕達の眼からも涙が流れた、彼等はそれを廣い袖で拭つた。

秤は顫へた、木の皿は高く／＼上がつて行つた！

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

伊達虫子の御紹介

岡田八千代

伊達虫子を御紹介申上げます。伊達虫子は色が白くて中肉中背です。あんまり馬鹿でもありませんが、あんまり利口でもありません。ですから、其作物だつて萬人にすぐれろは愚か、一人の人のにも勝れては居ないでせう。けれども、只嘘を書かない、と言ふ事丈はたしからしいのでございます。

伊達虫子は本統の事を書きます。そして思つたまんまを言ひ度いのださうです。けども、男の眞似をしやうといふのではありませんから、いくら力んだ處で其力はいたつて弱いものでございませう。けども、まア嘘を言はないといふのですから見てやつて下さいまし、どんな人間でも弱けりや弱いなり、強ければ強いなり、死ぬまでには、何にかぶつかるものでございます。其中の一ツにどうも自分はぶつかつたらしいと虫子は言つてをります。どんなものにぶつかつたのか、聞いて見やうぢやありませんか。聞いて見たら案外、だれでもやたらにぶつかつたものかもしれません。さうだつた處でだれでもぶつかるものにぶつかつたといつて、たつた一人でぶつかつたつもりになつてる處もおもしろいかもしれません。とにかくまア御見得えをさせませう。あゝまだ言ふ事があります。虫子は非常にBINBOなのです。ですから頂けるなら其紙に對していくらかを頂き度いと申します。けれども、あなた方の方はまだ御店も新らしいし、雑誌の體裁も――名前はあまり好かないが、富本さんの表紙がいゝと言つてます――自分が好きだし、ましてや、自分も店開きの廣告を只でして頂くやうなもの

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

だから今後とても何にも下さらなくとも宜しいさうです——下さればなほいゝさうです——其代りもし書いたものが、お氣に入つたら、充分にちやうちんを持つて頂き度いといふのです、さうすれば、そら、どこからか買ひに來ませう? 夫を待つてゐるといふのです、何しろ、原稿紙もペンも買ふおあしが無くちやア、どうする事も出來やアしませんからねえ。みなさんに持つて頂く筈のちやうちんをわたしが先にもつてしまつてはすみませんから、此位にいたします。では何分よろしく御願ひいたします。

御目見得

伊達虫子

みな様、はじめてお目にかゝります。わたくしが伊達虫子でございます。どうぞ宜しくお願ひいたします。

わたくしも今度はじめてこんな舞臺へ飛び出したのでございますから、とてもみなさんの御紹介がなくては世間の方にわたくしの愚痴も聞いては頂けまいと存じます。けれども、まア——まアなんて失禮は御免下さい——お店が新らしいと並んでゐるものもどうやら新らしいやうに見えるもんですから、千人の中の一人位は、おや、あんなものもあるよなど、目をつけて下さる方もあらうかと存じまして膝を並べさして頂くわけでございます。あんまり申すとぼろが出ます。あんまり早く出すと捨てられます。ぼろは時々出すに限ります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さようなら

伊達虫子

さやうなら、さやうなら、あたしの好きなさらの年、さやうなら、さやうなら。お前は、わたしがあの時泣きも笑ひもしないのを不思議に思つたかもしれない。けれども、第一のお別れの時は自分が別れなくてはならないと思つたのだから、其處に悲しい〳〵涙があつたのだよ。けれども今度のお別れはね、お前の方で別れやうといふのだから、其處に喜びがなくてはならないのだよ。フン喜ぶだら笑ふがいゝとお前はいふかもしれない。けども「笑ひ」なんてものは嬉しい時にばかり出るものぢやない

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

よ。あれは決して喜びのしるしぢやありやァしないよ。だからわたしは笑はなかつたのさ。わたしは第一のお別れの時にはね、よく忘れないやうにと思つて、お前の顔をぢつと見たつけね。あの薄暗い新川の雨夜の道のぬかつく中で、暗い箱のやうな家の門からさす、片灯にぢつとお前の顔を見たつけね。わたしがお前の顔を見てるのを、お前は知つてた時もあるし、知らない時もあつた。そしてその知らない時の方が、ほんとのお前の顔らしい顔をわたしは見る事が出來たのだよ。二度目のお別れにも雨が降つて居たつけねえ、わたしはあの長いさみしい橋の上で、寒い／＼風に吹かれながら、お前を待つて居た時。わたしはわたしの時間をおくらしたのを知つて居ながら。もう今夜、お前に逢へなけりや、一生お前に逢へないと思つたのだよ、そしてあの長い橋を三度行きかへりして、三度お前の家の前を通つたつけ。そんな事をわたしは恩にきせるんぢやない、わたしはお前を信じてゐたから、逢へない筈が無いと思つたからだよ。けどもお前の家はひつそりしてゐたし、もう橋の袂の交番の巡査は雨夜に幾度か橋を行きかへるわたしに目をつけたらしいので、もうわたしには橋を渡る勇氣は出なかつたのだよ。それでね。わたしもひどくつかれて居たし、夫にもうわたしの時間も無くなつたから、仕方なしに歸らうとしたのだよ。夫でね、其時かう思つたの、こんなにしても逢へないし逢ひに來てくれないのなら、お前はわたしの思つてた人ぢやなかつたのだ――かう思つたのだよ。けれどもわ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

たしも女だからね、もしお前に嘘をついて、寒かつたり雨が降つたりしたので來なかつたやうに思はれるのがいやだつたから、夫でわたしは何でもポストのある處まで行つて、そしてハガキでも書いて出さう、そしたら、ことによると、お前もわたしがハガキでも買つてやしないかと思つて其處へ來るだらうと思つたのだよ。そして、わたしはハガキを下さいハガキを下さいとあすこの家でどなつたのだよ。けども、だれも出て來ない。わたしは買はなくてもハガキを持つてゐたのだよ。只さうしてたらお前が來るやうに思つたのでさうしてたのだから、此處でもわたしにハガキを賣らないのなら、やつぱしお前にはもう逢へないと思つたのだよ。夫でもう仕方が無いハガキも書かずに行かうと、かうきめた時に中から人が出て來たのだよ、そして、何枚？　ときいたのだよ、三枚とわたしは言つたんだよ、おかみさんがハガキを三枚出してくれた。そして夫を受けとらうとした時、わたしはどうしたのか、一寸左をふり向いたのだよ。其處にお前は、まぼろしのやうに立つて居たのだよ。わたしはぞつとしちやつたよ。ぞつとするのと同時に泣きたくなつちやつたのだよ。ハガキ屋のおかみさんがけゞんな顏をしてわたしを見たよ。きつとわたしが變な顏をしたのだらう、あすこの店は灯が馬鹿に明るかつたからねえ。

お前はわたしがあのハガキに何を書かうとしたかお分りかい？　分るまい。わたしにも分らない

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

のだもの。わたしは之までお前に逢ふ時には、もう次に逢ふ日を考へて居たよ、けれどもね、あの晩ばかしは、ちつともそんな事は考へなかつたのだよ。そして此後逢つてゆくのか逢はないのか、そんな事も考へちや居なかつたよ。只ね、わたしが此間お前と第一のお別れをして、其次に種々な事――これは段々にいふよ――で、もう一ぺんお前に逢ひに行つてから後に、思つたまんまの事を書いたノオトが出來たので、只夫をお前に渡したいばかりでお前がお前のつとめ先から歸る道で、一寸逢はうとしたのだよ、只、逢つて渡しさへすりやいゝと思つたのだよ。夫でその事を電話できくとお前も、なにかわたしに渡し度いものがあるといふのだろ、夫でわたしは出て行つたのだよ、わたしはね、道をしらないよ、橋といへばどれでも橋、一度のりかへずに行つた處はいつでものりかへずに行かれると思つてる女だよ。だからね、やつぱりわたしはわたしらしく橋を間ちがへてしまつたのさ。そして、二度その橋を歩いてそしてはじめて橋の名を見てちがつた事を知つたのだよ。夫からそのあともわたし流の事をやつてね、やう〱あの橋へ來た時は、もう約束の時からは一時間近くもおくれて居たのだつけ、わたしはすまないと思つたよ、お前のやうなかよわな身體――大切な身體をきつと、此寒い〱風にさんざさらさせたのだらうと思つてね――さう思ふとわたしは、一度位でお前が見つからないと言つて、歸つてしまふ事は出來なかつたよ。お前に渡さうとする包は持ち重りをするし、雨はなか

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

〳〵やまないし川風は手の切れさうに吹くのだよ、——わたしはそんな事をいふのぢやない。これは只お話しよ。

けどもお前は見えない。三度、あの長い橋を人に目をつけられないやうに行きかへりをするのには一寸氣がさすもんだよ。けども、きつとお前も此通りに手をかじかませ、頬をひやし、足を勞したのだらうと、思ふとわたしはどうしてもそんな事では歸るわけには行かなかつたよ。——わたしはさつき此次にお前に逢ふか逢はぬかは考へなかつたと言つたつけねえ、あれは嘘だつたかもしれない、嘘ではないが、間違ひだつたよ。——わたしはねえ、次の事を思つたので、今日は澤山の時を費やしてはならぬと思つたのだよ。第一のお別れの時には、もう逢はぬといふ決心がわたしにあつたから、いくらでも、お前のゆるすかぎりの時間をお前に上げてしまはふと思つたのさ、其爲めにわたしに破滅が來る。そんな事はわたしはあの時何とも思つてやしなかつた。もうお前に逢はないわたしの破滅はわたし丈の破滅だからねえ。けれどもお前に逢つて行かうとするわたしの破滅は、ひいてお前にかゝはるから、わたしはお前に逢つてゐる中は、わたしの身に破滅があつてはならないと思つて居たのだよだから、あの橋の晩に、わたしは次の事を思つて居なかつたと云ふのは間違ひだつたかもしれない、只、次の事は分らなかつたが、次の事をああせやうとは思つては居たらしいのだよ——

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

あすこで逢つた二人は「どうもすみません」と一處に言つたつけねえ。お前は羽織も着ず、足袋もはかずに居たねえ、そしてわたしと寒い中を歩いて下すつたのね、その時、お前はかう言つたね、書いたものがある。わたしは其書いたものを見て貰つてから逢ひたかつたのだよ、と言つたつけねえ。夫から、今度こゝに書いた方法はもうどうしても替えないのだよ、と言つたねえ。わたしは其時ね、はつきりとは分らなかつたが、只何にか恐れては居たよ。その時わたしはわたしのノオトをお前に渡してお前の手紙をわたしの包の中に入れたのだつた。

夫から少し歩いてる中にお前はお前の手紙に書いた事を話してくれたつけねえ。わたしは、えゝえゝと返事をして居た。雨が降つて居たから、二人ともに傘をさして居た。わたしは知つた人が多いしお前も家の近處だから、二人とも傘を深く深くさして居た。だから、わたしはお前の聲を聞くばかしだし、お前はわたしの聲をきくばかりだつた。あの時から二人は顔を見なかつた。けれどわたしはあの儘お前の顔を見ずに分れてしまふのだとはまだ考へてやしなかつたよ。

わたしにはお前のいふ事はよく分つた。お前にもわたしの「えゝ」といふ返事は一ッ殘らず聞えたらうと思ふ。

お前はかう言つた。わたしは第一の別れの次にお前に逢つた時、わたしは今迄に見ないものを見た

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

夫はもて遊ばれてる人の顔だと言つたね。其次にはかう言つたよ。わたしはあの時に今までのお前よりもヽつと〳〵お前を知る事が出來た。夫でもうお前に逢はなくても居られるといふ勇氣が出た。わたしは虫子といふ神樣を發見した。神樣といふものは信心すれば必ずこつちの心が通ずるものだと言ふ事をわたしは知つてゐる。わたしはこれからは何でもする。お前に逢ひはじめてから、もう決して見ないと言つた芝居も見る、お前の爲めに別れた友人とも逢ふ。何でもやるけども、虫子に逢ふ事丈はしない。虫子に手紙をやる事だけはしない。虫子もわたしに逢つてはならぬ、虫子もわたしに手紙を書いてはならぬ。わたしは第一の別れの時にも言つた通り遠い土地で病人である自分の妻の爲めにいヽ旦那樣となり自分の母の爲めにいヽ子息となる。だからお前はもしわたしの妻を通してといふ事がいやでない、なら手紙をおよこし。わたしの妻とお前とは友人だから、友人が時々手紙のやりとりをする事はなんでもない事なのださうだから、さうおしけども夫がいやならしなくても好い。

とらの年！お前の言つた事は、こんな事だつたねえ、まだあつたかもしれないけれど、今は思ひ出せぬ。話のつきた時、丁度わたし達は、待合の瓦斯燈の滓山出てる露路の角の處に立つて居た。やつぱり雨は降つて居た。灯が幽かにさして居た。二人は別々に傘を深くさして居た。わたしはその時かう言つたつけ、夫ぢやアね。わたしはお前にもう一ひのノオトをあげるよ。けど夫にはお約束がある。夫

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

は今お前のおかみさんは大病だ。その大病が癒つたら見るといふ約束をしてくれるのなら、渡してあげる。でないともう渡す時がないかもしれないから。かうわたしが傘の中から言つた。えゝ何か言つて?とお前はわたしの傘の中を覗かうとした。わたしはお前の顔の出る方へ傘をかざした。そして、も一ぺん其事を言つた。けれども一寸の間お前はだまつて居た。わたしは涙がつき上げて來た。タッタ一ッのたのみぢやありませんかと言つた。往來だから人に聞かれてはならぬと思ふので わたしの聲は低かつたかもしれない。するとお前はえ?聞えなくつてよ。と言つた。夫からわたしは今度は元氣に只約束をして下さるなら一つのノオトをあげてよ、と言つた。やつぱり傘はお前の方へかざしたまゝだつた。

えゝ約束してよ、決して破りやしません。とお前が言つた。夫でわたしはわたしの包の中からノオトを出さうとした。傘をさして包をあけるといふ事は一寸むづかしい仕事だつた。お前もさう思つたのだらう、手傳つてくれさうに側へ來やうとした。わたしは夫を避けた、そして傘を疊んで其處の倉のやうな處の側に廻してあつた垣根の處に置いた、雨がかゝるでせう、とお前が言つてくれた。わたしは默つてた。お前はわたしの顔を見やうとしてるらしかつた。わたしはお前の居る方へ背を向けた。わたし達の立つてる前には小さい溝があつたそして其向ふは直ぐ倉の壁であつた。お前は、わたしの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

右か左か後かでなければ立つて居られなかつた。だからわたしは右か左かへわたしの顏を反向けさへしたら、お前を見ずにすむ事が出來た。わたしは包から出したノオトを肩の處へ出した。失禮だと思つたが、お前の顏を見まいとすればさうするより外に仕方はなかつた――惡かつたらわたしはあやまる。さうしてお前がノオトを取つたひまにわたしは、傘をさした。そして、ではもう分つて、よ、遲くなると不可ないからお歸んなさい、とわたしは言つた。そしてごつちの電車へのればいゝの、とやつぱり傘の中からお前に聞いた、そして只歩き出さうとした、其處からのるのよ、とお前はわたしの見なければならぬやうに指さしをしたらしかつた。けどもわたしは見なかつた。さう？といひながら反對の方へ二三歩出た。其中にもお前はわたしの顏の見える方へ夫となしに出やうとした。わたしも夫となしに傘を廻した。お前も夫となしにした、わたしも夫となしにした。そしてお前はかう言つた。あつちへゆく電車ですよ。と優しい兄さんのやうに言つて、又わたしに其方向を見せやうさした。わたしは見なかつた。さう？どうもありがと、ぢやアもう分りましたわ、さよならとわたしは言つた。電車が來た。わたしは早くお前の側が離れたかつた。――いゝえわたしが離れ度いと言つては嘘になる。――わたしをお前から早く離してやりたかつたのだつた。夫でさやうならと又言つた。さやうならとお前も言つてくれた。そしてわたしは後を見ずに電車へのつた。わたしは今までお前に逢つてるう

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ち中、お前にさよならを言つて電車への る時は、きつとお前の顔を見ながら乘つて、お前の顏を見ながら座つてお前の顏を見ながら電車に連れてゆかれた。そしてお前もわたしの乘つた電車がもうどうしても見えなくなるまで見送つてくれた。けれどもあの晩、――第二の お別れの晩には、わたしはお前の顏を見ずに乘つた。そしてお前からもわたしからも見えないやうに電車の眞中に腰をかけた。そしてわたしは何にも考へまいと思つて、電車の中に掛けてある廣告を端の方から、靜かに靜かに讀んで行つた。自分の前にあるのは、一番に澤山よんだ。けれども覺えては居ない。なんだか大陽に顏のついたやうな繪で片假名で 文句が書いてあつた。夫丈を覺えてゐる。わたしは電車の中で、お前から渡された、お前の話した事を書いてあるといふ 手紙を見やうとした。けども止してしまつた、只なんといふ事なしに見ない方が好いと思はれたのだ。

わたしは乘換を間ちがひもせずに家へ歸つて來た。わたしの良人である王樣は まだ歸つて居なかつた。わたしは、遲かつたらう、寒かつたよと元氣に 小女に言つた。そして 御飯をたべた。お湯に這入つた。それから何をしやうかと思つた。――わたしはわたしの室の机の前に立つてぼんやりして居た。さうしてる中に、わたしは、お前から貰つたノオトも手紙もみんな焼いてしまはふと思つた――けど、夫はどうしてもわたしには惜しくて出來なかつた。そしてわたしは わたしの ノオトがお前の手許に

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

大切にしまはれてあるといふ事に氣が附いた。夫で、あれもわたしの上げたノオトなら、これもわたしのノオトだ、このわたしのノオトをしまつといて貰ふ位はしてくれるだらうと思つた。けれども、さうするにはその事を書いてやらなくてはならぬ。けども手紙はかく事はできない。わたしはどうしたもんかと考へた。考へた後わたしは、お前が、お前の友人にも手紙をかいてはならぬとお前が言はなかつた事に氣がついた。夫でわたしは、直ぐに始終もつて居たお前の手紙——お前の字と言つた方がいゝかもしれない——全體を入れた袋と、お前が貸して下すつたお前の日記とお前に貰つたわたしの魂のやうなノオトと、第一のお別れの後にお前の手紙から別にしてしまつたお前のおかみさんの手紙のふくさ包と、それ丈を一處にしてそして其上をわたしがお前に第一のお別れをした時にわたしの涙を拭いたのとおなしの白絹のはんけちでしつかりと包んだ。其時わたしは、わたしがお前に逢つたために自分が此世に生れた事に一ツの意義のあつた事をしらして貰へたお禮に何にもあげるものゝないのを大變にかなしんだ。BINBOなお前の事ゆゑ、あげられゝばおあしがあけ度い。けども同しにBINBOなわたしには夫は出來ない。品物の、夫はみんなわたしが王樣からして貰つてるものだ。そんなものはわたしのものぢやない。わたしのものでないものをお前にあげたくはない。わたしは仕方がないから、わたしのおあしでわたしが買つたわたしの好きなわたしの小刀を出した。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

そしてわたしの小指の先を夫で刺した。痛くもなんともなかつた。痛くなくちや芝居にならぬが少しも痛くない。――此時わたしは血といふものは恐ろしくないものだ。芝居といふものは馬鹿らしいものだと思つた。――血はわけなく出た。これぱかしはわたしのものだ、ほんとのわたしのものだと思つた。そして包の裏を返して平らな處にわたしは其血でかうかいた。

さやうなら

はい〳〵　さやうなら。

お前とわたしとが電話ではなす時、よくかう言つたつけねえ、わたしは夫を思ひ出したのだつた。そして夫をさつき傘の中から言つてあげなかつたのがすまぬと思つたからだ。藥指を小指の背にあてゝ親指を小指の腹にあてゝわたしは血をしぼつた。なか〳〵出ないで、すら〳〵うまく書けないわ。たしは途中で、もう一邊先の疵の處へ小刀の先を入れた。そして其口を少し開けた。血はよく出て來た、それでわたしはよくはつきりしない處をなぞつた。そして、

三年三月九日夜

と左の上に書いて、右の下に虫子と書いた。虫子といふのが一番にはつきりよく書けた。

夫からわたしは上包をかけた。――上包の紙は、お前の友人がお前の事を書いた小說を包んで送つ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

てくれた紙で、其紙は、その前にお前の昔の戀人がお前の友人に何か送つたものと見えて、お前の友人の宛名とその戀人の本名とが書いてある紙だ、して見るとあの紙には、お前とお前の友人とお前の昔の戀人とわたしとの名がかいてあるわけだ、なかくめつたにはないものだねえ——

わたしは夫からお前の友人に一通書いた。こんな工合に。

わたしは今夜とらの年と「はゝさやうなら」をいたしました。そしてもう手紙も貰へないし、やれなくなつてしまひました。そしてわたしがあなたに書く事もとらの年はきつと厭でございませう、けどもたつた之つきりの一通ですおゆるし下さい。わたしは只今この手紙と一處にあなたの氣附にしてとらの年に小包を一つ出しました。つきましたらそつくりお屆け下さいまし、あの中のすべてについてとらの年は氣持を惡くするかもしれません。けども仕方がありません。わたしはわたしの廻りにとらの年にかゝはるものがすべてのき度くなつたのです、そしてさうしてわたしの心をためし度いのです、そしてさうしたからと言つて、わたしの心の何のかわりもないといふ事も信じられますし、何一つなくてもわたしにはよくとらの年の事は分つてをりますから。

夫から、いつかわたしはとらの年の奥さんから、買物を一つたのまれてました、夫をつい忘れ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

てをりました。品物はビンドメで小さなものですが忘れてすまなかつたと思つてるのですから、今度ころの年が奥さんの處にゆく時に買つてつて上げるやうに頼んで下さいまし、むろんわたしから聞いたなんぞとはいはずにですよ。夫から、わたしはきつと御仰つた事は守りますつて、夫から頂いたノオトを返ししたのは、決してお返ししたんぢやありません。あれはわたしのノオトと一處にして置かなければならないものと思つてお送りしたわけなのです。夫から、わたしはころの年と第一の別れをした時、わたしはころの年の昔々の戀の死んだ日に自分も死なうときめて居たのでした。そして夫は必ず出來ると思つてたのでした。けども、今はそんな事は思つてをりません。わたしには王樣があります。うつかり死んでは其人の迷わくになります。そして又ころの年へのあてつけになります。さう思はれて來ましたから、わたくしはもう自殺なんかしやうとは思つてをりません。それをどうぞお傳へ下さいまし、まア自滅を待つ丈です。

こんな事であつた。もつとあつたかもしれないが忘れてしまつた。そして其手紙はお前に見せてくれと書いたのだよ。見てくれたかい？　だつてあれにはわたしは決してあの後の事をかいてはしないよ。みんな過去の事ばかりだもの。そして過ぎ去らして置かなくちや、ならなかつた事ばかりだも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の。あれでも、夫も悪いといふのならあやまるよ、手をついてあやまるよ。そしてそのあげくにお前があの手紙を見もしずに、焼いたと聞いても破つたと聞いてもわたしはなんとも思つてやしないよ。さやうならさらさらの年、さやうなら、さやうなら、はゝさやうなら！

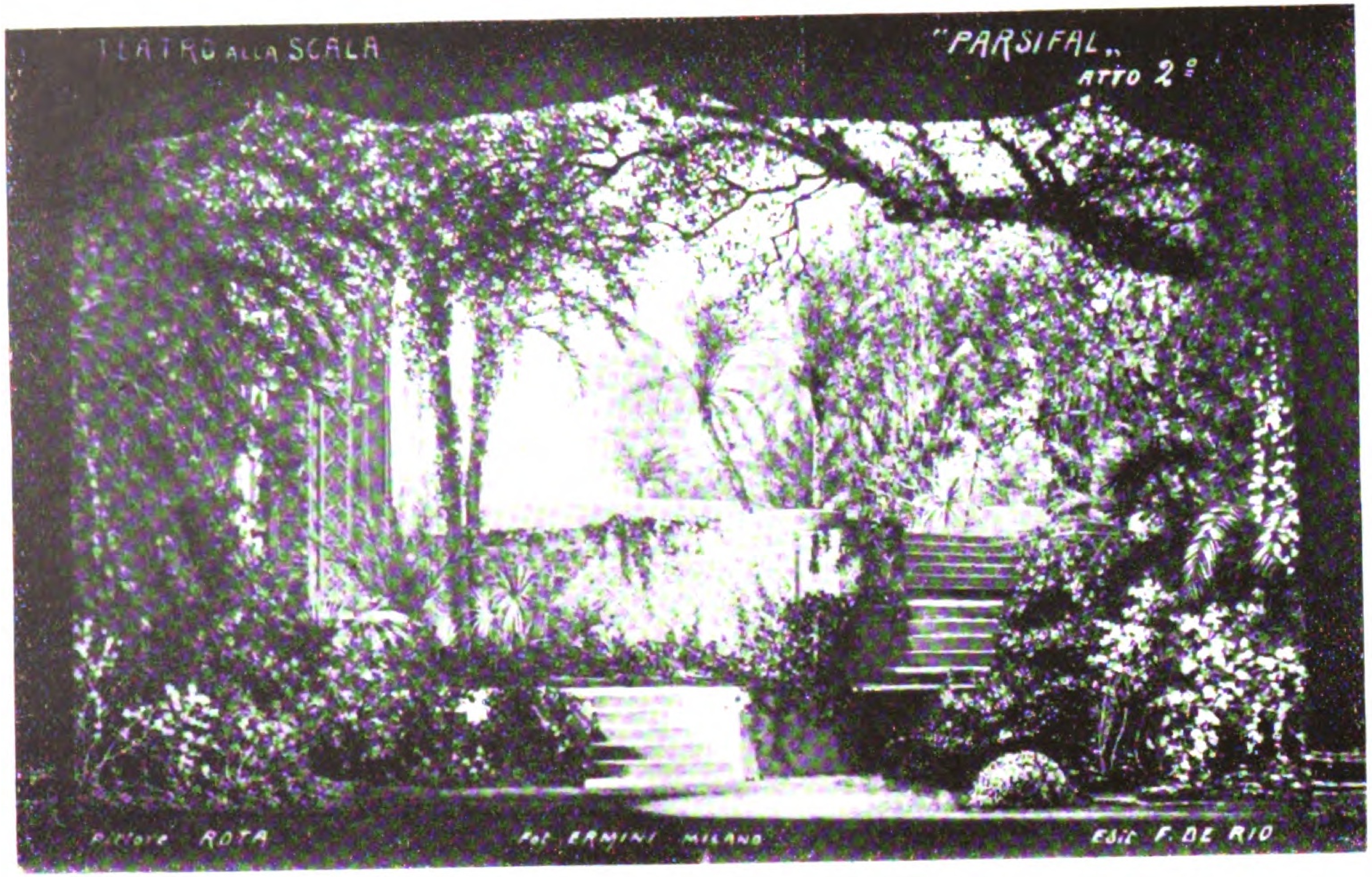
（一九一四、三、一〇）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

"PARSIFAL" AKT 2º

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

パルシフアルに就て

原　信　子

パルシフアルは前號に紹介してありました如く本年一月始めて版權が切れたのでバイロート以外の劇場にても演ずることが出來ることゝなりましたので歐洲諸都は本年の來るのを待ち構へて居たのです、故に一日の初週に少なくとも四十ケ所の劇場でパルシフアルは上場されて歌はれたさうです、獨逸伯林の如きでは同時に二ケ所でパルシフアルが歌演されました、其公演の始めに既に二十四日間は賣り切れになつたと申す如き盛況でした、又其ローヤルオペラでは週中毎晩の歌演で二組の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

パルシファルに就て

原　信　子

パルシファルは前號に紹介してありました如く本年一月始めて版權が切れたのでバイロート以外の劇場にても演ずることが出來ることゝなりましたので歐洲諸都は本年の來るのを待ち構へて居たのです、故に一日の初週に少なくとも四十ケ所の劇場でパルシファルは上場されて歌はれたさうです、獨逸伯林の如きでは同時に二ケ所でパルシファルが歌演されました、其公演の始めに既に二十四日間は賣り切れになつたと申す如き盛況でした、又其ローヤルオペラでは週中毎晩の歌演で二組の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

歌ひ手が勤めたと云ふことです、其他ブタペスト、でもプラグ府でも各二個の劇場で同時に歌はれて居たのです、何處も彼處も非常なる感動を與へたとの報知が參つて居ます、パルシファルはワグネル物の中にても一番の傑作として認められて居るものです、殊に之は彼が晩年の作で圓熟したものであることは定論となつて居ります、此パルシファルが完成したのはワグネルが伊太利のパレルモーに舊痾を靜養して居た時でありました、其詩の出來たのは既に千八百七十七年でした、音樂の出來上つたのは一八七九年の四月であつたのです、其奏樂（ウンスツルメンテーション）の方が全く出來たのは一八八二年一月十三日でワグネルが前記パレルモーに居た時でした、此が初演は一八八二年七月二十八日バイロイトであつたので其以來二十年間此處以外では上演されたことはありませぬ、一九〇三年十二月廿四日に米國紐育市のメトロポリタン歌劇場で始めて演ぜられましたがこれは米國と獨逸との間に版權同盟がなかつたからでしたが此以外は本年始め迄一回もバイロイト以外では歌演されて居りませぬ、斯る譯でパルシファルは昨年迄バイロイトの獨占に屬して居たのでした、本年になつて斯る人氣に投じたのも無理はないと思ひます。

パルシファルは劇評家ニユーマンの言に依りますと苦惱鎭痛及び慰藉の大歌劇である、眞のワグネル物であると申して居ります、パルシファルは多くの點に於て最も高尚幽美な作でありまして曾

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

づて作爲せられました音樂等最も深き印象を與へるものです、慥かに最大の天才の作でして最も稀代の作であります、トリスタンとゼソングとがワグネル壯年時代の社會的及道德的思想の合體せる作曲であります如くパルシフアルは彼の晩年の罪と救とに關する思想の合體せる作曲であると云はれて居ります。

去りながら私共の立場より申しますれば極美盡したる音樂にあるのです、ワグネルのパルシフアルが今日益世界に觀迎さるゝのはワグネルの哲學思想の爲でありませぬ、シンカー思想家としての作ではありませぬ、美的音樂の爲めです、官能と想像とに訴へる所の微妙を極めた音樂です、最も沈痛を感せしむる所はアムフヲルタスの苦惱です、此苦惱は直接私共に語る音樂です、議論や理窟やでは到底此感情を現はすことは出來ませぬ、ベルグソンの直觀的音樂です。

パルシフアル其者の經驗は、此クンドリーとの經驗は心ある者をして感激致させずに居りませぬ、パルシフアルがクンドリーにキッスされて始めて自覺致します其情緒其思想は實に此歌劇の骨子であります、パルシフアルは始めて人となつたことを知覺して同時にアムフヲルタスの負債と其原因とを知つて玆に其同情の心は湧起するのです、「無意識の愚人」は最早愚ではありませぬ善惡を分別致しまする而かも其使命を意識する者となつて居ります、彼は罪の情慾より救はんことを主に求める、

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

終にクンドリーを蹴倒して去らんとする時、

『傷が我が心を燒く、噫！　愛の苦痛』と

叫びまするとて

『吾が愛のギフトは汝を神聖にします、若も此時汝を救主となしたならば、私をして永遠に苦惱せしめよ！　只汝の愛を賜へよ』と

クンドリーはパルシファアルに求むると

『汝は予と共に限りなく罰せられるでせう、若し一時でも予が使命を忘るならば』

とパルシファアルは彼女を拒絶する間にも倘ほ彼女を救はん望を含み、アムフヲルタスの所に行く道を敎へよとクンドリーに迫まるのです、彼女は寧ろ惡しき言を發し且つ助けを求むるとクリングソル來つてパルシファアルに向つて聖なる鉾を投げ附ける、鉾はパルシファアルを害せず彼は之を取つて十字架を切ると魔法師クリングソルも花園も消滅してパルシファアルとクンドリーと二人のみ荒原に殘さる所は如何にも神秘的淸き力とを與へます。

パルシファアルの音樂の力は恐ろしき負傷を與ふると同時に之を癒治する一種不思議なる所があります。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

パルシフアルの音樂はワグネルが老年の作で其精力は最早や人生の困難に向つて悲觀的反抗を爲すことは出來なかつたのです、今はワグネルに取つて苦惱は人生の愉快なる境遇に於て暗黑なる不條理なる者として來ませず、只止を得ない必要なる者として來るのです。故にワグネルが刺激されました此苦惱は決して天に向つて熱狂する反抗する叫びではありませぬ、トリスタンの三幕目の如き音樂ではありませぬ、深き苦き悲哀の中にも優美しき謙遜なる慰藉的な音樂です、深い深い同情のある美妙を極めたる音樂です、感情的平和をワグネルは其晩年に發見したのです、アムフヲルタスの苦惱に於て之が部墨の哲學的思想を思ひ就ひたのです、苦しみの音樂！　眞に我共の悲哀を和ぐる清むる音樂です、彼のアムフヲルタスの無限の苦惱の中にも私はトリスタンの發狂的悲みの如き實に激しい心のツンザク如き感動を與へられます、私どもは苦惱が我共個人的に取つては餘りに大きく餘りに神聖であるように感じます。

其平和と喜びとを歌ふ音樂は之に反しまして全るで比びなき音樂です、靜かなる美を具備して居る音樂です、其想像的部分は眞の而かも清き音樂です、イマヂネーションの少ない部分は幾分單調で世間並のやうな所もあります、彼のグルンヌンツのレサイタルスは其一例です、去れど音樂の部分は何とも云へない高尚な清邃なものです。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ワグネルは人生と人間の性格とを音樂の言葉で遺憾なく表現します無比無限の勢力を以つて居た作曲家でした、パルシファル、クンドリー及アムフヲルタスの如き人物はワグネルの音樂を以つて始めて彼等を眞に表現することが出來るのです。

パルシファルの哲學とでも申しますか 其思想は清き德と 無慾の美との力があります、其歌劇の音樂は非常なる優和と慰藉的なものでワグネル晩年に於ける 思想の變化の結果であるとのことです、私は特に此靜かな苦痛と悲哀と無限の希望、然うです、自分が使命と思ひ義務と感ずる事業に從ひ其道に向つて進む所に云ふことの出來ない趣味と同情とを持つ者です、パルシファルは無垢な、無智な靑年で世の事は何も知りませぬ、聖鳥のスヲンを射殺してもホーリーグレールを見ても何事をも知りませぬ感じません、眞にガイルレッス、フールです。

去りながら時期が來て成就致しますと同情ある正義の人となり如何なる誘惑にもかゝらない強い清い人となり、其使命と感ずる所に進むことを躊躇せぬ勇氣ある人となるのです、パルシファルは思想に於ては宗敎的です、去れど其音樂は總べて超越して只極美を盡してゝ中世記の 思想などは 何處かへ消へて仕舞います、只々高尙な優美な音樂です。

パルシファルの大を成す所以は美妙な高尙な廣大な同時に悲しい苦しい極致と清き靜かな平和な

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

音樂にあるのであります、此種のモテイーヴと多くのコーラスは其舞臺の變化の巧妙なのとに依つてワグネル傑作の音樂は必ずよく表現さるゝことであらうと思ひます、私はパルシフアルの如き高尚な歌劇が早く日本にも歌はるゝ日の來ることを渇望します、私共は此に向つて奮闘せねばなりませぬ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ワグネルのパルシファルの條書

原　信　子

人物

アムフヲルタス　（バリトーン）

チチエレル　（ベース）

グルネマンツ　（ベース）

パーシファル　（テノル）

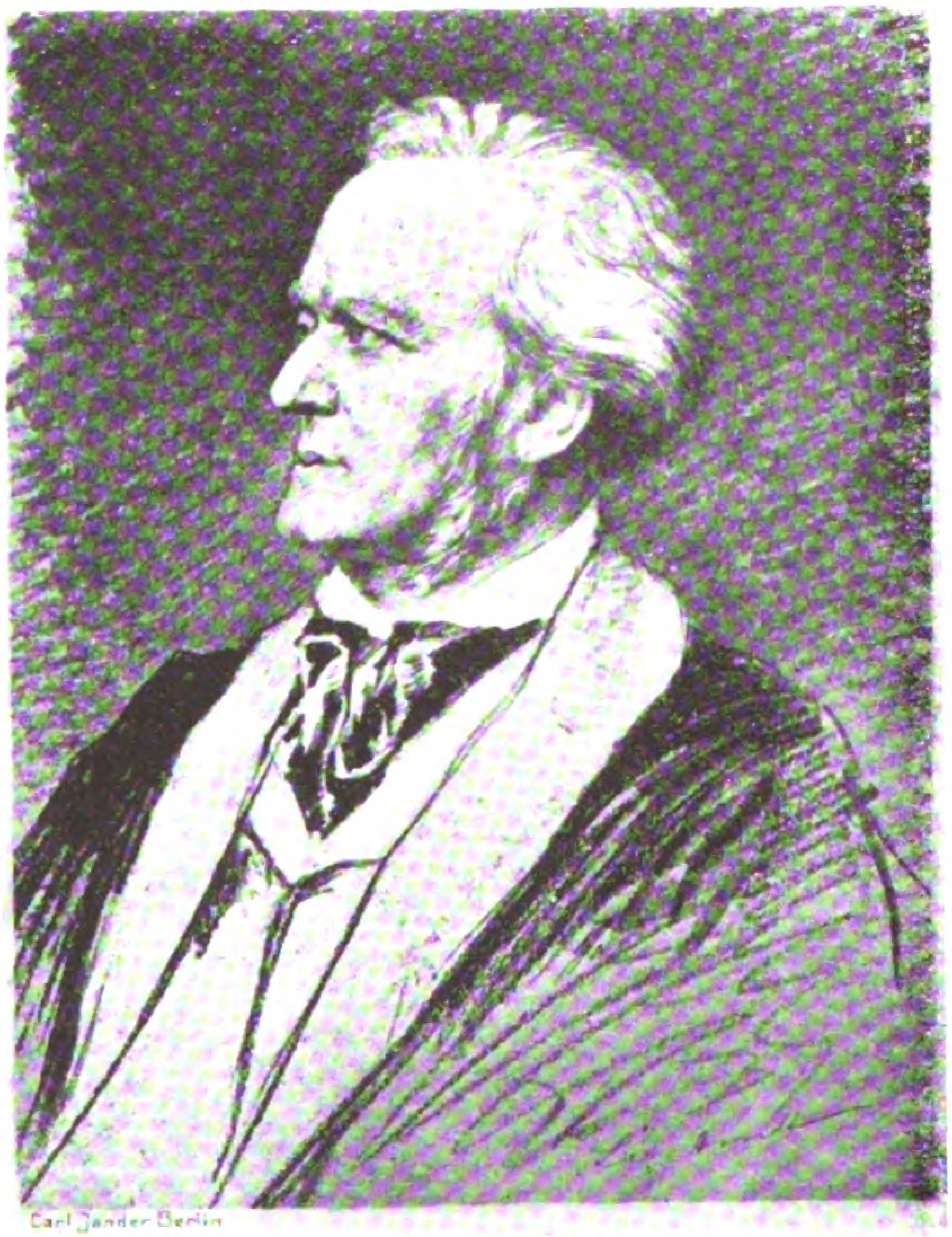
Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

WAGNER.

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY



Carl Jander Berlin

Richard Wagner

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

クンドリー　（メッゾーソプラノ）

場　所　モントサルヴットの國及城、及クリングゾルの魔殿、初演…一八八二、バイロイト

此歌劇はウルフラム、フヲン、エシエンバフの史詩パーシバル（一二〇四年）を基礎として作曲せるものホーリー、グレール（Holy Grail）の守護者の王家 Royal House のヘルツアライデ（Herzeleide）は其父ガムレッドが武勇の冒險的生活を送つて早死したので其徑路に從はさぬ爲に其息子パルシバルを靜かな森林中で育てたパルシバルは世の事を一切知らずして「罪なき馬鹿(ガイルレッス、フール)」で生長した。
一日彼は偶然に武士の一團を見る、彼の冒險心は挑發せられて其母に家を去る事を願ふ。

第一幕

モントサルヴット附近の森林の邊り、此城は登ることの出來ない險阻な山上にある、アムフヲルタスは其尊敬すべき父チチェレルの命に依つてグレールの守護人となる、女子を愛すると云ふことは嚴重に謹しまねばならない神聖の義務を持つて居るアムフエルタスはクンドリーの狡猾なる手管に乘りて彼女の捕虜となりエンチヤンター（魔法師）のクリングゾルに依つて自分の鋒にて傷はれる即ちアルフヲルタスの鋒はニンギナスが基督を十字架の上に其横腹を突き貫きたる時に用ゐたるものである之はジヨセフがグレールと共に保存したのであるグレー

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ルは聖晩餐(過越の祝)の時に用ゐたカップで同時に十字架の救主の血を受け入れたるヴェッセル(器)である、今やマムフヲルタスは致命傷を受けた、然れども彼は死に得ずして非常に苦しむ、又罪なき馬鹿が賢明なる同情を以て鋒を取り上げて其傷を觸るゝ迄は回復も爲し得ない、クンドリーはエンチンヤターのクリングソルの勢力の下にあるが彼女亦グレールの使である、彼は十字架上に在つた基督を惡口した處の女である、而して今や罪を求めんとして罪惡の間を徘徊して地上に罪せられて迷ふて居る、彼女はグルネマンツに治癒の水藥の一服を持つて來るマムフヲルタスは溶する爲めに海に連れ行かれたために不在である、グルネマンツは長きレヂタチーブで如何にグリングソルがホーリーグレールの武士となることをチチェレルに拒まれた故に魔園を作つて其處に美女を澤山に住まはして居る其目的はグレールの武士をタブラかすのであることを語る、パルシフアルはグレールの城の圪内に入る夫と共にスワン(天鵞)を傳つてグルネマンツの前に置く、彼は彼(バーシフアバル)の罪を無知の罪として許るす、而してグルネマンツはアムフヲルタスを癒す者は罪なき馬鹿であることを彼に於て認むる、クントリーはバルシバルが降下したことを彼に告げる、而して負傷せる王が城に歸つた時に一人の青年は彼の前に連れらるゝ、彼とバルシフアルが登城する而して武士等も亦城に登る

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

間に舞臺は漸次に變化して城が見へる彼等は舞臺に止まつて居る、彼等がさまよひ居る中に舞臺は城内の一室となる、グレールの武士等は入つて來る負傷せるアムフヲルタスは連れて來られ無理に其意志に反してグレールに奇跡を示すべく生存させられてある、パルシフアルは奇跡に驚く、然れどもアムフヲルタスを許す所の間を發することを忘れた、而して彼がグルネマンツに其見たことに就ひて何物をも理解せぬことを告白する、彼は城から荒々しく驅逐された。

第二幕

開放された小塔の下にある穴牢、其處にクリングソルの魔の器具が現れて居る、パルシフアルがクリングソルに近寄りクリングソルが其危險を認むる時に彼はクンドリーにパルシフアルを誘惑すべく試むる、其魔法人は武士を送つてパルシフアルの戰心を挑發する、彼は武士に打勝つて小塔に入る、クリングソルとチエレット小塔とは俄然消滅する、而して其代りに奇麗な花女を以つて充たした立派な園が出現する、彼等はパルシフアルを取り圍む彼は彼等に反抗するが彼の胸は觸れて彼の母が死んだことを知らせつゝある美人のクントリーは殆んど捕虜にされんとする時に罪なき馬鹿は自覺する、而して今彼は何故アムフヲルタスが苦んで居る

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

か又如何にして彼を救濟し得るかを知覺する、クンドリーが彼に彼女の主に對する罪を語る時に彼は恐怖して彼女を去る、クリングゾルが救はんとして來るが無益である、彼がアムフヲルタスから取つた聖なる鋒をパルシファルに投附けると鋒はパルシファルの頭の上に中空に掛つて居るパルシファルは鋒を取り十字架を切るとクリングルと其の魔力は消滅する、クンドリーは苦々しくパルシファルを惡咀する而して彼は無益にグレールを求むるならんと豫言して居る、然れどもパルシファルは今は既に何處に彼が居るかを知つて居て而して彼女は速かに救助されるであらうと答へる。

第三幕

盛春の林、花は燦爛として充つ、仙人の小舍と井、數年間流浪した後パルシファルは知識を得た、而して彼は再びグレールの城に向つて旅行する、グルネマンツは城下の林中に住んで居る而して丁度長き魔睡より醒めたクントリーを發見して下婢として彼女を使ふ、他の武士の如くグルネマンツは老いた、如何となればアームフヲルタスがパルシバルの去つた以來若か返りするグレールを現はさない故に、彼がパルシファルの手に在る聖なる鉾を見る時に彼は熱心に「ガイルレッスフール」を認むる、此はグートフライデー耶蘇の苦難を受けし祭日である、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

只勤めたる一言を呼んだリンドリーはパルシフアルの足を洗ふ、之は奇麗に且つ清くなつて城に入る爲めである、此間グルネマンツは彼の髮に油を注ぐパシフアルはクンドリーを基督信徒として洗禮を施すことに依つて彼女を許す、總べて三人は第一幕の如く城に登る(山水の風景變る)ホーリーグレールの武士は老いたるチチェレルを葬る爲めに集つて居る、而してアムフヲルタス亦將に自ら死せんとしてグレールを現さんと準備する、此行爲は再び彼の悲哀なる生命を延ばすことを記憶しつゝグレールを見れば若くなる彼は其傷を武士に示して彼を殺さんことを彼等に請ふ、然れどもパルシフアルが入つて聖なる鋒を取つて其先を以つて傷を觸れて王の傷を癒す、而して彼は自らグレールの王なりと宣言する彼はグレールを高く差上げる、悔いたるクンドリーは死して地に倒れる、而して一寸チチェレルは甦生る、パルシフアルが祝禱の爲めに手を上げる時にアムフヲルタス、グルネマンツ、及他の武士等はグレールの新王として賞揚する。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

さくらの花

尾竹ふくみ

さくらの花を見ると思ひ出される話がございます。
何でも私の十六の春だつたと覺えております。私どもは大阪の島の内にすまつて居りました。その時分家にはおしほといふ紀州生れの　をなごしをつかつておりました。たいそう素直な優しい氣立の女(をなご)でしたゆえ　誰にも目をかけられて居りました。
このおしほは　何かしら私にはたいそう　好ましくそれにその頃は　姉さんが　他(よそ)へ縁づいて間なしの

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ことでもありましたし　よけいになつかしく思はれおしほ、おしほ、と申して居りました。

十六にもなつてゐながら姉さんのゐない部屋に一人してねるのが何んとなう淋しくおそろしく夜などもおしほは私の側にねました。

おしほはすこし淋しげな顔立でした　思ひ深げな優しい目でぢつと私を見つめながらしづかにものを云つたのが思はれます。いつもは大低幅のせまい白いたけながを結んで銀杏返しにいつてをりました。そして紫のメリンスと紅の入つた細かい模様ものと合せた帯をしめて居りました。色が白くほんの心もち髪のあかいのもたいそうおしほにはよく見えました。

丁度その前の年の春から家に朝治さんと云ふ人がきてをりました。朝治さんは母方の嫂（あによめ）の弟にあたります。朝治さんは中高の眉の秀でたそれはよい男ぶりで藝事なども心得ておりました。中でも得意なのは明笛で月のよい夜などはほんとにほれ〴〵する程の節まわしにみんなをうつとりさせました。この人のもつてゐたもので今でもはつきり心にのこつてゐますのは赤地の綺麗な笛の袋と竹紙といふ笛へ張るうすい透き通つたヒラ〳〵したものと女のほしいと思ふほどの美しい色合せの絽ざしの紙入とでございます。

朝治さんは商法の見習ひとやらで本町の大きなお店へ通つておりました。いつも夕方には家へ歸

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

つて見えます。夏などは涼みがてら朝治さんが心齋橋の方から道頓堀へ出かけます。その時には私を誘つてそして私はおしほも誘つて三人で參りました。ぶら〳〵と賑やかな町を歩いて十合(そがう)や高島屋など大きな呉服屋の飾り窓のところへ來ますと　美くしい人形の衣裝にしなさだめをいたします。

朝治さんあんたは一等どの人形が好き。

右手のはし。

おしほあんたは。

やつぱり右のがよろしいなあ。

おゝ　うれし　あてもあの人形の風が一等ええと思ひましたのや。

それから橋を渡つて道頓堀へ出てアイスクリームをたべたり繪はがきを買つたりして家へかへります。家へ歸つてまゐりますと離れに明りをともして涼みます　おしほは皆よりうしろへ座つて團扇で風を送ります。買つてきた繪はがきは大概藝者や舞子や役者のばかしですゆえその中からみんなの好きなのをえり出します。その時も朝治さんと私とおしほとはおなじものになりました。朝治さんは私には兄さんのやうに叔父さんのやうに思へる人ですし　おしほは私の大好きなをなごですゆえほんさにいつも〳〵うれしく仲よくいたしておりました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

大阪の方では節分の夜はたいそう賑はひます。年を納めにお參りに行くお宮には篝火がたかれお神樂の鈴が鳴りひゞきお宮の境内やその圍りの町筋には美くしい羽根の花簪や紅白の福飴を賣る小店が並びつゞきます。女は髪をいろ〳〵に結ひかへてお婆さんが島田に結つて前髪のくゝりに鹿の子しぼりをかけたり若い娘さんは普段はとても町を歩けぬ程美々しいお人形のやうな粧ひをしたりして神樣へお參りに行きます。南場(みなみ)や新町の藝妓や舞子はお染久松や大夫や元祿若衆や思ひ〳〵に姿をかへて色町を練つて歩きます。お宮へ參りに行く時女の髪には紫だのみどりだの紅だのに染め分けたのや役者の紋をおいたのや金銀の松かさを優しく添えた羽根の簪が挿されてあります。性のわるい男共はお宮へ參る娘たちの簪をぬきとつて數の多いのを手柄にいたします。

その節分の晩に皆がお夕飯をそろつてたべておりました。ところへおつねさんがきました。この人は家の仕立物を引きうけてゐる人で　氣の輕い　おかしげな事ばかし云つては人を笑はす人で御座います。

どなたはんも今晩は。あんまり賑かな聲が 宅まできこへましたよつて 一つ仲間に入れてもらひませふと出かけてきました。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

まあ〳〵左様かそんならあんたも一緒にお上り。何んにもおまへんけれども皆して賑やかに喰べるとおいしいもんだつせ。
そんならよばれますわ、御寮さんこないな遠慮なしにはめつたな事をお云ひなはんな。
こんなことを云ひながらやがておつねさんも一緒にお仲間に入りました、お給仕はおしほがしております。おしほもその晩は年越と云ふので高髷に結つておりました。
おつねさんは直に目をつけました。
おしほどんの髷はよう出來ましたなあ。まあ　まるで倍もをなごが上りました。なあ御寮さんこれでは迷ふ人がおますな。
私もしみ〴〵とおしほをながめて見ました。おしほは面はゆげに目をふせて居りましたがそつと私と目を合せてにつこりいたしました。朝治さんもぢつとおしほを見ました。
一寸朝治さんあんたも迷ひなはつたのか　丁度似合や　お嫁におもらひやす仲人はあてがいたしますつせ。
それでは何分よろしう。
朝治さんは笑ひながら申します。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ほんまにかいな朝治さん　おしほあんたはどうや。
母も笑ひながらおしほに云ひます。
まあ　御寮さん。
おしほはさつと顔を赤らめました。そして重たげな髷を見せて俯向ひております。
どうですおしほどん異存はおまへんか。
おつねさんの出したお茶碗にはもうお茶をと云ふのでしたのにおしほは間違へて御飯をよそひました。
まあ〳〵　おしほどんはあんまりうれしうてか氣がよそへ行つてしまうて何も耳に入らんと見えますなあ。
おつねさんの云ひ方がおかしいのでみんなが笑ひました。おしほはまつかになつてしまひました。
その中御飯がすんで朝治さんやおつねさんや私は　お宮へ参りました。私はおしほも一緒に連れて行きたくおしほを呼びました。
おしほ　一緒に行かうやないか。
いゝえ今晩は折角云ふて頂いてうれしう思ひますけど　一寸急がしうてやうまゐられまへん。小孃（こいさ）

さんは皆さんとで行つてお越し。

門口まで迯つて來てさう申します。おしほは朝治さんや おつねさんに聞へぬやうにちひさい聲で申します。

何でまた今日にかぎつて急がしいのやろう　あんたが來んと何やつまらんやうな。

おしほは默つて私の目を見つめております。おしほの花瓣のやうな頰がうす赤く染つております。私にはおしほが何日もより美しく思はれました。それから お宮へ行つて 家(うち)の人へ福飴と羽根のかんざしを買ひました、朝治さんも簪を買ひました。

おつねさんには途中で別れて朝治さんと私と二人して歸つて參りました。

おしほがゐんと淋しいわ。

ほんまになあ。

おしほのゐないのがたいそう物足りなく私も朝治さんもぢきに家へ歸つてまゐりました。

家へ歸つてきてみんなへ分けますとき朝治さんは一等奇麗なのをおしほにやりました。

それには別に深いわけもなかつたやうですけれどもおしほにはたいそう嬉しく思はれたらしう御座います。おしほは前から 朝治さんを思つて おりました。(これは みんなあとで思ひ合せたことなの

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ですけれど)

その中に四月になつて朝治さんは自家へ歸ることになりました。朝治さんが歸ると　きまつてからおしほは何んとなう淋しげになりました。私はその頃學校が試驗やすみで　おしほと　お針をしてゐました　私の部屋は離れへ通ふ廊下の角の六疊で左手に丸い窓があつて床の間があつてその時分のことですゆえ櫻をさしてありました。

おしほはお針が上手なものですから　わたしはいつもおしへてもらつてゐました。その時もおしほは側にゐていろ〳〵と手傳つて居りました。

小孃さん。とおしほがよびます　私が顏を上げますとおしほが情深い目をして私をぢつと見ておりました。

小孃さんはほんまに果報なお方やな　お若うてお奇麗でそいでお母さんやお父さんにおいとしがられて。

まあ　何のことや　おしほかて若うてきれいでみなに好かれてゐてやないか。

阿呆らしい何の好いてくれはるお方がおますかいな。

妙なおしほ　あてがこないに好いてゐるのに。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

それはな小孃さんだけはのけて　その外のお方はこないおしほみたいな者は　なんぼこつちで思ふても先のお方がいやいやとお云ひなさる。

だれがまあそない思ふもんか　お父さんかてお母さんかておつねさんかて朝治さんかて　みんなおしほどんはええ人やとほめてゐてやわ。

それからしばらく話がとぎれました。私は八ッ口の四ごめをして貰ふつもりでおしほに針を渡しました。おしほは糸をぬきながら。

朝治さんも　もう近い中にお歸りになるのやさうですなあ　小孃さん。

さうやさうな　何んでもお母さんが云ふてはつた朝治さんは養子にのぞまれてとう〳〵此頃縁談(はなし)がきまつて今度朝治さんが去にはるのはその事でやさうな　それに何んでも先のお家はえらいええしでそのお家の娘さんがお嫁にきまつたのやその女はんはな　それは奇麗なお方でおしほあんた菊代はんを知つてやろ　あのお方よりもつとずつときれいでそれは〳〵物事のよう出來るええ女(をなご)はんやさうな。

菊代さんといふのはすぐ筋向の小山といふ紙屋の美くしい花嫁さんで御座います。

まあ〳〵　おしほは一寸も存じませなんだ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

なあおしほ　朝治さんはさぞうれしいことやろ　そない思ふやうな人と女夫になれて。

おしほは默つてうなづいて見せました。私は奇麗な人同士のことをいろ〳〵思つて見ました。おしほもきつと　まるでお雛さんのやうなとでも云ふことかと思ひましたけれど何も申しません　俯向ひて糸をとめて居りました。

その中に茶の間でおしほを呼ぶのがきこえます。おしほは返事をしましたけれど何故か　隨分ちいさくつてとても茶の間へは聞えません　おしほは針を私に渡し乍ら立ち上りました。その時私はおしほの長い睫が濡れてゐるのを見ました。

朝治さんの立つて行つたのは夕方で小雨が音もなう降つておりましたゆゑ見送る人も別れて行く人もしんみりと　もの淋しい心持になりました。私とおしほとは一つの傘をさして並んで立つて居りました。

さよなら　朝治さん家へお歸りになつたらどうぞくれ〴〵もよろしうに申しておくれやす、

ええ　おばさんもその中に是非一度お越し　その時は千代ちやんも一緒になあ。

おほきに　朝治さんあんたもどうぞまたお出やす。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

何やこないに急に去ぬとなると氣が殘るやうな　おしほどん　あんたにはほんとにえらいお世話になりましたなあ　なじみが深いと別れるのが何となう惜しいやうに思へます。

やがて荷の方の俥も梶棒を上げました。

お機嫌やう　さよなら。

さよなら。

店屋の軒の燈のかゞやきそめた夕暮れの街をだん〳〵に遠くなる朝治さんの俥をおしほはぢつと見送つておりました。私は何んとなうおしほをいとしく思ひました。

その晩茶の間では皆が朝治さんのことを話し合ひました。朝治さんは家中の人に好かれて居りましたゆえ名殘おしう思はれたので御座ります。

やがて夜が更けて私はお湯に入つて眠りました。うと〳〵して目を明けますと　おしほが床の上にしよんぼり座つておりました。

私はやはりうつ〳〵夢のやうな心地で居りますとおしほの泣くのがかすかに聞えました。私は

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

はつと思ひました。

おしほ　おしほ　まあどうしたのや。

いゝえ何んでもおません。

さうかて。

小嬢さんは早うおやすみ　と申しておしほは泣いております。私はもうおしほが可哀想に思はれてなりません。私にはおしほの心もちが染まりました。何とか云つておしほをなぐさめ度いと思ひましたけれど　一寸もそのやうな言葉が胸にわきません。たゞもう可哀想で胸が一ぱいになりました。

夜になりますと離れへ通ひますゆえ廊下には明りが灯ります。私の部屋にはそのうす明りがほのぐとさします。その明りで床の間の櫻の花がハラくと散るのが見えます　私はぢつとさくらを見て居りました。

おしほは私が夢におちてゆくまで泣いておりました。

その春の末からおしほは身體が弱くなりました。土用に入つた頃は目立つて痛々しげに肩の邊り

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

がやつれ折々は力のない咳をしたりするやうになりました。
　家の人達は何も知りませぬゆえ　たゞおしほの身體の事ばかし案じ出しました。母はそつと私を呼んで

お千代　おしほはどうやら肺病らしい　今の中に用心せんと取り返しがつかんやうになるよつて一まづ國へ去なすつもりや　あんたもやう氣を附けておしほおしほと側へばかり行くのやありません　よろしいか　それから今晩からおしほはおまさや皆と一緒の部屋へおきます　後でお母さんがおしほへ　そないに云ひつけるよつてその折は　けしてあんたが口を出すのとちがひますつせ。

私はまあどうしやうと思ひました。

お母さん　それはあんまりや　何も肺病ときまつて了ふた　わけやないのに。

まあお千代　あんたにも嫌になる。もうあの様子ではさうにきまつてゐるやないか　こないだから氣を附けて見ると咳をしたりほんの一寸の用をしても息苦しさうにして　もうあれでは疑ひがない　昨日はお父さんにもさう云ふて置いた。

お父さんは一體どないにお云ひになりました。

えらいお母さんがおこられました　何でももつと早うから氣を附けんのや云ふてなそれにあんたが

おしほおしほと側にばかり置いとくもんやよつて　それは〳〵きつう案じて　もしもお千代にうつつてはどうするつもりや　もうどないしても早速に親元へ歸すとお云ひになつたのや。
私は涙で涙で目がくもつて母の顏さへ仰げません。
それでもあんまりや　おしほは最初からあないに細そりして弱さうに見えてゐました　何も去なさんかてよろしいに。
分らん人　そんならあんたの身體が惡うなつて親に心配をかけてもええのか　この事をお父さんのお耳に入れたらまあ　どないにおこりなさることやろ。
さうかて　さうかて。
おしほの事で何のあんたが泣く程悲しいのや。
さうかて　おしほほどええ女はないのにいつもいつも優しうして呉れて。
それはな　おしほには何の申分もないけれど大事なあんたにまでさわりになるやないか　それに當人の爲を思ふても今の中に去なして養生さした方がどの位よいか知れんのだつせ。
私はいつまでも〳〵泣いておりました。
おしほと別れる日は直に參りました。私はその日おしほの胸にすがつて泣いた事が忘れられませ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ぬ。もうそれぎりおしほには逢へなくなりました。おしほは一年おいて翌る年の秋に亡くなりました。

この様に別れが惜しまれたのは悲しいことになるしらせで御座いました　ものには何んでもしらせがあると申します。

朝治さんとおしほのはなしは　ほんのはかない片思ひにすぎませぬ、朝治さんが立つて行つた夜のおしほの心の中はまあどのやうに悲しい事でありましたらう。いくら戀しう思ふても先へはとどかず人にも云はれずひとりして胸に秘めて人知れず泣いてばかしゐたおしほのやさしい悲しい心もちはほんの二年程の間おなじ起臥をしたばかりの生れ合せの人とは思へぬ程しみ〴〵となつかしう身にしみております。

櫻を見るたびにおしほが思はれます。
まして夕やみにほの白く　もろげに花の散る時はおしほのやさしさが思はれ涙がさしぐみます。

をはり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外通信

O・P・Q

家政の敎育。職業としての**家政**（**ハウスヰルトシヤフト**）を敎育することに就いての運動が**ドイツ**に起つてゐる。家政に二種ある。一は他人の家庭に入つて行ふもの、二は大じかけの場所（**グロオスベトリイブ**）に於いて行ふものである。次の方は寄宿舎を有する諸建設物の類である。十六歳以上で、豫備敎育を有するものを採用して敎育を授けるのである。

フインランド婦人會。會長男爵夫人 Alexandra Griepenberg が死んだ。女子選擧權主張會の長をも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

兼ねてゐた。

女子の大學教授　チユウリヒで位學を得た Marianne Plehn がミユンヘン大學の教授になつた。動物學者である。

女子の新學士。エルランゲン大學で Margarethe Berent が法學士になつた。卒業論文は「夫妻間に於ける増加財産の共有權」であつた。

女子銀行。女のために女の建ててゐる銀行がベルリンのモッツ・ストラアセにある。初獨立女子組合銀行と稱してゐたが、今は單に「女子銀行」「フラウエンバンク」と改稱してゐる。資本百萬マルクで現に五プロセントの配當をしてゐる。監査役主座は法學士 Raschke（女子）である。職員の數は六十許である。

マクシイム・ゴルキイ。友人を訪ふと稱して、イタリアからロシアへ歸つた。

Sarah Bernhardt, レジヨン・ドンニヨオルの十字章を貰つた。(前號參照)。これまでは戰爭の時功のあつた女の外には遣らなかつたものである。

ベルクソン。講堂に五百人の傍聽者（婦人が多い）が入り込んでゐて、大學生が入ることが出來ぬために、格闘が起つた。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女の學校醫。女醫 Dr. Lukas が**スツツトガルト**の學校醫になつた。

女の區醫。**ノルエイ**では從來隨分行通困難の所に女醫の開業してゐるのがあつた。併し女醫を行政區醫に任じたことはこれまでなかつた。そのこれ有るは**アルテン**區で Dr. Trude Johnson を任用したのに始まる。

女の宮廷歯科醫。**ドイツ**の**リツペ**侯爵家では歯科醫 Gertrud Gebhard-Krenz を宮廷歯科醫に任じた。

內職。**フランクフルト・アム・マイン**では市の注文した事を請負師が內職の女に取り次ぐに、餘り賃銀を安くするので、市は請負師に內職賃銀の最下限を守らせることに定めた。

女子の職業。**ベルリン**の「女子選擧權主張會」で Dr. Gertrud Baeumer が演說した『現今**ドイツ**の少女で無職業のものは十分の一しかない。十分の九は已に職業を有してゐるか、又は職業に就く準備をしてゐる。女子の職業は「人の經濟」と云ふ名稱の下に總括することが出來る。保險、勢動者保護、傳染病豫防、青年保護、人口問題等がそれである。』

女子藝術會。一九一三年五月に**ベルリン**に成立した此會は現に會員五百五十八人を有してゐる。**ベルリン**外、**マンハイム**、**チユツセルドルフ**、**ハンブルヒ**、**マインツ**、**ミユンヘン**、**キヨオニヒスベル**等か

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

らも入會したものがある。會長は Kaete Kollwitz である。

Agnes Harnack ベルリン大學敎授の娘で、Dr. Phil, になつてゐる。近頃 Robinson Crusoe の世界觀と題して、哲學的講演をした。

神學。チユウリヒ大學は女子にも受けられる神學卒業試驗の制度を立てた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

いい小説家といい息子と

Oscarr Wilde の述作及び言葉から、面白さうなものを鈔錄して見たうちの一部分である。

佐藤春夫

いゝ小説家は、いゝ息子よりはずつと珍らしい。

眞理をパラドクスにするのは難かしいことではない。併し George Meredith は彼のパラドクスをすつかり眞理にした。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

人殺しはいつに限らず心得違ひだ。人は、食事の後にお話の出來ないやうなことは何事でも、決してしてはならない。

公衆が不健全と呼ぶ小説は、何時でも藝術上の美しい健全な勞作である。

英國には讀書社會なんてありはしない、新聞と小祈禱と百科辭典と以外の一切のものに對しては。

誇張なきところに何の愛ぞ、愛なきところに何の理解ぞ。

若い作者の手に成つた詩の書物は、通例支拂はれつこのない約束手形だ。

五月祭に公爵夫人殘らずから名刺を頂戴するより、Balzac の社會へ加入する方がもつと嬉しい。

安全なのは奪ふより貰ふことさ。然れども目ざましきは貰ふより奪ふにある。

田舍では、人々は早く起きる、することが澤山にあるからだ。然うして早く床に就く、考へることが僅しかないからだ。

婦人は心も眩ましむるばかり藝術的だ、然し彼等には藝術の感覺は全く無い。

小兒を善良ならしむる最上の策は彼等を幸福にするにある。

よく人の口の端にのぼる人は、何時でもアトラクティヴな人である。

彼等の大人物に就て何にもおしへない事が、英國の敎育の必要な要件の一つである。

獨創は、美に似て、薄命なる天賦なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

人の形(スタイル)の完全のうしろには、人の靈の熱情があるべき筈だ。

美に對する熱中が希臘主義(ヘレニズム)に關する秘傳である。創造に對する切望が生命に關する秘傳である。

何人もその友の痛苦には能く同情す、然れども友の成功を同情せんには甚だ美しき天性を要す。

自分自身に就ての全部を知るためには、人は他人に就ての全部を知らねばならぬ。

語るに足るやうな婦人は London に五人だけゐる。そのうち二人は禮儀正しい社會へは立入ることを許されてゐない。

監獄生活に於ける悲劇の一つは、人の子の心をして石に化せしむることである。

監獄に於ける道義を導く感化は、たゞ一々四人の答へる感化あるのみ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

先づ最初の然も多分最も困難な事業は、監獄の統治者を徳義化し、看守を文明化し、教誨師をキリスト教化することにある　（監獄制度の改革を論じた公開狀の結論）

友情は忘るゝことなし、之それに關する不可思議なり。

快樂は自然の標準である、是認の記號である。我々の幸福な時には、我々は何時でも善である。但し我々が善だからと云つて必ずしも幸福とは限らない。

老年者は萬事を信じ、中年者は萬事を疑ひ、青年者は萬事を知る。

New York　の稅關にて「私は、私の天才の外には、別にこれと言ふやうなものは何も持參してはゐません」

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

New York では食事は出來る、住むことは出來ない。

それは金持ちと貧乏との兄弟ではなかつたか。うむ、金持ちの方の名は Cain と云つたつけ（創世記第四章參照）

議事錄と云へば大底退屈な讀みものである、併し、Ireland に關する議事錄は、常に面白いものである。それらは近代歐洲に於ける大悲壯劇の一つの記錄を成す。それからのなかへ英國は己自身に對して告訴狀を書き下し、且つは又その恥辱の歴史を世界に與へてゐる。

Erance 革命を通じての最も悲壯劇的な事實は、Marie Antointe が女王であるがために殺されたことではない。封建制度の怖ろしい目的のために自ら進んで死に赴いた、Vendée の饑餓に迫つた農民である。

「私は自分の一切の天分（ジニアス）を生活に注ぐ、述作へはたゞ才能（タレンス）だけを注ぐ。」

「否、幸ではない、確に幸福ではない。快樂だ。人は何時でも最も悲壯劇的なものゝ上にその心を置かねばならぬ。」

然れども各人(おのおのひと)はその愛するを殺す。
各人(おのおのひと)をしてこのことを聞かしめよ。
或ものは苦(にが)き狀(さま)をもてこれを爲(な)し。
或ものは甘き言葉をもてす。
惰弱なるものは接吻(くちづけ)をもてこれを爲し。
勇敢なるものは劍(つるぎ)をもてす。」
或ものは年若くしてその愛するものを殺し或ものは老ひての後になす。
或ものは淫慾の手をもて溢(くび)り。
或ものは黄金の手をもてす。
情(なさけ)いと深きものは刄を用ふ、即ち。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

死するもの立ちどころに冷たくなるを得べければなり。
或ものゝ愛は少きに過ぎ、或ものは長きに過ぐ。

或ものは賣れば、また他のものは買ふ。
或ものはあまたの涙もて事をなし。
或ものはなすに一つの長息(なげき)なし。

一つより多くの命を生きしものは。
一つより多くの死を死すべきなり。

君は日本のものが好きだつたね。ところで君は果してこんなことを想像するかね、日本の人間は、藝術上で我々にまみえるやうに、事實あんな風に存在してゐるものだと。若し然う思ふなら、君はまるで日本藝術を理解してはゐないのだ。日本の人間は、各自の藝術家の苦心を經た自覺的創造なんだ若し君にして、實物の日本の紳士や淑女のそばへ、Hokusai なり Hokkei なり或はその他誰でもその

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

國民的の大畫家の筆になる繪畫を眺いて見やうものなら、その兩者の間につゆ似かよふた所のないことが解るに相違ない。日本に住む實際の人間は、英國の人間のありふれたのと違つてゐはしないのだ。即ち彼等はごく平凡で、何等珍らしい奇拔らしい奇拔なものをその周圍に持つてゐるわけではない。實際日本の全部は全くの虛構なんだ。そんな國があるのでもなければ、そんな人間が居るのでもない。この間われ〳〵の最もチャアミングな畫家の一人が、日本を見たいといふ莫迦な希望を抱いて、「菊の國」へ行つた。彼の見たものと云へば精々、彼の畫にする機會のあつたものと云へば精々、二三の提灯といくつかの扇だつた。Messrs に於ける非だ愉快な展覽會のやうに、彼は全く住民を見ることが出來なかつたのだ。Dowdeswell 氏の畫堂を見れば一目燎然だ。彼は、日本の人間は、僕の言つたごとく、單にスタイルの樣式で、藝術の微妙な幻だとはお氣が附かなんだのだ。だから、君にして若し、日本のエフェクトが見たくて堪らぬなら、漫遊者などになつて Tokio あたりへは行き給ふな。そのかわり、家に居て、ある日本藝術家の作品に沒頭して、それから、彼等の樣式の精神に沈湎して、幻影に就て彼等の空想的方法を悟り得たらば、そこで君は午からでも出かけて行つて、公園へ腰を据へでも Piccadilly をぶらつきでもすることだね。それで、絕對の日本的エフェクトを見ることが出來ないなら、君は何所へ行つたつて見られやしないよ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

平凡極まることでも、人にかくしてさへ居れば愉快なことだ。

齒醫者でもないのに齒醫者のやうなことを言ふものじやない。間違つた印象を與へる。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

影のかげ

八木さわ子

そはいつなりしか
まことそは
いつの日の夕なりしか
あか〳〵と夕日はもえて
大理石(なめいし)の廊の柱に
かの君の像をうつしぬ
うれしくもうれしくも

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

そと我の接吻（くちづけ）せむに
あか〳〵と夕日はもえて
あまりにも明かゝりし哉。

今日の日も
けふの日も、ひもすがら
わが窓に小鳥は來啼く
あはれそは何の小鳥
その小鳥なにをほりすと
ひねもすなける。

君をこふわがこゝろ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

あるは物に泣きつゝ
或る時は物に怖ぢつゝ
笑ひつゝ、なげきつゝ
君をこふわが心。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

『ピエールとジャン』を讀みて

八木麗

私は「女の一生」と倶に、モオパッサンの代表的作品と謂はれてゐる「ピエールとジャン」を讀みました。而して母と子とが別々に感じなければならなかつた、その強い深い苦悶に就て考へさせられました。

ピエールの苦悶は、彼が自ら極力否認しやうと試みてゐるにも拘はらず、その彼の嫉妬の情――弟

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ジャンに對する――から湧いて出たものだと思はれます。

嫉妬といふものは、何時でも、自分が他より劣つたものであることを表示するものではありますまいか。即ち自分が自分を弱者の地位に置くことによつて、自らそれを識認することによつて、はじめて生ずるものではありますまいか。自分が自分を信賴して、何處までも疑はない以上、たとへ如何なる場合に處し、如何なる境地に自己を見出さうとも、決して他人を羨み、他人を嫉視するやうな、卑劣なことはあり得ないと思はれます。何故ならば自分を信ずるもの丶心は、何物をも包容し得る程博大な心であるからであります。

ピエールは彼自らを、全ての點に於て弟ジャンよりも劣つたものと暗に自認するに及んで、何時かしらず嫉妬の情に囚はれてしまつてゐたのです。

彼はローランの長子でした。ジャンの兄でした。けれども運命の神は、彼よりも寧ろ彼の弟ジャンを撰んだやうに見えました。彼の生れた時から、或ひは弟の生れた時から、全ての事情はジャンに味方して來ました。

ピエールとジャンとは兄弟でありながら、性格に於ても容貌に於ても、全て全く相反したものを有つてゐたのです。まだ無心の幼年時代から、少年時代から、弟に對する忌々しさの抑へても抑へ切れ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

ない一種の不安の念は、絶えずピエールの頭腦の中に巣くつてゐたのでした。

生れるとからジャンは父母の此上もない寵兒でした、家中の賞められ者でした。而して今、兄よりは五才年下の彼は、何や彼やと幾度も目的を變へては未來の生活に對する其方針を改める兄と、殆ど同時に獨立自活の新生涯に入るべき準備を終へたのです。

其上にも彼の秀麗な容貌と緻密な温雅な性質とは、富める美しい婦人を我ものとなすことに於ても、又彼を兄より優れたものとして證したのでした。

人と人とが接觸する時――何等かの意味に於て相互の利害關係がさうさせる時、多くの場合に於て殆ど必然的に生ずる或る漠然とした競走心が、不知不識の間にだん／＼と色濃くなつて、何時かそれが怖ろしい猜疑心――卑しい嫉妬心とまで育つてゐたのを、彼自らも明らかにさうとは自覺してゐなかつたのでせう。

たゞでさへ弟に對して抱いてゐた彼の不快不滿の情は、突如として彼の一家の上に――と言ふよりは、彼の弟ジャンの上に起つた或る一事件のために、竟に爆發しなければならなかつたのです。

「彼の父母の舊い友人が死んだ、そしてジャンは、彼の遺言によつて其人の遺産相續人となつた」。

全ての點に於て後よりも幸運らしく見えたジャンは、今や思ひ設けぬ幸運に見舞はれて、一朝にし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

て莫大な資産を所有する身となつたのです、既に三十才になつたピエールは、なほ僅かのお小遣ひさへ母の手から與へてもらはなければならないのに、弟は默つてゐても年に二萬法の收入ある身となつたのではありませんか。

彼は自ら、彼も又その弟の幸運を喜びをもつて迎へたものと思ひました。けれどもそれは、彼自らも知らずして裝つてゐた虚僞ではなかつたでせうか。

辯護士がその報告をもたらして來て、靜かな家庭の上に大きな動搖を與へて去つた夜、ピエールは家にぢつとしてはゐられないで、恰も何物にか追はれるやうに家を飛び出さずにはゐられなかつたではありませんか。

明らかに彼は、その心の平調を失してをりました。

「不愉快な報知を聽いた時のやうに、胸が壓しつけられるやうで、何となく落ちつかない。別にこれといふ明瞭な意識に苦しめられてゐるでもないから、今何故そのやうに精神が沈んで、手足の倦怠を感ずるのかと聞かれても、說明するのは困難であるだらう。彼は何處をとも知らぬが、心の中の何處かを傷けられてゐた。それは針のやうな痛みで、何處と指を當てることも出來ぬやうな傷であるが、然しそれは人を不快にし、疲らせ、いらいらさせる、悲哀の種とも言つたやうな、一種の輕い匿された

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

苦痛であつた」。

彼はいら〳〵した遣瀬ない氣持ちを抱いて、何物かに追はれるやうに何物かを求めるやうに、街から街へと彷徨ふて行つたのです。彼は一人が寂しかつたのです。がそれかといつて人に遇ふことも厭はしかつたのです。

「今夜自分は如何したのだらう」彼は自分の心を悵うまで懊惱させるものゝ形ちを、その記憶の中に捜したのです。

とう〳〵、辛と、彼は彼の求めるものを探り當てたのです。

「あれは本統にジャンの財産になるのだらうか」彼の心にしつかりと食ひ入つてゐた苦痛の本體は、彼自らの身の上には直接何の交渉もない、この問題に外なりませんでした。

「だけれども何故だらう？　何故ジャン一人がその幸運にあづかる運命を有つてゐるのだらう？」

彼の心の奥底深く、斯うした呟きが微かにしかも執拗に、呟きつゞけてゐるではありませんか。

今彼の理性は感情のために支配されてゐます。あの辯護士の報告を聽いた其瞬間から、彼の心臓は速かに動悸を打ち出しました。

「人間は必らずしも常に自分の支配者たるを得ない。如何に人間が藻搔いても徒爾に屬するやうな、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

突發的な、執拗な感情の存するものである」。

彼は種々と、彼自らの心理狀態を考察し解剖しました。その結果として、彼はよく自己を識ることが出來ました。

「私はジャンを嫉んだのだ」

彼はそれが如何に卑しく陋しい事であるかをよく知つてゐました。けれども猶彼の心は、彼の心のその焦燥が、近く弟の手中に入るべく定められたあの遺產の一件に原因してゐるのではないことを、彼自らに辯疏してゐるのです。彼は彼が弟の幸運を羨んでゐるものでないことを、自分に對して極力主張してゐます。けれども彼自らが明白にそれと意識してゐない間に、彼の感情は理性に裏切つてをりました。

一度び彼の念頭に浮んだ一點の疑念は、何時か擴がり擴がつて、彼の全心全靈を征服せずには措かなかつたのです。疑惑は疑惑を生みました。臆測は臆測を加へました。懷疑に燃えた彼の眼は異常な銳どさをもつて、夫から夫と、隱れたる事實を抉り出すことに成巧するまで働き續けました、種々の事情を綜合して、彼は竟に最後の斷定を下さねばならぬ羽目となりました。結論は斯うでした。

「彼の弟ジャンは、彼の父ローランの子ではない」。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

それではジャンは誰の子なのであつたでせうか。彼は彼とひとしく彼の母ローラン夫人の愛子ではありませんか。

ピエールの痛慘な苦悶は、こゝに湧いて迸しり出たのです。

彼ピエールの愛情と尊崇と信頼と、それらに價ひするものは、此の廣い宇宙間に唯彼の母ローラン夫人があるのみでした。それ程までに彼は彼女を愛し尊び信じて居りました。

然るに如何でせう。その母は、過去二十有余年間虚僞の生活をもつて、彼女自らをも、その良人をも、又その愛子等をも欺いて來た、その忌はしい罪人ではありませんか。

彼の美しい夢はすつかり破れて了ひました。冷たい現實に面した彼は、如何に醜惡な人生を咀つたことでありませう。

彼が母を想ふこゝろの深ければ深くあつただけ、彼の母を惡む情は強く深くあらねばなりませんでした。

彼は悲しみました、慨きました、憤りました。そしてなほ、母を罪あるものと思ふ自分のあさましさを責め、母を疑ふ自分の心の怖ろしさに泣き悶えずにはゐられませんでした。

けれども如何に反省してみても、彼は彼の想像が眞實であると識認しない譯にはいきませんでし

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

た。

人の心には或る一種の殘忍な本能力が潛んでゐて、時あれば表はれ出るものと思はれます。母に對する憐憫の情に慄えつゝも、なほ彼は自分の殘酷な素振りや言葉が如何に弱い母の心を傷けるかを見ては、ひそかに悲しい滿足を味はずにはゐられませんでした。

人が何かに就て疑念を有つに至つた時、ます〳〵その疑念を煽らせそれに裏書きするところの幾多の要件は、後から〳〵と尤もらしい裝ひをして現はれ出て來るものです。

而して彼が彼自らの疑惑を、自分一人の秘密として保たねばならない時、それはどんなに大きな重荷となつて彼の心身を壓迫したことでせう。ピエールは後に自分の疑念を弟ジャンに打ち明けましたけれど、なほそれは疑惑として彼の心中にわだかまつてゐるのみで、彼は竟にその眞否を明確に知ることは出來ませんでした。恐らくそれは永久に悲しい謎として、彼の心に根強く枯れずに殘つてゐることでせう。

若しも彼が全く虛心平氣に弟の幸運を見ることが出來ましたならば、彼は斯樣な苦痛を味はふことはなかつたのでせう。何事に對しても人は或る程度まで無關心でゐられることが、その心の平和を保ち、その生活を幸福ならしむる所以であるのかも知れません。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ピエールとジャンとの二人の母ローラーン夫人は、人生に於るその第一歩を謬つて踏み出した人です。而してその謬つたまゝの歩みを、それと知りつゝも改めることなしに二十余年の永い年月をそのまゝ歩み續けて來た人です。

彼女は弱い女でした。自分の歩んでゐる途が謬つた途であることを自覺しつゝも、なほ其處をのがれて本來の當然彼女の往くべき途を踐むことの出來なかつた弱い女です。

彼女は若くしてローランの妻となりました。此の結婚に於て、彼女は彼女の意志といふものを少しも有ちませんでした。彼女は無心に結婚しました、而して結婚生活の數年を經過しました。けれども彼女の生活には、若い女の熱い血を燃やすやうなさうした喜悦も快樂も滿足もあり得られませんでした。

何故といふに、彼女は彼女の良人を解してはゐなかつたのです。從つて彼を愛することは出來なかつたのです。彼等の結合は眞に固い基礎の上に立つてはをりませんでした。

然るに偶然にも彼女の索寞たる生活の中に飛び込んで來て、彼女の暗い生活を色鮮やかに彩つたものがありました。それが即ち彼女の次男ジャンの父であるところの、後に公然吾子として呼ぶこと

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

の出來ないジャンに、その財産を遺して死んだところの、かれマレシャールその人でありました。
彼女にとつての彼は、その全生命であり希望であり、又その喜悦でもあれば慰藉でゞもありました。彼を得ることによつて彼女は、はじめて人生の喜悦といふものを知ることを得たのです。彼女は彼の妻として自らゆるしてをりました。しかもなほ彼女はローランの妻としての位置に座つてゐたのです。

彼女は二重の生活を生活して來ました。その一方は當然虚僞の生活であらねばなりません。彼女は法律によつて認められた良人ローランを、彼女の眞實の良人として愛することは出來なかつたのです。彼女自身にとつて、彼マレシャールとの關係こそ絶對のものでした。それにも拘はらず、彼女はローランとの結婚生活を、そのまゝ持續して來たのではありませんか。何故彼女は彼女の本心の命ずるまゝに、まこと彼女の欲するまゝに、彼女の採るべき唯一の途を撰ぶことが出來なかつたのでせう。

彼女の所爲は、自己に對して甚だ不忠實なものであつたと言はねばなりません。彼女は自分を欺き、良人を欺き、社會をも欺いて來たのです。秘密をつゝんできた彼女の二十幾年の生活は、決して彼女にとつて平安な愉快なものではなかつたでせう。否、甚だしく苦痛な不幸なものであつたことは明白

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

です。
その愛人の死を聽いた時、彼女の胸は人知れずどんなに擾れたことでありませう。
彼女が長子ピエールの、疑ひに瞠られたその眼の光りに射られた時、我子の眞意を測り知つた時、深甚なる彼女の苦悶の情は、如何に彼女の弱い心を虐げたことでありませう。
我子の冷やかな監視の眸は、何時も彼女の上に据えされてあります。怖ろしい呪咀の言は彼の唇を衝いて出るではありませんか。
今まで自分を、自分一人を、その尊敬と愛慕と信頼との對象として來た我子は、もはや純眞な愛情をもつて自分に對することはない、自分は既に母としての權威を、全く失して了つたものであると知つた時、よくも彼女の胸はやぶれなかつたではありませんか。
「此の一月といふもの、私は人間の苦しみ得る總ゆる苦痛を嘗めました。お前の兄さんが私を疑ひ出し、一分〳〵と事實に近い想像を廻らしてゐるのを見たその時から、私の生活は刻々に、何とも言はれぬ苦痛の犧牲にされたのです」。
彼女はジャンに對して斯く告白してをります。何といふ悲痛な叫びでありませう。
けれどもそれは、彼女の受くべき當然の報ひではなかつたでせうか。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

若しも彼女が、ほんとに眞面目に彼女自らに就て考へ、眞に自ら進み往くべき途に進み往くことが出來たならば、彼女は自分をも他をも幸福にする事を得て、後年かゝる悔恨に責められることはなかつた筈です。

彼女には勇氣がなかつたのです、決斷がなかつたのです。

彼女は自分を欺いて、いゝ加減の妥協的生活を營むことが、自分に對して如何に大きな罪であるかを識り得なかつたのです。それが如何に怖るべく愧づべき行爲であるかを識り得なかつたのです。

彼女は彼女の全てを、その尊むべき自己の生命そのものをも、自然の成行に委して怪しまない程に、痛切に深刻に、自分といふものに就て考へることの出來ない女だつたのです。

彼マレシャールを愛したことが、決して彼女の罪ではないのです。結婚の形式に拘はらず、その愛するものを愛することが、眞に自己に對する貞操を守ることに他ならないのですから。たゞ彼女が心にもなくその良人ローランとの結婚生活を持續したことが、彼女の大きな過ちであつたと言はねばなりません。

つまり彼等の苦悶は、彼等が彼等自らの生活を眞に把握してゐなかつたところに起因してをりま

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

す。

ピエールの生活は、瑣末な外物の刺戟にも直ぐ動搖しなければならないほどに不安定な狀態にありました。彼は自分以外の他の何物にも煩はされず動かされない確固とした信念を、その生活のうちに有つてゐませんでした。ですから彼の生活には、何處までも自分を信じ通すといふ力强さを缺いでをりました。

自分といふものを眞に把握してゐない人は、自分以外のものゝ力に煩はされる人は、たとへ現在如何に平安な境地に在り得やうとも、それは暴風雨の襲つて來ない前の平安であるに過ぎません。雨が降り風が吹けば、直ぐに破られたり覆へされたりする平安であるに過ぎません。不安な預覺を拒否することの出來ない平安であつて、永久性のない一時的のものと謂はねばなりません。望むべき眞の平安は、吹きたける暴風雨の眞中に、或ひは暴風雨の經過した後に於て、はじめて獲得したものであらねばなりません。

眞に自己を把握してゐないものゝ生活は、即ち他に依存してゐるものゝ生活であります。歡喜も悲哀も自分自らの衷に見出すのでなく、他によつて與へられるものであります。全ての事情が自分に順應してゐるうちは、其人は幸福らしく見えるかも知れません。けれども他によつて與へられる滿足は、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

亦他によつて奪ひ去られることもありませう。此時眞に自己を把握してゐないもの丶生活は、其處で破砕されて了はねばなりますまい。

眞に自己に生きる强者の生活は、如何なる事があらうとも他人の蹂躙を許さないものであらねばなりません。

ピエールは斯うした確實性を缺いた生活を有つた人でありました。故に彼の生活には不安がつきまとひました。彼には自信がありませんでした。ですから他の事が氣になりました、弟の幸運が癪に障はりました、自分の不運が慨かれました。而して自分を劣敗者と視ることの愧かしさ忌はしさに憤りつ丶も、なほ自らをその位置において自屈してゐました。弟の優越權を是認することによつて、嫉妬の情を沸かさずにはゐられませんでした。

彼は彼の生活を有つものが彼自らであり、その孤獨をまもる事が彼の絶大なる歡喜であるべき事を感得しなかつた爲めに、彼自らを不幸な境地に陷れたことを竟に悟ることが出來なかつたのです。

自信あるもの丶生活は、如何なるものにもその平靜を攪亂され、その幸福を左右されるべきではないのです。眞によく自己を識り自己を尊重するものは、常に自己の衷に何物にも侵されない至純至高の歡樂境を抱持するものでなくてはなりません。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ピエールは幸運な弟に對して嫉妬の情を抱きました。その嫉妬の情は彼を誘つて其母を疑はせるに至りました。其疑ひは生長して竟に彼自らを苦悶の囚虜として了ひました。

ピエールはその愛する母を罪人と視ることとの苦痛に耐えられませんでした。彼は母を最も大なる道德上の罪人と思はずにはゐられませんでした。彼は世間一般の人とひとしく「女が夫以外の男を愛するは罪である」と、たゞ概念的に信じてゐる人の一人でありました。道德を固定したものと思ふ因習を脫して、自分一個の自由な思想信念に生きることの出來ない人の一人でありました。夫では彼の母は、かゝる吾子の哀憫と憎惡と而して憤懣とに値ひするほどの、惡むべく愧づべき罪人であつたでせうか。

彼女は彼女自ら、その夫ならぬ彼マレシャールとの關係を、何等愧づるところのないものと信じてゐます。しかもなほ彼女は、自分を罪人と目して吾子の愛情を享くるに足らぬものと自認してゐます。彼女のマレシャールに對する愛情が純眞なものであつた以上、彼女はそれに就て尠しも愧づべきところは無い筈です。法律は姦通罪を以て彼女を罰することは出來ませう。然し彼女の心の自由は如何なる權力もこれを奪ふことは出來ません。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

彼女が眞に忠實に自己の生活を生活したものであるならば、彼女にとつてこれほど尊い價値あることはないではありませんか。

それならば何故彼女はその秘密を吾子に發見された時、かの絶大なる苦悶を又自ら味はねばならなかつたでせうか。ほんとに彼女が自分の生活に對して忠實であつたものならば、それは喜悦でありこそあれ、決して苦悶悔恨である筈はありますまい。

彼女は眞に自分の立場を理解してゐなかつたと言はねばなりません。自ら愧づるところはないと思ひつゝも、なほそれを罪と認めない譯にはいかなかつたのです。

若し彼女に流すべき涙があつたとするならば、夫は偏へに彼女がその內心の要求に應じて眞に彼女のために開かれた道程に直往邁進することなく、躊躇逡巡虛僞の生活によつて自己を欺いて來たこと、其事に對する悲しみであらねばなりません。

恐らく彼女は、籠の中の小鳥がその囚はれの境涯に滿足して廣漠たる自由の世界に出ることを却つて怖れとするやうに、彼女は當面の破碎を怖れて後に來るべき建設を要望するの勇氣と忍從とを缺いてゐたのでありませう。而して又彼女は在來の謬まれる貞操觀にも囚はれてゐたものと思はれます。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

彼女の苦悶は畢竟彼女自らの罪惡に對する觀念、自己の生活を批判する態度の矛盾と缺陷とに基いてゐるに外なりません。

彼等の生活の斯くも痛慘な不安なものであつたに比べて、彼ローランの生活こそ愉悅な平和なものであつたと申されませう。

彼は眞に自分の生活を心から樂しんで生活してゐた人でありました。

彼は正直な、むしろ愚昧な男でありました。彼は何事をも、他人の爲すがまゝに委して、日々を無事平穩に過すことに滿足してゐられる男でした。恐らく彼はたゞの一度も、その妻に對して何等かの疑念を挾んだことはありますまい。その亡友の行爲に不審を抱いたことはありますまい。

彼はあるがまゝに何事をもうけ入れ、信じ得るほどに寛大な人なのでした。彼は憐れむべき人かも知れません。が同時に又、此上もない幸福な人であるとも言はれます。

彼は彼の妻をほんとに識る事が出來ませんでしたのです。けれども、それが如何して彼の罪であると言はれませう。彼は全く彼の妻を信じ愛してゐたのです。

彼の心は何時も平安でした、疑念などの生ずる余地を存しないほどに、極めて平安なものであつた

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

のです。

斯くして彼は欺かれてゐました。彼は彼の信じて疑はなかつたその妻に、又その友に欺かれてゐたのです。

然しながら、無智なるがために欺かれてゐたことが、罪であるといふは餘りに殘酷なことではありますまいか。

彼は自分の周圍に、自分自らの上に、何事が起つたかも知らないで、靜かに平和に、その墓場へと辿りつける人なのです。

かゝる人は、或る意味に於て、至極幸福な人であると言つても好いと思はれます。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

苹果の木蔭

かみちか・いち

その日は日曜であつた故でもあらう、偶然にも若い連中が、落ち合つて終つた　するといつもの様にあそびがはづんで來て、夜になつてもなか〳〵歸つて行く者はなかつた、それでも八時近くにもなると矢張り倦いて來て、それ〴〵に陣どつて居た手合が　一人々々と何時か　主人の側の火鉢によつて來たのであつた。

畫師の主人は今迄の一人の青年との話のつゞきを話してるらしい。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

「でも僕は凡の人の希望とか空想とかは必ず何時か實現されると云ふことに、可成深い信仰をもつて居るね。いつだつたか……さう、一昨年の夏、僕は細君と一所に裾野の方に避暑に行つたことがあつたね、あの時はお天氣がいゝと僕は大概寫生に出かけたのだ、そして晩方になつて可成つかれて歸つて來ると、細君が白い前掛をつけたまゝでよく田圃道を僕が歸へる方に出迎へてくれたものだ、さうしたある晩フッと僕は空想と云ふものは隨分實現に遠くはないものだと云ふことに氣がついたのだ。こんなことは少しレデキユラスなことだけれど、僕は小さい時から畵師になりたかつたのだ、そして若い美しい細君をもらつて、僕が仕事からかへつてくるのをまちうけて貰ふことなどを盛に夢みて暮らしたものだ。一昨年裾野で氣がついたと云つたのはそれなのだ、いつの間にか小さな自分が夢みた通になつて居るんだからね、僕はその時にあるショックを感じたね、勿論二ツの場合の氣分はすつかりちがふさ、然し形の上では全く實現されたんだからね………」

「然しそれはあなたの場合丈さうで、それが誰にも適用される約束とは云はれますまい」

青年は冷やかな笑をうかべて居た

「さころが僕はそれが誰の場合にも適用されると思ふね、少し片意地に聞える樣だけれど」

畵師の一番上の女の子とおはぢきをしながら耳を傾けて居たMがこちらに顔をむけた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「私はパパさんの方に賛成しますわ、ほんと云へば私自身が空想は實現されるものだと云ふことについては、迷信とも思へるほど信仰をもつて居るのですから、それに又最近東北に行つて來たことは、尚更それを裏書をした樣な氣持がします………」

＊　＊　＊　＊　＊

（Mの話）

私は今でも私位空想にはぐれまれて來た子供はなかつたであらうと考へて居ります。そして何時頃とははつきり覺えて居りませんが、日本全體の地圖をひろげて見ながら、この地圖に現はれて居る國々の凡に、何時か一度はすつかり行き度いと云ふ欲望が起つて參りました。そしてこの地圖中の一番遠いところに迄も行くのだと考へました。その地圖で一番遠いところとして私がどこを意味して居たとお考へです。私の生れたところと云ふのが九州なものですから、私共には臺灣はそんなに遠いとは思へません、臺灣に行つて歸つて來た者は近所隣に澤山居るのですから、床屋も洗濯屋もあの仕立屋も臺灣がへりだと云ふ風ですからね。それに北海道は小さかつた私共には氷で出來た島の樣に思へて、迚も人間なんかそこに生きて居られるとは思へませんでしたし、それで一番遠いところと云つた時には私には本州の一番端になつて居る靑森あたりのことを指して居りましたよ、そしてどう

かしたはづみにそれを母にはなしますと、母がむきになつて

「この子は日本國中を股にかける様なことを考へて居ると云つて、女の子と云ふものはそんな大それた考を抱いて居るものではない、そんな考をもつて居る女に限つて、一生不仕合に暮らさねばならぬから」と云つて聞かされました。それで私はそんなことは考へても決して口には出してはならぬものと悟つて、すつかり胸にたゝんでおく習慣になりました。

それからも一ッは、私は幼い時からよくいろ／＼なものをよみました。そしてそのよんだ多くの書物のうちのすきな型の人達に、自分が大きくなつたら是非逢ひ度いと思つて居りました、そしてその一ッ一ッの型の人を想像して見ては又その逢へるときのシーンを想像でこさへてはたのしんで居たものです。

そしてその多くの型の人々のうちでも一番すきであつたのは、何かかうさりかへしのつかない様な悲しみや淋しみにひたつて終つて、人が幸福にくらして居る世の中と云ふものにすつかり背を向けて何時もすねた様な態度で社會に向つて居る人達で、私は何だかそんな生活をする人々の生涯に悲壯な感を附加させてありやう云つて見れば私自身がそんな生涯を送る人間であり度い様に思つて居りました。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

地圖をひらくのがすきであつたのにはこんなわけもあるのです、自分達がすむ都會から遠くはなれた處、地圖では青い、西洋の人形の睫の樣な細い線を並べてある山と山との間に、私のすきな型の人がかくれて住んでは居ないかと云つた樣な、幸福な疑が何時も私にあつたからなのです。

こんなたわいのないことにでも幼い時の考は何時迄も人の心のどこかにこびりついて居ると思はれます。大きくなるに從つて、都會の中心をはなれた地方の生活と云ふものを聞もし時には見もして實際から考へて見て、そんな生活をする人に限つて意志のよわい、それかと云つて自分の住む世の中と合唱して行く丈の力も才もない人や、人間として不完全なところのある人であることはわかり切つて來ても、やつぱし田舍を旅行して歸つて來た人などが行つた先々のことなど話す時には、そんな風な人に逢ひはしなかつたかと可笑しいほど心をときめかして聞くのでした。

でもそんな人には仲々逢ふことは有りません、偶に逢つても實際あつて見ると厭に疑ひぶかい人であつたり、感情がリフワインされて居なかつたり、話をするのがいやな程、調子の低い階級に屬する人であつたりするので、私は大抵はそんな空想の爲にとんでもない稅金を拂はせられて居るのに氣がつくのです。

でも私はたつた一度大變に氣持のいゝそして私の空想に畫いて居た人に近いなつかしい女に逢つ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

たことが有ります。

私の小さな時の夢がほんとに實現されて、私は學校を卒へまして一寸の間青森のある小さな町の女學校の敎師にやとはれて行つたことが有ります。上野を立つ時に暫時逢はないで居たBと云ふ友人が見送に來てくれました。汽車が出る一寸前にそれが窓のところによつてきて

「あすこは、ほら何時もよく私がお話して居たKと云ふ人が居るところよ、逢つたら仲よくしてあげて頂戴な」

とさう小さな聲で云つて後の方に引き下つて終ひました。

私は何かもう少し聞いて見たかつたのですけれど、もう直に汽車が出て終つたので、たつたひとりになつた汽車の中で目新しく展開して行く野や山をながめながら友達が云つた短いセンテンスを思ひ出しては私はKと云ふ人のことを考へて居りました。

その人は友達の姉の友達で、ある專門の學校を出て英語の敎師になつた人でした。何でも文學に志した人で、卒業後東北に行つたのもその方での野心があつたからだと云ふ樣なことを聞かされて居りました。それがどうしたことか、一年と云つて行つたのがもう二年たつても三年たつてもその年共

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

に八年丸つきり東京には歸つて來ないで、たよりも滅多にはないとのことです。その人には周圍の人は誰知らぬ者ないN氏と云ふ人が居てKが東北にたつた翌年大學を出たのでした。大學を出たらどうとか云ふ約束が出來て居たらしく、卒業すると直に極内でN氏はその東北の町迄出かけて行つたと云ふ人も有りますが、どう云ふものか周圍の人達の豫期は外れて、N氏は間もなく外交官試驗に通つて、今ではある大國の公使館に書記生として美しい細君を迎へて幸福に暮らして居る筈です。私は又兼ての癖でそのKのことをいろ〳〵考へて、少なからぬ好奇心を抱いて東北の町につきました。

　そこの町についた翌日、學校に出て就任の挨拶やら事務の引繼やらすまして皆の人にも紹介されると私にはKと云ふ人は直にわかりました。卅に一寸前位な年配の丈も高いし横も可成ふとつて、髮の多い青白い顏が彫物の様に正しいのに、紫の花についた黄色の蕋の様に水々した眼の光が八年間の單調な生活にどうして損はれなかつたのかを私に疑はせました。でもその人は幼い私には少しも親しむことの出來ない人に見えました。仕事の時でもいろ〳〵な會議の時でも何時も凡の人から放れて終つて、たつた一人でそのぢーつと同じ所をいつ迄も見詰めるになれた眼を自分の意志のあるもの丶上に据えて終つて、何時も少しきつい位に結んである口は永劫あくことのない洞穴の扉の様に私の心を悲しませました。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

ですからその日が來たのは、私には全く意外でした。どうしてそんな日がその人と私との間に來ることを私が預想して居たでしよう。

もう七月も可成たつて、私もやふやつと什事にも慣れた頃でした。その日は、少し採點を仕かけて置かうと思つて、退けてから一人で教員室に殘つて居りました。當番の博物の敎師は、級園の菊の手入を少しして來ますから、お歸になる時は一寸お知らせ下さいと云つて、あとのことを私にたのんで出て行つたのでした。私は隨分うるさかつた採點もやうやつと三年の分迄すまして、あとは明日に廻さうと思つて後始末をしてもう歸らうと櫛を出して髮をときつけたり袴の紐を結び直したりして居りますと

「おかへりになりますか」

と後から聲をかける人があるのです。だれも居ないと思つて居たものですから、私は何とはなくとも立つて居た鏡の前を一足退いたほど驚いたのでした。見ると私の席の方からは陰になつた机の上につんだ書物の間からKの青白い顔が見えるのです、何かいやにムシャ〱した様な顔を始めて見せて目が赤く充血してるのです。私が呆れて一寸何にも云ひ出せないので直に追つかけて

「御一所にかへりましよう、そして今日はおよろしかつたら私のところにおより下さいまし、苹果が

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

喰べられ相になりましたから」

私はその日は別に大した用事も持たなかつたから快く一所に學校を出ました。Kは學校の直ぐ近くの土地のある舊家の離れをかりて居りました。東北特有の箱の樣な入口をもつた家根の低い母家に入つて奇麗に手入れされた庭を右に見て可成長い椽側を通つて行くとそこが離れになつて居りました。階下は物置や便所になつて、部屋は二階に六疊が二間とつてありました。西側の部屋に机をおいてそこに住つて居るらしく、小さい床には葵が白い磁器に氣持よく盛られて、精巧なレースで緣どつた花瓶敷の上においてありました、土地塗の大形な硯箱が机の上にはのつて居て北の高い窓下に簞笥と鏡臺が据ゑてあるばかりで、讀物など丶云つては東向の庭に向いた緣側に籐の安樂椅子によみさしの新聞がおいてあるばかり書物など一冊も顏も見せては居ないのです。

「書物なんか有りませんよ、もう少しもよまないんですからね」

袴をぬいで黑羽子の折りまげた帶を結びながらKはよつて來て居るのです、未だ何とも私が尋ねぬうちにもう私の考へてることがわかつて居るのですもの、私はビクッとして、少し氣味がわるくなつて來ました。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

「もう書物よまなくなつてから二年ばかりになりますよ、さあ、苹果畠に出ましよう、今紅茶をもつて來てくれる筈ですから」

私達は物置の前に廻してある下駄をはいて、青い葉の間にボーッと紅味を帯びた苹果が下つた畠の間を縫つて行きました。七月も終に近いと云ふのに、下生になつた豌豆がやつと青い莢になつて居る丈で茄子など未だいぢけた枝のまゝで蕾をもつには程遠い位な様子です。一杯に實をもつた青い苹果の枝はその下におかれた小さな卓の上に引きづる様に垂れて、熟れたものゝ悲しみを持つてもぎ取る手を待つて居る様に見えました。その果物の生々しい若さに引つけられて、私はいきなりその實の一を起して、その心持ち赤味を帯びた方の側に頰をつけました。

「さあ、それをとつてたべるのですよ、未だ苹果にはお通じにならないからあんまり新しいのはまづいかも知れませんが本場に入らしつたから通にならなくちや、これはね、こちらで六號と云つて苹果の出來る土地でなきや喰べられないのです、一番さきに出來るんですけれど、おいしさは劣ります、でも土地の人は賞美ますよ」

さう云ひながら私の手からはなれた苹果をナイフでとつてむきはじめました、青い皮を紐の様にKの手先におくり出す苹果の白い肉が私の心をそゝりました。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

「さあ、めし上れ」
私は受取つて口に入れて見ました、と、紙屑をかみしめた樣な氣持がすると次の瞬間には何かに口中の皮をしめつけられた樣な氣持がしてペッとはき出しました。
「いけません〳〵それをたべて見ねばほんとうの味はわからないのです、一寸口に入れてびつくりして出しては味は未だ出ないのですから」
さう云つて自分はパサ〳〵した音をたてながらおいしさうにたべて居ります。
「やつぱしあなたも苹果のない國の生れですね」
私はどう云はれても紙屑の樣な味をもつた早稻の苹果を又口にする氣は出ませんでした、紅茶をのんだり、堅い土地出來の鹽煎餅を無暗にたべたり、下つて居る苹果の一ッ〳〵に唇をつけて見たりして居りました。
二人の間にはそれ迄格別な話は出なかつたのです。只二人が別々に思ひ〳〵なことを考へて居る樣でしたがそれでも二人がさうして並んで居ることが少しも偶然なことでなく、ずつと〳〵昔から定められて居たことの樣に親しく思はれました。それは私に丈さう思へたのではなく、Kも同じ樣な氣分で居るらしく別に私が手持無沙汰らしく考へ込んで居るのを構ふ樣子もなく、パサリ〳〵と音

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

をたてゝ、青い苹果に喰ひ入つて居るのです。私の心は妙に和げられました、うれしい樣ななつかしい樣な氣持が、ゾク〳〵と身體を襲つて來て、自分でどうすることも出來なくなりました、何か云つて見度い樣な、然し言葉で表はすには余りに尊い樣な氣が頻にするんです。フッと私はKの凡の秘密が知り度い思が烈しく起つて參りました。

「さあ、お話をして下さい、あなたがどうしてこゝにいらしたか、何故こんなに長くおいでになるか皆私に聞かして下さい、その代に私も何もかも話しますから」

私は何時でも自分をいとほしんでくれる人にする樣に、Kの後から肩を押して、兩方の手をとつてゆすぶつて居りました。

「惡い子、さあそんなに後から押してはいけません、ほら着物がこんなにたくれるぢや有りませんか、ちやんと行儀よく座つてから話をきくのです」

さう云ひながら、私の兩手を捕へてもとの席にかへしてくれました。

「あなたのことは先達久し振でBさんが手紙を書いてくれましたのでくわしく承知したのです。何でもこちらに入らしたのは私が來た樣な動機で入らしたと云ふことでしたから、私は自分の近頃の氣持をおはなしして御參考に仕樣と思つて、この間から一度ゆつくりとお話して見たかつたの

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

です」

Ｋは私の眼に往來する凡の思を讀んで居る樣子で、鋭いナイフの先で青苹果の皮をいためながらポツリ〳〵と話し出しました。

「あなたが今迄はなれたことのなかつた家を離れて、自分一人で生きて見樣としてこんな片邊迄來てごらんになつた氣持は私にはようくわかります。お互に私共は今迄の女達が知らなかつた苦しい喜を一杯呼吸して居るのです。與へられるになれたパンを自分の手で丁度この苹果の木から實をもぎ取る樣にもぎとつて喰べることは今迄の女達が知らなかつたことなのです。働きなれないあなたには今の仕事でも隨分おつらいでしよう。然しそのうちには慣れて終つて今數へる時に必要にせまられて用ゐる戲談や熱心が何時か誇張されたまゝで自分のものになつて終ふと、仕事は直に何でもなくなります。さうなるとあなたは危機にお立ちになるのですよ。一體この町は氣候が大變いゝところなのです。冬こそ寒くは厶いますけれど、それ〴〵防寒の準備は出來て居りますし、風土病はなし人情は質樸で深切ですし、それに豊かな土地ですから住み慣れますとどこにも行き度くなるのです。東京にこそ歸つて見度いと來た當時は私なども考へて居りましたけれど、東京ですとこゝなんかの樣に私共のはたらく位置が有りませんし、つい生活の平調をやぶるのが面倒な

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ものですから他所にうごくことなどを考へずに居るうちに、自分と今迄歩いて居た人達の自分より先に成長して終つたり、社會的に先輩になつて終つたりするのを見せつけられますと、折角抱いて居た野心なんかもどうでもいゝと云ふ考になり、今迄は肉の自分が不安を感ずる樣に盛であつた内生命も何時の刺戟が少いので枯死して終つて、私共は何時の間にか骸の樣になつた自身をかへして居るのに氣がつかねばならなくなります。多くの男達が恰度同じ樣な徑路で、生活に沒頭して終つて有爲な才を葬つて終つたのが私は自分の經驗がよくわかりました。

ですからね、わるいことは云ひません、こゝに入らしても若しほんとうの自分の仕事を仕度いと云ふ樣な希望がおありのなら、決して長くお止りになつてはいけません。初から特別の希望なんかなく、只生活に逐れたばかりでこんな仕事をはじめて居るのならかうやつて眞面目にさへやつて行けば小金もたまりましようし、その間々には何かたのしみも出來て來ましようが、私の樣になつて終つたものでもやつぱり外を見る力丈は何時迄も封じられないものですから、何もかもすてたと云ふ胸に嫉妬や怨恨を育てゝ行きますのです。それがいやさに御覧なさいまし今迄命ともなつて居た讀書もすつかりやめました。それ迄になる淋しみを私はあなたにはお知せしたくない、と云つて何もその淋しみをあなたから奪ふとするのでは有りませんよ、そんな淋しみは最非カルチベイ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

トしなくて今にあなたもそんな餘地が出來ないほど多くの悲しみも淋しみも來るのですから。
出來る丈短い期間にこゝでされる丈のものをとつておかへりなさいまし、こゝにあなたが入らしたことを只一の挿話となさる丈で、生涯の全體の一部となすつてはいけません。それから餘計なお話ですがSさん——ごめんなさい、その方のこともBさんが一寸云つてよこしたものですから——からも成る丈遠くおはなれになりませんようになさいまし、命と命との間に少しでも隙が來ますと、冷笑と嘆息とがやつて來て命の實を結ぶことが何の理由もなくいやになつて終ひますから。私はそれも經驗で云つて居るのですよ、御存知でしようと云ふ男のことを、わすれて終つたのも私がこゝに來てから一人で自由に成長して行つて終つて、とう〳〵近寄ることをお互がゆるすことが出來ない樣に心と心がはなれて終つたからなのです。
私はね、未だ若いあなたがとうやつて行らしつたのを見て、自分がこゝに來た時を思ひ出してわけもなくなつかしいのです。そしてこないだからこんなことをお耳に入れておき度くつて、一度ゆつくりお目にかゝりたかつたのです」
私はKの話に聞き恍れて、只ぼんやりとなつて居りました。とりとめ樣のない淡い淋しさが頭と云はず手と云はず押し包んで來る樣で、幼い私の心は、涙のお湯にでもひたつてた氣持でした。その時

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

私もフツと地圖のことゝKのことゝを思ひ比べて居りました、そして、パパさんと同じショックを私は感じましたのです。

一望の間に見分けらるゝ大きな自然には故郷あたりの初夏位な夕暮の氣持が何時の間にかせまつて來て居りました、太陽は山の陰に落ち様として一面の紅をたゞよはして居ります、白い雲の片が津輕富士にはかゝつて牛乳のよどみが流れる様に東に向いて進んで居りました。

「ごごんなさい、あの岩木山に少し殘つて居る雲がすつかりなくなると休暇が來て、あなたが東京におたちになる時が來るのです、もう直ですね」

私はフツとこの人と二人で東京にかへつて行きたくなつて來ました、淋しみに固くなつた人の心に賑かさはしみ込んで心の洞穴の隅々によろこびを殘して行くことは出來ますまいか。

「ね東京に行きましよう、二人で」

「有りがたう、でも も少し行きますまい、この淋しさも悲しさも消えて何となくなつたら東京にも出ましよう、今年は北海道に行きましよう、あすこの廣い野原で氣をおちつけて遊んでかへりましよう」

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

その夏休暇にかへつたなり、私は少しの都合でそこの町にかへることが出來なくなりました——Kが云つた樣に、短い期間に得らるゝ丈のものは得たと思ひますけれど。Kにはその日のあとでは學期末の忙しさにまぎれてゆつくり話すこと出來ないまゝで、岩木山には雪がなくなつたのでした。こんなに秋も深くなつて行きました、今日あたりあちらは可成な寒さでございましよう、アカシヤの林も落葉松の森も、あのつめたい八甲田の下ろし風には、怖毛をふるつて居りましよう、Kの家の苹果畠には晩生が袋を出されて、霜枯水の庭に色彩を與へて居りましよう………。

× × ×

こゝでの話は途切れた樣な形で終つたらしかつた。暫時は主人も客達も何か別々な自分の思に沒頭しる樣に思はれた。

木枯が思ひ出した樣に窓を打つて、向の林の中に獲物を逐ふ猛獸の樣に突き入るのがはつきりと聞えて居た。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

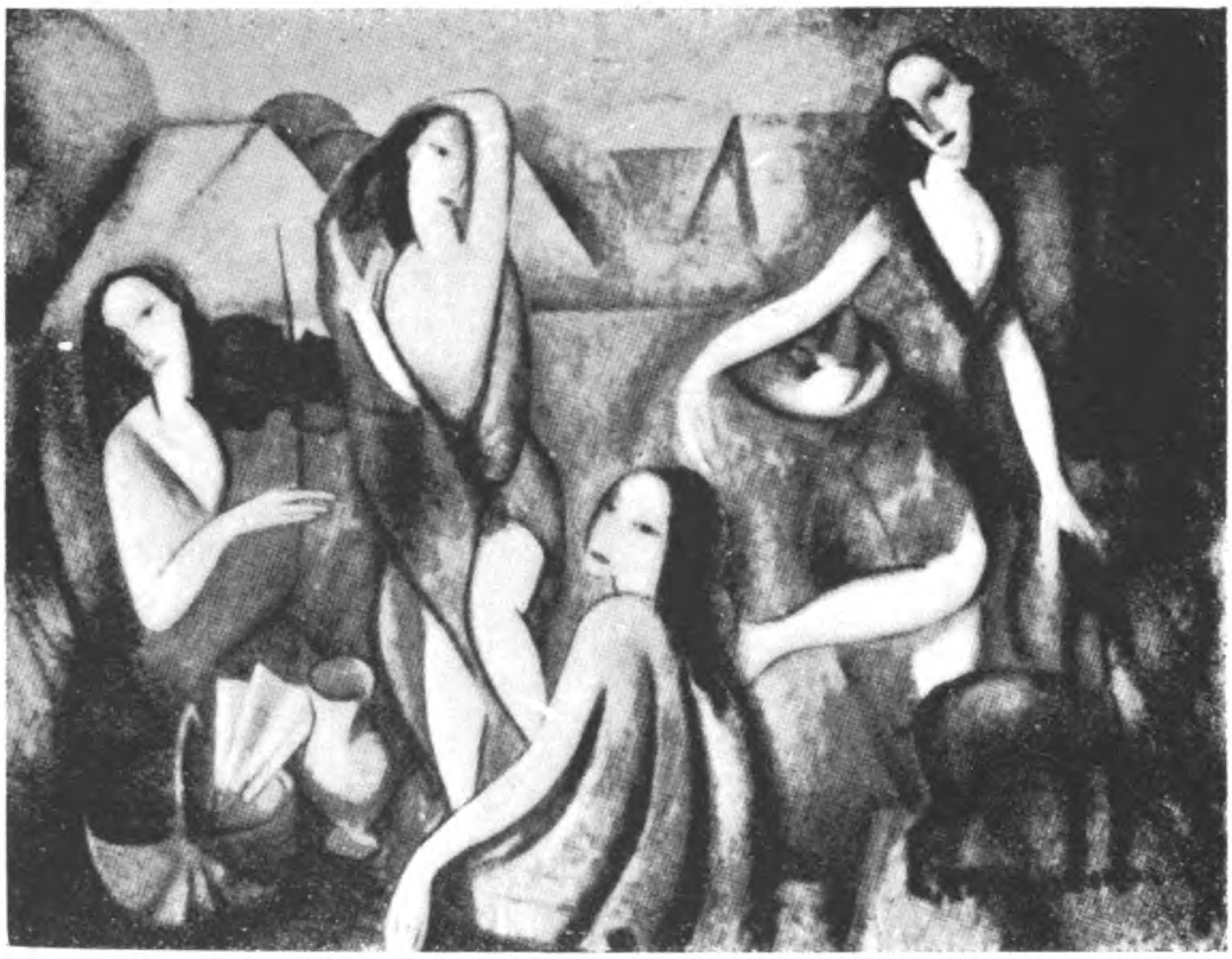
YOUNG GIRLS. MARIE LAURENCIN.

(SALON DES INDEPENDANTS, 1911).

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

雑感

尾竹一枝

1

私の仲間（クルジョーク）よ

私は「自分」から自分のありたけの缺點を今夜正直に指摘した。正面から自分の生命生活を正直に批判する事が出來たのだ。私自身の生命が露骨にそれを命じたからだ。私はその醜穢な時間の前に立つてはどうしても生命の赤裸である事を命じられたそのまゝに正しく撰ばなければならなかつた。

私の仲間（クルジョーク）よ。私はこれまでに幾度こうした眞實の前に自分を捧げるべく——正面から自分の生命を批判すべく——弱かつた私己の爲に祈る時間を求めたことだろう。他からの刺激を受けた時、自分の胸に新しい力が甦つて來る時、他の生命と強い交渉をもたうとする時、併しその場合いつも私は自分の立場を求め得られず進んで目醒めに依つて起つてくる眞の生命の燃燒を抱括する事が出來なかつた。

私は自分の弱い醜い姿を厭ふ。それを避ける。私は自分をその場合最初の量よりも多く卑しく醜いものに現はれてゐる事を知らなかつた。

私は自分の醜さにすぐ亂れる。自分の幼稚であり卑くある事ですぐ迷ふ。その場合私は亂れ易ひ自分己の根本の主觀を美しくすることも強くする事も育てる事もすぐ忘れる。

私は自分を見守ることに絶へられない弱い人間であつた。醜い自己の爲にいつも彼征服者であつた。

根本の主觀を育てる事の弱く幼稚である「自分」に生命を見守ると云ふ事實は可成りの骨折と惱みを續かせた。自分を慘めなもの哀れなものと思はせてゆく。その反抗の間重苦しい惱ましい心の悲しい日ばかり續いてゐた。

併しそれらの間に有つても自分はいつも生命に對して絶えずなにかを求めてゐた。純な己の内にいつも正直な生命を求めて來た。

自分は瞬間に征服される

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

自分の主觀の弱い幼稚な形を惡む瞬間に。
自分の罪――自己の生命に對して――に動亂する瞬間に――
醜さ卑しさに絕えず眼を伏せてしまふ。

切角其時起つて已の命の要求はその瞬間に強く尋ねる事の出來ないものになつてゐる。

私の純な正直な生命に自分を委せることが出來なくなつてゐる。

眞の自分の要求がはつきり自分に響いてゐても要求しくゐる光明を認めてゐても自分は瞬間の動亂に眩惑されてしまう。

瞬間に私はまた、なんにも自分を知らない愍れな弱いものになつて投げられてゐる。
光明はまた他のところに流れてゐる。
私は瞬間に醜い自分に征服されてゐる。

2

私の仲間（クルジョーク）よ
今私は征服者である。

主觀の弱い幼稚な形を事實に於て征服したのである。
瞬間に被征服者から征服者に生れたのである。
弱い己の主觀の中にあつても必然の生命の要求に抱括されてゐるのである。
自分の弱い過去の態度を今新しく起つてゐる強い生命の動きが惡むものである。

私は瞬間に勝つた。
自分の醜さを卑しさを厭ふものではなくなつた。いたずらにそこから避けようとは求めてはゐない。
私は育てる事を要求してゐる。強くする事を求めてゐる。

自分は今、明かに響いて來る己の生命の流れに向かつて戰慄に立つてゐるものである。
今私は鮮明である。單純である。
明晰である。活々してゐる。

私は今、他から更に強い新しい刺激を受けた。
そこに他の生命と交涉がもてた。私は強く火花を散らそうとしてゐる。かつて自分己の道程に一度も見る事の出來なかつた

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

——繰返し要求しつゝもその光明を生命にまで抱括することの出來なかつた——光明である。

私の胸には新しい强い力が甦つてゐる。

私は被征服者から被征服者に移つて來た。たゞ私は今その中心——生命全體が眞の力をもつて火花を散し眞に生命の爲にすべてを燒きつくそうとする生命全體の——を求めてゐる。道の搬びを求めてゐる。

私は醜い自己を見守つたのだ。

弱い幼稚な——併し私は幾度かこの弱い幼稚な醜いものゝ前に征服されてゐた。この支配者の前に負かされてゐた。それらの經驗は苦しい程澤山私に味はふことが出來る——自己を見守つたのだ。

自分を怒みながらも幾度か苦しい自分の罪に動亂し眩惑されて迷つてゐた。

今私は征服者である。

私は瞬間に戰つて勝つた。

3

私の仲間（クルジョーク）よ

私は正直に正面から自分の生命が見守れたのだ。私は弱い、私は醜い、私は怠け者だ。私は自分によく僞つきであつた。

私は下層の一勞働者より弱かつた、醜いもにであつた。

私は自分の 生活すら見守る事の絶えきれない 程弱い 人間だつた。

私は愚であつた。

私は愚であつた。

私は多くの場合破れ易ひ戰にいつでもあつたのである。

私は最も弱い個人的の生活をしてきてゐた。

私は自分の醜さに弱さに征服されてゐた。

今私はその弱さに反抗して勝つた。

これから私は自分を育てる爲に立たなければいけない。

育てる爲に道を求めなければいけない。

氣取つた瞑想や無價値な空想は正直に正面から自己の生命を見守つた時ひとたまりもなく征服されてしまう。

絶對の力——それは各人己の生命であつた。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

私は智力を求める。
そして私は落付いた靜かな心で眞の生命の流れ、眞の生きると云ふ事によつてのみ得らるる光明を見守らなければならない。
私の仲間(クルジョーク)よ
今、私は無智と幼稚と醜さをひどく怖れてゐる。

一二・一九・夜（一九一四）

4

私の仲間(クルジョーク)よ
私達は時をもたなければならない。
智識をもたなければならない。
經驗を重じなければならない。
そして私達はだんだんに育てられてゆく。
自然も私達を育ててゆく。
私達は生命の中心を求めなければならない。絶對の自信を自分己の命の上に築かねばならない。
私達は生きることに於ては眞に強く自分己の生命——絶對の力である——の中心にひとすじになつて流れ込まればならない。

私達には時がいる。
智力がいる。

今私は更に生れた力強いものに依つて己の道程の力一歩を求めてきた。
私は今その道程——生長、生活の——の第一歩に立つたのである。

私は時を求める。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

米國歌劇界

マリー

一月下旬にはフワーラーが十二人の生徒を相手にメトロポリタン歌劇場でハンパー・デンクの「ケーニヒキンダー」を始めたオーバー、フチルニア、マットフエルトなども歌ひ尚ほマダムバタフライはフワーラー、フタルニア、マップルソンリ、リツカルドーマーチン、スコッチー及びベリエなどが歌ひました。

尚ほワグネルの「ラインゴルト」も亦新舞台で歌ふて大喝采を博しました、此外「ボリス、ゴヅフ」及「ラボヘーム」も歌はれました「デ・マイステルジンゲル」「カヴアレリヤルスチヤカナ」及び「パリアツチー」共に好評のオペラは上場されました。

グーノーの「ロメチ、ジユリエツト」は英語に歌はれました、カピートライスル、パルマ孃がジユリエツトを歌ひチルヴイール、ハーロルドがロメオを勤めました。

二月の始めにマスネの「ドンキホヨーテ」をヴワンニー、マルコー(有名なバリトーン)其他で歌ひました彼は巴里で之を百五十度歌つたさうです、マリー、ガーデン孃がダルチネアを歌ひヘクトル、ダフラニナがサンマー、パンザを歌ひました。

同時に「トスカ」をフワーラー、カルーソー、スマツチー、ヒニーコルシー等で歌ひました、「黄金の西部の姫」(ガール、オヴ、ゴルデン、ウエスト)はデステイン、カルーソー、アマトー等で歌ひました、「デ・ヴルキユーレー」はガスキー、フレムミユタツト、チバー、等で演奏した、此外「マデライン」や「ドンパスケール」なども呼び物となりました、ヴエルデーの「リゴレツト」は英譯で歌はれました。

三月二十五日にはツルドーフアストリア(世界で有名なホテル)でストラウス、チツフエンバツハ、ズツパ及びサリヴワンなどにオペラソングが歌はれる筈でした、(フレツダーマウス、オルフエオ、ピユーテフルガラテア及ミカド等です)

昨年九月にグーノーのフワウストは一二二六度目を巴里のオペラ座で歌はれました、昨年は此歌劇場でフワウストが二十二回ありました、此次がサ・サエンスの「サムソン、エダリラ」でした、十九回、「リゴレツト」が十七回、「アイダ」十六回。

「ローエングリン」が十三回「マイステル、ジンゲル」が十二回歌はれたとのことです。

獨逸で最も評判のよい佛國のオペラはビゼーの「カルメン」ださうです、是は一ヶ年でなく過去十年間の統計だ然うです。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

一九〇一—一九一〇迄い間に「カルメン」は獨逸の諸歌劇場で三九五六度歌はれました「ローエングリン」が三四五八度「タンホイザー」が三三四三度、「ミニヨン」が二七七七度、「フライシユッツ」が二六五八、「イル・トロヴアトーレ」及びチッフエンバッハフコンテ、ドッフマン」が各二四八六度、「パリマッチレ」が二一八八度、「ツアウパーフリユート(マテキ)が一八五九度、「デヴアルキユレ」が一八一四度、グーノーの「フアウスト」が二〇七七度でした此十一のオペラ中四つがフランスもので二つが伊太利です、五の獨逸の有名なもので佛の四つより十年間にたつた一五三六度多く演ぜられた計りでした、近き内にフアラーとカルソーとで紐育でビセーのカルメンを上場するさうです。

リツスラー

海外消息

佛蘭西の美術家アンリ・ル・シダネ。ドモンリブルトン夫人、ヴアレリビッソン夫人が今年レヂオン・ドンノール勳章を授與されるのださうな。

ペエル・ラシエエズにあるバルトロメの「死の門」に損害を加へた男がゐた。「死の門」の正面人物の手指と足を切斷した。政府では早速この群像を補修してのち「死の門」の前に池をこしらへて遠方よりみる方法を見物人のために作つてしまつた。

佛蘭西テオドル・ルウソオ(風景畫家)に一畫境を與へた有名な栗並樹の歩道が事情のために取毀たれると云ふ風説がたつたので史的紀念物保存委員はこの栗並樹を藝術的境地の一に加へて永久保存するように美術局に要求した。ルウソオの栗並樹はヴアンデエのスウリエエ城内にあるもので、ルウソオが友人のシヤル・ルルウの許に寄寓してゐた頃(一八三七)描寫したものだ。

丁抹のコッペンハーゲン市、カール・ヤコツブセン博士はその遺産の殆ど全部八千萬圓を美術奬勵資金として消費するやうに遺言して死去した。

佛蘭西アンデパンダンの役員改選があつた。「繪畫部」アガウ

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

シユ。アマン・ジヤン。モリツセ。ペロオ。ペナアル。ピロツト。コテエ。ル・シダネエ。ドニス。ダニヤン。ヴウヴレエ。ザネエ。フリアン。ジエルエ。ゲキナアル。レルミツト。マセイ。メナアル。モントナアル。ジヨルジ。ピカアル。ラフアエリ。ルヌアアル。リリセン。ロル。シモン。(補缺)プリネ。ムウニエ。オープエルタン。ル・ガンダラ。ウキレツト。「彫刻部」バルトロメ。ダムプ。デボア。アンヤルベエル。ルノア。ロダン。ゾ・サンマルソオ。(補缺)オ、ベ。ロシユ。プウルデル。「彫版部」ルベエル。パンヌマケ。ワルトナア。「建築部」ゾ・ボオドオ。プリユメ。(補缺)ヤキユモナ。「裝飾藝術部」オオベエル。ダムムウズ。(補缺)エル・ニエエ。ヅラエルシユ。

マキシム・ゴルキイが伊太利亞から露西亞に戻つた。

ウキリヤム・モリスの夫人がなくなつた。ミセスモリスは故ミセス・ロセツチと共に英國(藝術界)で名高い美人だつた。

編輯室にて

同人

1

紅雀が啼いてゐる。金絲鳥が啼いてゐる。きれいな可愛い紅い衣裳をつけた紅雀は東の窓の方でたんぽぽ色の衣裳つけた浮氣者の金絲鳥は露臺(バルコン)のある窓の方で。私は可愛いこの小鳥の仲間になつて編輯記事をかきだした。

この月の編輯は仲間の人達の都合で私ひとりでやつてしまつた。その都合てのはあとにかいてあるやうな事情で。それで本月の番紅花にいけないところが有つたりつまらなかつたりすれば、それらの責任はみんな私の責任になることばかり。よくその邊の事を含んでおいてほしい。

いつもは六人の仲間が集つて次の雜誌の編輯會議(そうだん)をすることになつてゐる。

それがこの月は出來なかつた。來月からはきつちり六人が集つて相談しあつて仕事を搬ぶようになるから、きつといいもの

になる事と信じてゐる。それに五月（メイ）は私達の好ましい時なので五月の番紅花を出來るだけよいもの、香はしいもの、美しい、手觸のなつかしいものに作らうと思つてゐる。

表紙は宮本憲吉氏が是非違（ちが）つたのにしたいと、先達三笠で話してゐられた。表紙は氏の木版畫になる。色彩は三色の版になる。併しそれより版かずが加はるかも知れない。とにかく非常にいいのをして下さることになつてゐる。扉繪もカツトもみんな等しく出來てくる。

これらの五月の衣裳はみな愛する五月（メイ）のために捧げるものなのだ。寫眞は歌劇と劇のが八枚ほど挿入する。

まだ仲間（クルジヨーク）のHもKもOも來ない。「ピエールとヂヤン」の八木さんが金絲鳥のゐる露臺のそばでだまつて雜誌をみてゐられる。それつきり。私の仲間はまだ來ない。Mはあすが舞臺稽古だから到底だめ。きのふの夜日比谷でHと歩いてゐる後から不意にMに呼ばれた、その時の短い時間の會話だけからみても到底だめ。

2

よく啼いてゐる。紅雀と金絲鳥（カナリヤ）が。なんと云ふ優しげな可愛い啼きかただらう。この前にゐた紅雀の奥さんが死んでしまつてゐるので小さなその巣のなかに行儀よくちやんと赤い嘴と可愛い優しい眼を列べてみることが出來ないが淋しい。金絲鳥の家にはたんぽゝ色のがひとつと、もう一羽のは鶯とカナリヤのあいのこのやうな色の羽をもつたカナリヤがゐる。そのカナリヤは啼くときはたんぽぽ色の衣裳つけたカナリヤよりよく啼く、きれいになく。だけど私はたんぽぽ色の羽をもつカナリヤが好き。浮氣者のカナリヤが好き。なんともいいやうのない可愛いさをもつ紅雀が好き。小さなつぶのすみきつた寶石のやうな眼をもつてゐる紅雀、紅ルビーを嵌めてもらつて歌をうたつてゐる優しい紅雀が好き。――みんなよく啼いてゐる。東の隣に住んでゐる紅雀、露臺（バルコン）に家をもつてゐる浮氣者の金絲鳥。春がきてゐると云ふのに、それでもその家と巣から出ることも出來ないのに双（ふたつ）の小鳥はよくないてゐる。可愛い小鳥、優しい仲間。

浮氣者のカナリヤ、私の好きなカナリヤ、たんぽぽ色の衣裳をつけてゐる好きなカナリヤ。ちんからころと啼いてゐる好きなカナリヤ。ももいろの光つた美しい嘴をもつてゐるカナリヤ。おしやべりだけれどかしこい眼をした可愛いカナリヤ。柔いすぐいろんなことに心配したり怖しがつたり小さな涙を出す

やうなおさなしい心持とすぐに顫える柔い胸毛をもつてゐるカナリヤ。私の好きなたんぽゝ色の衣裳をつけたカナリヤ。情のふかさうなカナリヤ。ようすのいいカナリヤ。眞當になつつこい私の好きなカナリヤ。紅雀。眞紅い衣裳をつけてゐる紅雀。小さな小さな紅雀。こどもだかおさなたか解らない小さな賢(かしこ)い紅雀。愛嬌をまく、春がきた ないそな ないそな紅雀。赤いみがきあげた美しい嘴の紅雀。眞珠をちりばめたやうな模樣をつけた紅い衣裳の紅雀。可愛い小さい指と赤いきれいな爪をもつ紅雀。ほんとに可愛い紅雀。東の窓に家をもつ紅雀。私の好きな紅雀。

ないそな ないそな春がきた。私のなつつこい小さなお仲間、春がきた春がきた。もつと高く歌はなければいや。胸毛をもつともつと優しう顫はせて。

ないそな ないそ可愛い小鳥、私の好きなふたつの小鳥。春がきた春がきた。お前の巣にも春がゐる。

3

音樂會をこの月することになつてゐたけれど五月(メイ)と云ふいゝ名前をもつてゐる時がすぐにみえたので五月にすることになつた。――五月の上旬、帝國ホテル土曜日の晩七時半から九時半まで。――非常に立派ななつかしい大音樂會になる。それぞれ一流の音樂家に今交渉してゐる。

私達の好きな管絃樂(オーケストラ)を上野音樂學校に求めてゐる。この交渉はまだ正式には搬ばないけれど近いうちに交渉することになつてゐる。私達はそれが許されることを切望するものである。愛する音樂學校の管絃樂の、私達の美しい音樂會にまで許されることがひたすらに祈られる。

その音樂會が最も、よい最も尊嚴(クルジユーク)なそしてなつかしい、美しいもので成功することを仲間のみんなが希望してゐる。いづれ切符は四月中に樂器店や書店やいろんな方面で賣るやうになるだらうと思つてゐる。

音樂會のビラは宮本憲吉氏にお願ひする。

番紅花の音樂會は番紅花の紀念祭のためにするものである。

愛する五月に。(校正室の午後一時リッスラー)

K(神近さんを指す)の病氣も隨分心配になる。Kは精神過勞だといつてゐる。そしてともするとすぐ起き出してあぶない藝をやり出すのでまた身體の容子があと戻りする。Kは自分で生活をしてゐる。そして自分の仕事に於ては全く忠實で熱心だ。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

あんまり勞働がすぎたやうだとKがいつてゐたが眞當にさうなのだ。

Kは病氣になつてゐても夫人（あとで白人の群とかへた）の原稿をかいてゐた。だけどどうしても身體がいけなくなるので今度は出すことが出來なくなつたので非常に口惜がつてゐる。だけど自分の身體と引換にすることは絶對にいけない。

白人の群の代りに華果の木陰を送つてきた。これはあんまり遠くないときの創作なのだ。

哥津ちやんのおその久美次も流れてしまつた。これは雜誌社の仕事の上からみると大變によくないそして困る問題だけれど然し哥津ちやんの爲を眞當に思つてみると私は大變によい現象だと思つて哥津ちやんのために實は心ひそかによろこんでゐる。

哥津ちやんは今迄どんな原稿でもすぐかけたのださうな。それが今度はじめて長い間外にも出ずに室にゐて一生懸命に三四十枚かきつづつたところがそれからさきがどうしても書けなくなつたのだそうだ。そうしてその日から數へて十日位ひは家の人ともまるつきり口をきかずに息のつまる位考へてゐたのだけれどだんだん解らなくなつてきてどうにも手のつけようがなくなつた。

そしてもう自分はこれでなんにもかけずに終つてゆくのぢやないかしらと淋しい心持がしてよく泣いたさうだ。それから、もう書くと云ふことをよしてしまふとかいつてゐた。だからそれぢや哥津ちやんは尼さんにでもなるのと聞いたら、おいやだあゝだれが尼さんになんざあなるもんですかといつてゐた。

とにかくなにしてもこれは哥津ちやんの正直な告白なんだから私は大變によろこんでゐる。私は自分の生活に對してみても友達の生活になんか心配してゐる資格はないけれど哥津ちやんの生活法についてはいつも心配してゐた。それは決して哥津ちやんの生活法がみてゐてあぶなつかしいからと云ふのではない。あの人の生長と云ふ道程から見守つてゐるとあの人の生活がもう少しどうにか變つてゆけばあの人自身がどれだけ餘計に發達して安心してゆけるだらうにと云ふことを考へてゐたからなのだ。あの人の生長、あの人の生きると云ふことの利害から見てゐることなのだ。それで私は今度の哥津ちやんがおその久美次がかけなくなつたと云ふことはあの人の藝術的生活に大きな變化が起こつてきたのではないかと思つてゐる。そして慾を云へばあの人の外的生活だけではなくあの人の精神的にまでなんかの革命（といへば哥津ちやんはびつくりするかもしれな

いけれど）が行はれてくるのぢやないと思つてそしてそうなればあの人のためにこのまいいつたやうな理で最も悦ばしい事柄であると私は考へてゐる。

雑誌の仕事としてみるとやつぱり大きな損失とでも云ふのだろう。

いづれこのことに立入つた細いあの人の心持は自分で六號でかくことになつてゐる。

松井さんの原稿はまたいけなかつた。これは半分はあの人の意志にまかせておいた。そしてあとの半分はこちらの方でだまつてゐた。

藝術座が分裂した――これだけのことで松井さんはさぞいそがしいだろうと同情した。そして氣がいらついて、雑務があつて、そのなかでの稽古がある。それについての又雑務が出來るとてもこんな事ばかりで原稿なんか手につかないだろうと思つたので強い催促もせずに別れてきた。

本月の番紅花には劇の寫眞だけ五枚入れるつもりで早くから松井さんに話してゐたんだけれど編輯室にきてもすぐ歸つてしまふので落附いて追求することも出來ないし、そしてまた運惡くこちらから訪ねることが出來なかつたので手紙で交渉してもその時頃から分裂と云ふいやな騒ぎがあつたので遂ひ返事もおくれがちだつた。

こんな風で遂々松井さんの原稿も劇の寫眞もだめになつた。もう少しすればきつと芝居がすんだ頃に氣長くしてゐる仲間のところへあの人自身でもつてきてくれるようになるだろうと思つてゐる。

原さんが三月十二日の夜新劇社の音樂會をすましてすぐ急行の終列車で上野を立つて故里青森に祖母を訪問した。

上野を出るとき同じ列車の箱のなかに人相のあんまりよくない男が同乘してゐた。その男は人相が少し思はしくないけれど私は衣服やそれから眼つきや荷物の容子からしてどうしても田舍の村長か村會議員位ひだろうと思つてゐた。そしてそんなにまで芝居じみて考へてはしなかつたけれど、少し位ひ芝居がはじまつたらと云ふ不安は有つてゐた。

原さんはその日奇麗に高島田にいつてゐたので、そして夜汽車の獨旅なので、遂いそんな心配もしたくなつたのだ。

汽車の出る間近になつて傍によんであの男は少し人相がいけないと云ふことに依つてみんながあなたをもしやと云ふことを懸念してゐますからよく注意なさいといつたけれど後で考へて

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

みると不安さの影から可笑しさがこみあげてくる。

あとで郷里からのはがきに、あの男の人はなんでもなかつた。安心なさい。あの人は中學校の先生でした（といつて別段にきいた理ぢやありません）。

汽車がいつてしまつてから薄暗いプラットホームを村田實少年と原さんのマザーと片山の叔父さんと歩きながらもしなんにもなかつたとするとあの男の人には氣毒な理ですれ。然し人相だけはよくして生れてくるものですれといつて大笑ひした。

歸省した月の廿日に戻つてくる筈だつたけれど淋しかつたとみえてそれにやつぱり急ぎの旅だつたので十八日の朝六時二十五分に歸京。（リツスラー）

私の好きな人ばかりが停車場まで送つて下さつたのでほんとうに嬉しかつたのです、けれど演奏會がすんだばかりでしたから相變らずぼんやりして居りましたの。

あの室には私とあと二人、向ふ側にいたあの鳥打帽子から急に角帽に換へた若い人は小さい灯をむりに使つて英字新聞の廣告ばかり二三時間にらんで居たやうです。

K樣の可愛いゝ妹さんが注意して下さつたあの人相の悪るい男、私もなんだか氣になつて成るべく狸れいりして耳をすまして居りましたの、どこだか知らふとも致しませんでしたが上野から三時間程の處へ五分ばかり停車しました時だれかあの人を訪れましたそして其二人の話でやつと安心しました、たしかに中學校の先生樣と分りましたから。

私はあまり安心したのか白川あたりは少しも知らず通りました。

雪に殘つている山々を見て私の生れたあの小さい町に行く時乘りかへた小さい汽車の眞中にストーブのあるのを見たらなんだかおもちやの汽車でシベリアを旅行するやうな氣がしました。（演奏會の後上野から古郷まで）

夢のやうにおぼへて居る町は最都と變らないやうになつた處もあります、私は古い町がなつかしかつたのです、私があの町を通る時皆が喜んで私をむかへてくれましたそしてめづらしさうに見ているのです。

私はあの飾らない町の人をめづらしく思つて見たのです、あの白色人種のやうな美しい顔色を私の白粉や紅はほんとうにはづかしかつたので、（古郷の町）

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

私は生れた家が古いお寺のやうな感じがしましただけど古い燈火をすてゝ電氣燈に換へた事を惜しむのです。

たれが手植えたか庭の小菊が時しらずさびしく咲いているのです。主が今かへるの知つていたのでせうか。（生れた家）

私は毎日歌ふ事が出來ないと云ふことは毎日自分の身體を半分づゝ削られるやうな氣がするのですどんなに苦しいか分りません。

私はすぐ歌はれる處が戀しくなりましたそして祖母の病氣を忘れ無情と云ふことばを聞きながら可愛いゝピアノの自分の部屋に思ふ度け歌ふために（歌ふ家）

マリー

先月豫告をしてをいたおその久美治はかけませんでした。それであたしが生れてからしたことのないやうな苦勞をしてゐるうちに世の中は梅がちつて柳の青い春になつて了ひました。

かうやつてあたしがつまらない〱と云つてゐるうちに、二月、三月、四月と、日がどん〱流れて行つて了ひます。この頃はいつになく、一日がたつので悲しいやうな心細いやうな氣がします。

まあいつになつたら、いゝものが書けるんですか――考へて見ると情けよくなつて了ひます。（哥津）

先日某演奏會のため日本で有名なバスの歌手某氏にお願したさうですところが其返事に「私は此度出演される人々のやうな專業の人と共に出演するのは自分の欲する處ではない」からと云ふのでしたさうです、私はこんな事實を度々聞きますそして非常に悲しく思ひます。

專業の意味がよく分りかねますが他の出演者を考へて見て私はこう云ひ度いのです。

夢のやうな話ですがもし今日本にカルソーでもメルバーでもお前を教へてやらふと云ひましたらどう返事をするでせう、ヨーロッパもアメリカも金持です今の日本はどうでせう。

私は藝術は金に重きをおくものではないと信じて居ります、オペラを歌ふ者は私どもの云ふオペラシンガーでせう、音樂は感情のものだからむりに歌へないとも云はれるかも知れませんがそんな小さい事に捕はれた藝術はどうなるでせう。（マリー）

灰色の空はどんよりしてゐる、まだ花は咲かないけど、こんなのが花曇りとでもいふのであらう。もう蕾は紅くふくらんで

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

今にもほころび相だ。お濠端の柳の並樹が、さ青い稚々しい色をして煙つたやうになびいてゐるのを見るのはたまらなく嬉しい。でもそれが何時の間に恁うなつたのか、ちつとも知らずにゐるのだから可笑しい。何時の間にか風が冷たくなくなる、黄ろい草の下から新らしい生命が萌えて出て、若い力でぐん〳〵と伸びひろがる。

春が來た、春だ、春だ、全このものが誇らし氣に輝やかしげに春の光りを一杯に吸つて匂やかに笑んでゐる。「何處かへ行きたいな」いつも口癖のやうに恁う言ひながらも滅多に「何處かへ」行つたことのない自分も、今こそ何處かへ行かなくてはならないやうな氣がする。

みづ〳〵しい雜草がやはらかに萌えて、名も知らない白い花がつゝましく微笑んでゐる、蘇生つた春の樹が勢一杯に枝を伸ばして大きく息づいてゐる、何處とも知らず可愛い小鳥がチユク〳〵と微妙しい歌をうたふ、曠い原だ、自分は一人きり、その曠い野に寢ころんで、身も心もゆつたりと何物にも煩はされず、何をも想はず考へずにゐたい、そして自然と一つになつて思ふさま生の歡喜を味ひたい、ほんとの一人をよろこびたい。一人が何であらう、寂しくはない、一人でゐることが一番賑やかなことなのだ、一人が寂しい人は、幾千幾萬の人の中に自分を置いてもやつぱり寂しい人なのだ、其人は自分をもつてゐないのだから——機械の音、車馬の響き、いろんな騷音がゴシ〳〵と頭腦に押し込んで來る印刷所の階上で、私はなつかしい追憶に耽りながらあの野のことを思ひつゞけた。そしてこんなことを思つてゐた。

紅雀（リンネット）がさぶ、カナリヤが啼く、室の中は靜かだつた。

博覽會見物に田舍の人がいくらも〳〵出てくる、あの人たちは東京をどんなに好いところと思つて來るのだらう。きつと私たちが大きな期待をもつて面した新らしい經驗から、何時でもうけとらねばならぬやうな、幻滅の遣瀬ない悲哀を感じなければならないことであらう。驚異の眼を瞠つてキヨト〳〵とあたりを見廻はしながら慌たゞし氣に、そして呆然と、街を行く田舍人の群を見る毎に私はさう思はずにはゐられない。

毎日新らしいものを覓めて生きてゆく——私たちの覓めるものは何時でも先きに先きにある、覓めることが私たちの生命なのだ、私たちの生活に滿足はない、滿足がないから希求がある、希求があるから努力が要る。私は日々 Unknown New を覓めて生きることを喜悦とする、それが眞に生甲斐のある生活なの

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

だから。

満足は倦怠である、倦怠は死である。何時までも私は満足したくない。(鹿)

どうしたと云ふのだらう。とんまの機械とみえて校正がちつとも出てこない。いくらなんでも朝からつづけて紅雀や金絲鳥の相手ばかりぢやたりない。やつぱり校正にきたんだから校正がどんどん出てくれないとつまらない、倦きあきする。なんつてとんまの機械なんだらう。

居留地の尖つた建物が遠くにみえる。日が消えてゆきそうになつてゐる。暗い、暗い。つまんない。外のみえる露臺（バルコン）にさつき立つてみてゐたら、どこの馬鹿だかしらないが、深山の子供にかこまれて水道の栓の下に頭をつき出して冷い水を子供の群にかぶせられて泣いてゐた。あの白痴の兒、ばかの兒、阿呆の兒、そんなことを人からされても逃げると云ふことも、その子供の群をなぐりつけると云ふことも、そんなことより征服すると云ふことを知らない阿呆な兒、馬鹿な兒、白痴の兒。

とんまの機械、阿呆な兒、なんにも仕事がないのでぶりぶり怒つてゐる自分。けだるい午後三時。

きたない子供ばかり遊んでゐる。ふるぼけた建物の教會の前で。ペンキのはげかかつてゐる教會堂の前で。賢い顔をしたことのないきたない子供ばかりがやがや動いてゐる。つまらない午後三時。つまらない午後三時にぼんやり倦いて怒つてゐる自分の顔、とんまでのろくて、怠けものの工場の機械、それにさつきの白痴の兒、私の頭はどうかしてゐる。――怒つてゐることだけは眞當だ――

東西屋がきた。いろんな雜ぱな聲を出してやかましく過ぎてゆく。きたない子供がぞろぞろとその後について。米屋の亭主も、肥つたそこの女房も白い顔したそこの小僧も出てみてる。

赤ん坊の紅木綿の衣物や小さな、むつきのほしてある米屋の物干臺から、黒い猫がとび出した。

チョンチョンと拍子木がなる。トーザーイとどなる。ドンドンと太鼓の相方がなる。なんの廣告だかきこえない。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

さつきの白痴の兒がまた。やつてきた、米屋の店のメリケン袋のすみに入つて馬鹿の唄でもうたつてゐるらしい。シヤモが阿呆な兒を嘴でつつき出した。阿呆はまた泣きだした。

阿呆、阿呆、お前はシヤモにまで馬鹿にされてゐるんだ。阿呆だれ、だけど可哀そうだ。

きたない子供がまた戻つてきた。黄色い紙をもてるだけ意地きたなくもつて。白痴の子、白痴の子早く逃げろ、せめてお前が逃げることだけでも知つてゐるならいいのに。泣くことを知つてゐる白痴の子、まつぴふ、まシヤモにつつかれて泣いたメリケン袋のかげの白痴の子。

十字街をまつすぐ、こつちにこずに活動寫眞の音隊がきた。どんよりしたこの日の午後、私のぷりぷりしてゐるこの日の午後赤い服をきたクラリオネツト吹き。――コールネツトの若い男――子供は走つた。がきさいいたいような子供がはしつた。白痴の子はやつぱり、ぽかんとしてゐる。馬鹿の歌をうたつてゐる。

もうすぐだ。もうすぐだ。私はくろ仕事が待たれる。もう疲れた。疲れた。もうかくのもよす外をみるのもよす。何口から汽船の笛がきこえる。町は騒しい、こうして夕方になるんだ。

私はリツスラーと云ふ名前をみつけた。これから私の小さな別の名をリツスラーと云ふ。

校正の出るまで。オダケ・カヅエ

寄贈雜誌

白樺、エゴ、假面、音樂、早稲田文學、我等、アララギ、六合雜誌、心の花、ホトトギス、生活と藝術、未來、新思潮、新佛敎、青鞜、塔・蛇の舌、美術週報、祇園、鳥羽野、コスモス、郷土、その他。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

謹告

編輯に關する用件及寄贈圖書雜誌は左記宛に御願ひ申上候

東京市下谷區下根岸八十三番地
番紅花編輯所

■本誌定價　一册金參拾錢（郵税一錢五厘）
■前金購讀料　（三册分）金九十錢　（六册分）一圓八十錢　（十二册分）金三圓六十錢、郵税は發行所に於て負擔す。
■廣告料　普通一頁　金拾五圓　特等　金貳拾圓

大正三年二月二十五日印刷納本
大正三年四月一日發行　（毎月一回一日發行）

禁轉載

編輯兼發行人　東京市日本橋區檜物町九番地　西村辰五郎
印刷人　東京市京橋區新榮町一丁目二十一番地　佐藤保太郎

發行所　東京市日本橋區檜物町　電話本局一八七一番　東雲堂書店　振替東京五六一四番

文祥堂印行

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

PIANO

英米獨佛の「ピアノ」金五百圓以上金二千圓迄二十三種
日本製「ピアノ」金百五十圓以上金四百三十圓迄六種
舶來中古「ピアノ」金百二十圓以上金四百八十圓迄七種
合計三十有餘種取揃陳列致し有之候間何卒御來觀被下度願上候

▼營業品目▼

●西川オルガン
●鈴木バイオリン
●ギター
●軍樂隊用樂器
●管絃樂隊用樂器
●ピクタア蓄音器及西洋曲、日本曲音譜盤●ニツポノフオン蓄音器及音譜盤
●和洋音樂書類●ピアノ調律修繕
●舶來バイオリン
●舶來マンドリン
●バンジヨー
●ハーモニカ
●手風琴

東京市京橋區銀座三丁目二番地
十字屋樂器店
電話京橋壹二五五、二八八四

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

時機に編輯宜しきを得たる特別號

文章世界

第九卷第四號

倍大號　菊判四百六十頁　口繪寫眞版豐富

本號に限り正價四拾錢　郵稅四錢

四月一日發行

創作

□挿話……正宗白鳥
□姙婦授產所（喜劇）……長田秀雄
□怨まれて……小川未明
□白い壁……上司小劍
□蒲公英の花……小山內薰
□汽船……加能作次郎
□腕……田山花袋

詩歌

高村光太郎
土岐哀果
加藤介春
萩原井泉水

上京當時の回想……森田草平

寢臺（飜譯）……クウプリン

春の印象

有島生馬
西村渚山
鈴木三重吉

評論月旦

□時評……長谷川天溪
□漱石門下の人々……三井甲之
□南の窓より……片上伸
□三月の文壇……岩野泡鳴
□最近詩壇の觀察……人見東明

附錄

現代文士錄
美術家錄
最近一年間の出版文藝書索引

東京・本町・博文館

京都帝國大學文科大學教授　文學博士上田敏先生序
京都第三高等學校講師　マスター、オブアーツ　エドワアド、クラアク先生序
慶應義塾文科大學教授　川合貞一先生序
慶應義塾文科大學教授　永井荘吉先生序
慶應義塾文科大學教授　馬場孤蝶先生校定
波斯詩人　オオマア　ケエヤム原著
與謝野寛先生跋　片野文吉先生遺譯

ルバイヤット

三色版古書及故譯者肖像畫挿入
クロース綴裝幀頗優美典雅
紙數五百有餘頁　新式箱入
全一冊
定價金　壹圓參拾錢
送料　內地金十二錢
朝、臺、樺　滿　金卅五錢

現代各國に於て飜譯せられ而も幾多の熱烈なる崇拜者を生ぜしめたる
世界的大作である。
沈痛と**放恣**と**華麗**とを極めたる古代東洋の雄編——
酒と**薔薇**と**佳人**とを讃美せる波斯の古詩四百六十六編
は玆に始めて紹介せらる。

而して故譯者が畢生の熱血を注ぎ此が譯述の爲に遂に病を起して斃る
純潔熱烈なる**至情**と**壯烈**なる**努力**とが如何に
本書の面目を躍如せしめたるか、本書自ら此を語つて居る——

東京市神田區北神保町十三番地　**開文館**　振替口座東京一四〇七番

新刊

平塚明序
伊藤野枝譯

■婦人解放の眞意義は果して如何？■

婦人解放の悲劇

婦人を解放せよ、婦人よ自覺せよ、婦人よ、天賦の才能を發揮せよといふ叫びはただ漠然と聞へる。この時に當り歐米先進國の婦人はその所謂解放の第一歩を實現した。そしてその結果はどうであつたか。彼等は更にその第二歩の解放に入らざるべからざる窮境に陷入つた。本書、エンマ・ゴルドマン、エレン・ケイ二女史の論文四種を譯輯せるもの、最も健全にして理解ある兩性問題の解決である。既に我等に用なき因襲の羈絆を脫して女性本然の光輝ある生活に入らんとする勇氣ある女性、及び理解ある男性の一讀を切望す。

附錄

エンマ・ゴルドマン小傳
エレン・ケイ小傳

菊半裁二百七十頁頗美本
二女史肖像寫眞版挿入
定價金六十錢・送費六錢

■茲に健全なる兩性問題の解決あり■

發行所　東京市日本橋區檜物町九
（振替貯金東京五六一四）
東雲堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

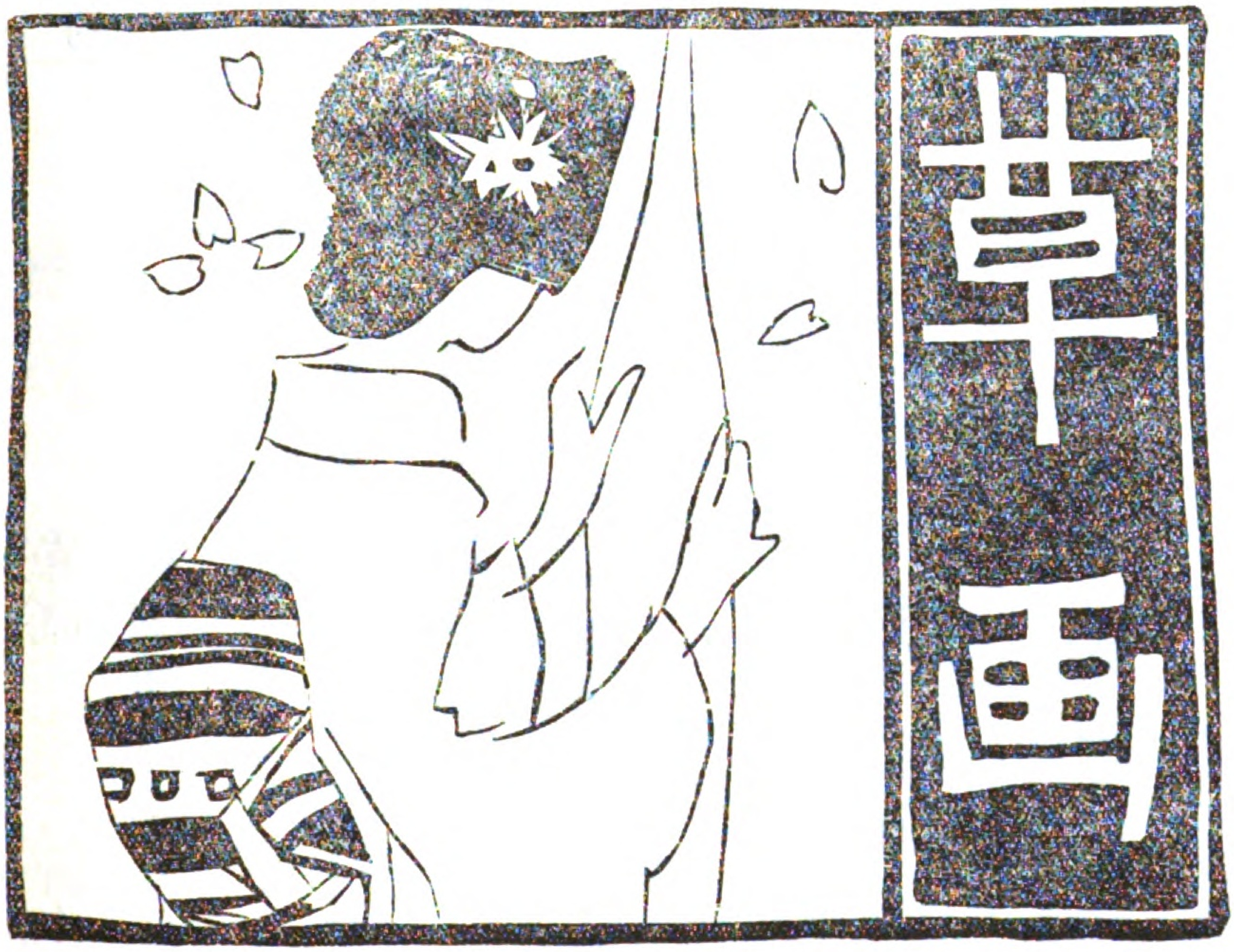
月刊 生活と藝術 雜誌
四月號
第二年 第四號
價十八錢 郵稅一錢

内容

童謠……土岐哀果
新劇團のかうなる迄……伊庭孝
消へゆく雪……窪田空穗
九官鳥……西村陽吉
東京の櫻……大熊信行
生活態度としての未來主義……仲田勝之助
山宮允氏に問ふ……安成貞雄
綺語と眞實……園三千夫
現實の行進……加藤一夫
北米より……阿部幹三
新しき歌……青年百餘家
MEMO……哀果生

發行所 東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四）東雲堂書店

□竹久夢二氏作□



■菊判洋装美本　定價九拾錢郵税八錢　三色版口畫入■

□作者の自序に曰く『草書が日本の造形美術の上に確然とした一の分野を持つたことは事實である』『紙や筆や版木にかなり古い歴史をもつた日本人がこうした藝術品を世界に出すことは愉快な事である』『和歌や俳句のやうな短い詩形に自然の一角を發想してゐる日本に、草書の生れるのは當然であつた』とある。

□此の作者は、櫻さく東の三味線の國に生れたコスモポリタンである。作者がはてしなき世界の放浪の間に、日本の白い柔かい紙に、日本のたゞ一色の筆で發現した、一この奇しき藝術品は、また世界に誇るべき不可思議さを持つてゐる。我々はまづ日本人としてこの作者の『自書像』だと稱してゐるこの草書を見ねばならぬ。

東京市淺草區柳橋通り
發行所　岡村書店
電話下谷　四二〇四番
振替東京　一九〇六五番

文學士 阿部次郎著

—新刊發賣—

三太郎の日記

新形頗美本
紙數六百頁
定價金壹圓
郵税八錢

「三太郎の日記」は阿部君の内生が底力強く成長して行つた記錄である。阿部君は此記錄を造る時に、内に渦巻く者燃え上る者を鋭く分拆することが出來た。此表現の能力と深い本質的な内生とは眞正の哲學の根本條件である。「三太郎の日記」を心讀する人は、そこに偉大なる哲人の力强い芽生が、——刻々として伸び行く偉大なる芽生が、閃光的にしてしかも形式の嚴整な、陰影濃やかにしてしかも線の太く强い、驚くべく立派な形に現はれてゐるのを見るだらう。三太郎は過酷に見ゆるほど自己に誠實である。三太郎の言説の力强いリズムは、三太郎が自ら知らうとはしないその偉大な運命から湧いて出る。彼と共に心の渾沌を切り開き、彼と共に苦しみ怒り歎ぶのは、やがて人性の深味への突入である。（著者の友人の一人）

■附錄■ 若きゴオホ・ゴオホの藝術

發行所 東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四番） 東雲堂

三木露風著

新刊……

露風集

著者が第一の撰集にして、曾て公にせる「廢園」「寂しき曙」の二著及右二著に洩れたるものを拾遺して、この一册を編めり。明治四十三年前後即ち「寂しき曙」の時代は著者が人生の最も悲しき方面に足を向けしめし頃にして、今日の象徵の作風はその頃の感情に根をおけりと著者はその序に語れり。「廢園」時代は著者の最も若やかに純なりし時代なり。

阪本繁次郎裝及畫
新形裝幀頗華麗
總洋布函入挿畫一葉
定價金九十錢
送費八錢

再版……

白き手の獵人

本書には五十餘篇の詩、七篇の詩論を收めたり。未知の世界に對する郷愁、精髓に達せんとする努力、著者はこれらを最も力强く謳へり。而して著者が象徵詩の主張に基く試作とも名づくべきものにして、五篇の詩論は新藝術の未來を暗示せるものなり。

阪本繁次郎裝及畫
四六版天金挿畫三葉
藍地に金の葉を描ける裝幀
定價金壹圓
送費金八錢

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四番）　東雲堂

■新藝術の烽火■

未來

I

三月十五日第一輯發賣

菊判五百頁定價金六拾錢送費八錢

■新藝術の使徒■

詩集

五十六篇

女性外九篇……三木露風
手を伸ばせ外八篇……川路柳虹
雪景外十一篇……柳澤健
知見の塔外一篇……山宮允
To R. M. 外二篇……SABURO MASINO
狂氣外七篇……新城和一
鷄頭外一篇……西條八十
空外九篇……服部嘉香

■詩歌の象徴（イエーツ）……山宮允譯
■ウイリアムブレークと想像（同上）山宮允譯
■ピアニスト●バッハマン論……柳澤健
■縁に搖る空へ（戯曲）……灰野庄平
■分裂（小說）……新城和一
■智慧樹（東方劇詩）……增野三良
■領土（小說）……西條八十
■醉ひどれの船（ランボオ）……柳澤健譯
■タゴーレの詩……灰野庄平譯
■アルベエル●サマンの詩……新城和一譯
■リズム論……服部嘉香
■ヱルハアレンが詩の徑路……西條八十
■製作……川路柳虹
■見、不可見……灰野庄平

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一一四番）　東雲堂

重版の名著

國木田獨歩著

獨歩詩集

▲再版發行▼

吉江孤雁氏序
三木露月氏跋
岡落葉氏裝釘
菊半截形總洋布
定價金七十錢
送費六錢

予は詩人也と常に稱してゐた故獨歩氏のたゞ一冊の詩集である。その詩醇正素朴眞摯なる著者の心情が、讀む者の胸に犇々と迫る。氏の面目を窺ふに最もよきものである。

石川啄木著

啄木歌集

▲四版發行▼

一握の砂
悲しき玩具　合冊
四六判美本著者筆蹟入
定價金八十錢
送費金八錢

氏の歌集は最もよく氏の一生を語るものである。ありあまるほどの大きな望みを抱いてゐて若年く病歿した力強き天才の嘆きと悲痛が一卷に滿ちあふれてゐる。

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四番）　東雲堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

近刊豫告

現代佛蘭西詩集

リラの花

與謝野寛譯

梅原良三郎畫

現代の佛蘭西詩人中、新進のロオメン、ヴウケエル、ダウリヤツク、シマル、ボルセエ、トルパン、ヷアド女史、ケネアン、トラポルト女史、バンヌロオ、マンダン、メリエ、プロツシユ、テイボオル、ドレエム、アウグマアル、メルシエ、トツサン、ドロマア夫人、バサン、デスプラス、フレミエル、サントクロア、ドクトン、アラン、ビゼ、プツテイ、マルテイネ、ヹシエル、ラヹエ、デイギヤツク、ボルドリイ、サウケ等數十氏の近作を主とし、ヹルレエヌ、ボドレエル、マウパツサン、サマン等の故人、ヹルアラン、レニエ、ノアイユ公爵夫人等の現代名家、及び伊太利詩人ダンヌンチヨ、マリネツテイ諸家の詩篇を此集に收む。是等は譯者が槪ね巴里ラタン區の珈琲店クロツスリイ・ド・リラの一隅の卓に凭りつゝ讀みたるものなれば、記念として「リラの花」と題したり。

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四番）　東雲堂

詩集

かなたの空

未來叢書第一編

四月上旬發賣

川路柳虹著

新しき文藝の曙は來る。窮ら宿命を感じて頽唐の病に居たりし昨日の文藝は亡びざる可からず。著者は寔に生命の曙に立ちてその耀やかしき光輝を呼ばへる第一人なり。眞の生活を愛し、眞の愛を覓めて、なほ杳かなる蒼穹に手を伸ばせるもの、その不斷の欣求と進轉とは明快徹妙の韻律の中に氣息す。この詩集一卷蓋し新興文藝の思潮を暗示すべきものにして詩壇の新聲に聽かんとするものは先づ此の集に就きてその潑溂たる當來を豫知すべきなり。切に江湖に薦む。

四六版三百頁・黑地に金と白の表紙
總カット天金・空前の美術的製本
定價金九十錢・送費八錢

内容

- ■蘆の笛
- ■低唱（小曲集）
- ■伸びゆく芽
- ■内心
- ■かなたの空（五章七十篇）
- ■挿畫一葉（木版）
- ■EX LIBRIS.

發行所 東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四一番） 東雲堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

詩集

果樹園

未來叢書第二編

五月中旬發賣

柳澤健著

著者の第一詩集なり。暮れゆく果樹園の色のごとく、旬のごとき一巻百餘の詩篇は、漂泛果てなき音樂の波のなかに漾へり。その詩風は叡智にして優婉、たとへば薄暮の公園を夢みつゝ歩むかの佳き白孔雀にもたとへつべし。

著者裝幀、四六版三百頁

定價八拾錢、郵税六錢

舟

わが舟はゆられゆられて、
おぼろなる月夜をながる。

大空は月に涵され、
幻と象の世界、
おもかげはうすくかゞやく。

あゝ遠く戀人もあり。
溜息のながきがなかに、
わが舟はゆるくながるる。

發行所 東京市日本橋區檜物町 (振替東京五六一四番) 東雲堂

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

■歐洲美術の一大寶庫・歐洲自然の新印象記■

歐洲美術遍路

下巻出來

四六版三百廿頁
函入天金美裝
定價一圓八十錢
小包料十二錢

■附錄＝美術家人名索引■

畫架を負ふて西遊二年、足跡歐洲各國に及びたる著者の漫遊記也。卓拔なる西歐美術觀也。畫壇の區匠觀也。古美術の新鑑賞也。最新畫派の消息及批評也。新氣運の暗示也。著者が故國の友に與へたる書簡也。著者の詩也。而してまた繪畫也。美術愛好者の必讀書。

石井柏亭著

■上巻（既刊）

四六判三百八十頁、挿畫六十葉
天金函入美本、送料十二錢

定價貳圓

發行所　東京市日本橋區檜物町（振替東京五六一四番）　東雲堂

東雲堂藏版

名著三十一種

日本橋區檜物町九番地
振替貯金東京五六一四
電話本局一八七一

歌集	桐の花	北原白秋	定價金壹圓
歌集	水荘記	吉井勇	定價金壹圓
歌集	別離	若山牧水	定價金七十錢
歌集	死か藝術か	若山牧水	定價金七十錢
歌集	黄昏に	土岐哀果	定價金五十錢
歌集	佇みて	土岐哀果	定價金六十錢
歌集	收穫	前田夕暮	定價金七十錢
歌集	啄木歌集	石川啄木	定價金八十錢
歌集	馬鈴薯の花	柿人・憲吉	定價金八十五錢
歌集	赤光	齋藤茂吉	定價金九十錢
歌集	涙痕	原あさを	定價金六十錢
歌集	早春	岡稻里	定價金七十錢
歌集	かろきねたみ	岡本かの子	定價金二十五錢
英詩集	The Pilgrimage.	野口米次郎	定價金壹圓
詩集	思ひ出	北原白秋	定價金九十錢
詩集	邪宗門	北原白秋	定價金八十五錢
詩集	東京景物詩	北原白秋	定價金壹圓
詩集	獨歩詩集	國木田獨歩	定價金七十錢
詩集	露風集	三木露風	定價金九十錢
詩集	白き手の獵人	三木露風	定價金壹圓
詩集	霧	河井醉茗	定價金五十五錢
詩集	夜の葉	森川葵村	定價金六十錢
小說	青鞜小說集	青鞜社	定價金八十錢
戲曲集	午後三時	吉井勇	定價金壹圓
戲曲集	和泉屋染物店	木下杢太郎	定價金壹圓
論集	演劇新聲	小山內薫	定價金八十錢
評傳	哲人カアペンター	石川三四郎	定價金八十錢
隨筆	局ある窓にて	平塚明子	定價金九十錢
隨筆	啄木遺稿	石川啄木	定價金九十錢
隨筆	歐洲美術遍路 上卷	石井柏亭	定價金貳圓
隨筆	歐洲美術遍路 下卷	石井柏亭	定價金壹圓八十錢

（詳細なる圖書目錄御申越次第贈呈仕候）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

白樺五週年紀念號

四月號

紙數五百頁餘・插書拾八枚・本號特價九十錢也・送料六錢

目次

▲井リアム・ブレーク……柳宗悦
▲Aと運命（對話）……武者小路實篤
▲懷胎（詩）……萱野二十一
▲春の手紙（小説）……園池公致
▲盲目の川（小説）……長與善郎
▲アンリ・ルソーの生涯及び其藝術……田中善作
▲第二の母（回想）……武者小路實篤
▲An Incident……有島武郎
▲旅にて……小泉鐵
▲兒を盗む話（小説）……志賀直哉
▲William. Blake……リーチ
▲リヒアルト・ヌーテル……兒島喜久雄
▲ピザの少女……有島生馬
▲題未定（小説）……正親町公和
▲ロダン翁の展覧會に就てのある風評を聞いて……記者
▲六號詩……無車
▲六號感想……同人

本號挿畫（井リアム・ブレーク）**拾八枚**

發行所 東京麹町區平河町五ノ卅六 振替口座東京二〇九一四番 洛陽堂 電話番町四二五八

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

我等

特價四十錢
郵税二錢

一年分 送料共
金三圓

四月特別號

瀨死の人に（詩）……高村光太郎
歌百首……萬造寺齊
途で會つた人達……石井柏亭
劇場美術……松元苦味
一疋の野兎と一人の外國人（小說）……佐藤春夫
歌三十首……與謝野晶子
佛法僧（小說）……江南文三
眞實と額（小說）……伊達虫子
日本舊劇の未來……森林太郎
水のあたりより
詩……水野葉舟

附錄

戯曲馭者ヘンシエル（舞臺協會四月興行臺本）……秦豐吉
詩……上田敏
シユミツトボン論……茅野蕭々
死の勝利の誤譯問題……綿拔瓢一郎

詩歌

原田琴子
原阿佐緒
三ヶ島葭子
畔蒜こと子
齋賀琴子
長島豐太郎
佐々木好母
柏木松雄
出野青煙
佐藤春夫
内藤鋠策

東京市本郷區駒込林町百九十番地
我等發行所

東京市神田區南神保町十六番地
岩波書店

歌集

萬造寺齊著

彼方へ

五月上旬發行

「彼方へ」は著者が第一の歌集である。絶えず追ひ求め夢み憧れながら遂に何事を完成する事も何物を穫得する事も出來なかつた著者が過去の生活の唯一の收穫でありまた唯一の記念である。

抒情詩社發行

定價三十錢

假面

郵稅金二錢

第三卷 四月號 第四號

挿畫 露西亞近代畫……寫眞版四葉!!

□薔薇(詩)……西條八十
□杉本カッフェ店(小說)……山川亮
□落葉(歌)……沖鹽正光
□覺はれる者(小說)……丘草太郎
□三月海外文藝概覽
□京の一夜(小說)……竹内逸
□遠流の人(歌)……石井直三郎
□遺書(小說)……見留周造
□第二法苑林敎話(詩)……日夏耿之介
評論 日常生活中の悲劇(マアテルリンク)……吉江孤雁

新刊

長田幹彥著

春の鳥

目次
惡緣……曉
雪晴れ……逢曳
解剖室……さすらひ
女の手紙……私生兒

美本全壹冊
定價五十錢
郵稅金六錢

發行所 東京市外西大久保三百十一 假面社

發賣所 東京神田錦町一丁目十九 中興館 振替東京一四一二三番

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

權威ある純女流文藝雜誌

青鞜

小說號

田草取……山田わか
京人形……松井靜代
夜汽車……齋賀琴
蝙蝠……濱野雪
紅き木の芽……川田よし
新しき生命……野上彌生子

附錄 女性に於ける性的轉倒 エリス 野母譯

合奏……國分まさを
佐渡節……安田皐月
別れての二三日……加藤みどり
まどひ……伊藤野枝
編輯室より……同人

■四月號特價參拾五錢郵稅二錢■

發賣所 東京市神田區南神保町一六 (振替東京一九三四四番) 尚文堂

春期 會員募集

青鞜社補助團

□青鞜社補助團は青鞜社の事業を完成せしめんが爲經濟上の補助をなすを以て目的とす。

□甲種會員　一ヶ月會費　壹圓

□乙種會員　一ヶ月會費　五拾錢

□會費は大凡二ヶ年間確實なる銀行に預金し、其後に於て全金額を青鞜社に寄附するものとす。青鞜社はこれをもつて出版事業を開始す。

□本團は會員に對し青鞜社發行の機關雜誌「青鞜」を毎號贈呈す。

□甲種會員には會費全納後滿二ヶ年間雜誌「青鞜」を贈呈する外に、二ヶ年後に於ける青鞜社出版の圖書を其都度贈呈す。

□乙種會員には滿二年間雜誌「青鞜」のみを贈呈す

□本團員は甲、乙に拘はらず女子に限りて「青鞜」に寄稿し得るの特權を有す。
但し寄稿が二回以上「青鞜誌上」に掲載されたる場合は本人の希望により相當の手續きを經て青鞜社の社員たることを得。

□入會申込希望者はハガキにて府下巢鴨町一二二七青鞜社内補助團宛申込まるべし。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

四月一日發行

アララギ

定價金二十錢

第七卷四月號　第四號

□茂吉に與ふ……長塚節
□千樫に與ふ……長塚節
□愛蘭物語（イエーツ）……山宮允
□短歌雜論……齋藤茂吉
□愚人の偶語……赤木桁平
□偶感二則……平瀬泣崖
□目白にて（感想）……青五
□草木信念（詩）……室生犀星
□闇深く（短歌）……島木赤彦
□雜詠（短歌）……尾山篤二郎
□三崎客中作（短歌）……西村陽吉
□白楊の花（短歌）……土屋文明
□このひごろ（短歌）……原あさを
□山の春（短歌）……中原じづ子
□眠り（短歌）……中村憲吉
□桃の花（短歌）……古泉千樫
□アララギ歌壇……諸同人
□アララギ漫錄……同人

短歌

並木秋人　兩角七美雄　岡千里
都會詩人　飯山津涙男　守屋其翠
藤木誠　吉川かすみ　篠田祥治
土田耕平　河野愼吾　筑波子
清水謙一郎　加藤雪鷹　早川孝子
平沼ひさし　柳本城西　金原よしを

□同人募集□

東京本所南二葉町廿三古泉千樫方
アララギ發行所

心の花

第十八卷　四月號　第四號

大川の水　柳川隆之介
呪咀（小說）　吹田蘆風
萬葉集講義　佐々木信綱
新百人一首新釋　志田義秀
伊万里の皿　片山廣子
猿　三浦守治
街に出て　吉野臥城
酒甕　原田謙次
青き落葉　阿部たつを
熔岩と蜜柑の枝　名越那珂次郎
西片町より　佐々木雪子

定價一部金二十錢・半年前金一圓・一年前金二圓・郵稅共

東京日本橋區　竹柏會出版部　本石町一ノ一

電話本局五一七〇番　振替東京四三〇〇番

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

第二十卷　第四號

帝國文學

四月號

定價金二十錢　郵税一錢五厘

△二つの道（評論）……石坂養平
△講演旅行（小說、ハムスン）……西澤富則
△海鷗（戲曲、チエエホフ）……伊東六郎
△女流作家の心境（評論）……川島風骨
△小說家としてのショウ（評論）……石本笙
△劇場論（評論、イエエツ）……山宮允
△心と心（詩）……江中鐵
△太陽と紅雀（詩）……澤木茂正
△影、ひとり、春歌曲（短歌）……虎男、賢、龍雄
△三月の劇壇（時評）……久米正雄
△三月の文壇（時評）……山田檳榔

京橋　大日本圖書株式會社　銀座

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

毎月一回

音樂

第五巻第四號

一日發行

四月號要目

□樂壇時評 ……
■人生の解 ……
□聲詩に於ける語句の三形式 …… 吉丸一昌
■樂律構成器の改良 …… 田邊尚雄
□ワグナーの見たるベートーヴェン …… 小田島次郎
■音樂敎授法（八）…… 草川宣雄
□田邊氏に音階構成器の疑問を質す …… 細谷陸郎
■津輕地方の俗謠（三）…… 金健二
□倫敦より …… 太田黑元雄
■赤い襟（歌）…… 嵯峨秋子
□黃ざくら（歌）…… 永田龍雄

口繪

樂譜　東京音樂學校寄宿舍々歌 …… 吉丸一昌作歌 本居長世作曲
口繪　マイスタージンガー
逝ける友

□海のセレナーデ（歌）…… 美輪子
■美しい泡（詩）…… 高辻秀宣
□スフィンクスの洞（詩）…… 坂本潮郎
■黎明の鐘（詩）…… 津端修
□渚（詩）…… 村山至大
■ためいき（詩）…… 内田月城
□淋しき夕の埋葬 …… 蓼花子
■海內樂壇海外樂壇 ……
□作曲法入門 ……
■音樂通論（一）…… 乙骨三郎
□歌劇物語「ラクメ」…… 牛山充

■發行所
東京音樂學校學友會
振替口座
東京二〇六二番
■發賣所
神田裏神保町
東京堂

■會友募集
半ヶ年會費、壹圓參拾錢以上前納者は會友となり本會所催の演奏會に參聽し得べし
■會友は東京音樂學校所催の演奏會にも土曜日に於て入場の便宜を得べし

■定價　一部　二十五錢
郵稅　一錢五厘
半ヶ年前金稅共　一圓三十錢
一ヶ年前金稅共　二圓五十錢

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

■新思潮■

四月號

四月一日發行

■柊冬青（レミ・ド・グルモン）……上田敏
■寶石を食ふもの其他（イエーツ）……柳川隆之介
■肉躰の秋（イエーツ）……山宮允
■妹のこと（小説）……井出説太郎
■淀見藏（三幕）……山本有三
■伊庭孝氏の誤譯を嗤ふ……三井光彌
■スペクトル（感想）……山宮允
■ニジンスキーの足ごり（感想）……久米正雄
■雜錄……同人

發行所　東京日本橋區本銀町三ノ二　振替口座東京一二〇五五番　啓成社

（定價廿五錢　郵税一錢　半ヶ年　一圓四十錢）

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

毎月一回一日發行
一冊郵税共
金二十一錢

現代唯一之東洋文藝美術雜誌

東亞藝術

第一卷第一號●四月一日發行

六冊前金郵税共
金一圓十六錢
十二冊同上
金二圓廿二錢

□思想と藝術……山路愛山
■吾が劇壇の將來……文學士 瀧村斐男
■日本近世書道史(一)……杉原夷山
■漢書管見……前田默鳳
■東亞藝術の權威……倉林蟠山
□支那最古の美術……文學士 後藤朝太郎
■浮世繪と通俗教育……小林文七
■時代と南畫……中村不折
■僕の浪花節觀……藤井浩裕
■雪を見て……佐久羊村
□學書論(鶴翁一代の書論 本號より連載す)……日下部鳴鶴
■書と歌と時勢と……文學士 尾上柴舟
■近代劍の繪畫的要求……河野桐谷
■篆刻小言……益田香遠
■日本書家の傾向……望月金鳳
□言文一致論(長篇)……巖谷小波
■榛名山……白石慶次郎
■大正博覽會書道審査員紛擾問題……一記者
■口繪今古名書畫數葉
■漢詩(土居香國選)……和歌(尾上柴舟選)……俳句(内藤鳴雪選)……
□椿……文學博士 幸田露伴

▶本誌一千部限ケ年間特價購讀の便法を誌上に於て提供す◀

■□東京神田淡路町二丁目七番地 東亞藝術社□■

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

内田魯庵先生新著

沈黙の饒舌

（『大正文庫』第十二編）

三六判美本
定價八拾錢
郵税八錢

維摩の一默その聲雷の如しといふ今や日本文壇の老維摩内田魯庵先生が沈默の境中に一大獅子吼を試み婦人を濟ひ文士を度し靈肉の調和を說き生活の難易を敎ふその言の懇切なるその論の穩健なる誠に人間處世の好南針たりこれを目して饒舌となしこれを評して咄哉と云はむは蓋し未だ方丈の妙諦に參ずる能はざるもの

『大正文庫』十二册にてこれ全部完成す 書目進呈

東京小石川區原町 東京一五六八六 振替 丙午出版社
東京小石川區原町 東京一三五三番 振替 雜聲堂

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY